猫の惑星

円月塔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猫の惑星

【Ｎコード】
Ｎ０２２８Ｏ

【作者名】
円月塔

【あらすじ】
地球から遠く離れた惑星「ホトトギス」
そこで人々は管理されつつも、のほほんと暮らしていた。

ある日、一匹の白猫が平凡な家庭に育った少女と出会う。
白猫は街中を歩き回り、ある奇矯な振る舞いをする大富豪の一族を知る。
彼らの陰謀は、やがて惑星全体を包む大きな経済混乱へと発展していく。

己が欲望のために繁栄と衰退を繰り返す人々を見て、白猫は何を思うのか？

一匹の猫と5人の人間、合計6つの視点で語られる、エコノミックSF家族小説。

惑星ホトトギスの未来やいかに？

第?部　―1―

第?部
一、路傍にて

「カレーに餅を入れて食うとかー！」
良く晴れたある日のこと。ごくありふれた閑静な住宅街に、突然の叫び声が響く。
僕は思わずそちらを振り向いた。
「お汁粉とは訳が違うんじゃ！」
紋付を着たご老人が、塀の上で寝そべっていた三毛猫に向かって、しきりに何かを訴えている。道端を右往左往したり、跳ね上がった白髪を手でかきむしったり、非常にいらだっている様子。猫は驚いて立ち上がり、すかさずご老人に対して戦闘態勢をとる。鼻の頭の黒い、どっしりとした三毛猫。逃げたりはしないらしい、なかなかに勇敢だ。
ご老人はいったいどんな問題を心の中に抱えているのだろう？　僕はそう思い、近くの電柱の影に隠れて、その一部始終を見守ることにした。
「おかげさまで明日からわしゃあ無一文じゃ！」
ご老人はそう叫ぶと、雪駄を履いた足でガスッと塀を蹴った。
「フシャアアアー！」
三毛猫は全身の毛を逆立てて反抗の意志を示す。にらみ合う老人と猫。
「どいつもこいつも餅ばかり買い込みおってからに！」
それを聞いてハッとした。1月も終わりを告げて久しい今日。あのご老人のお宅では、なんらかの事情で、食べきれないほど餅を買い込んでしまい、ついにはカレーに入れるという行為に及んでしまったのか？　ご老人はその憤りのはけ口を、罪無き市井の猫に求めて

いる？
「みんなわしのことが嫌いなんじゃい！　ああもう！　あのバカ猫どもめが！」
「シャアアアー！　フシャアアアー」
三毛猫はもう、老人に襲い掛からんばかりに興奮している。待つんだ、そのご老人には何かがある！　僕はヒョイっと塀の上に飛び上がると、脇目も振らず駆けつけた。
にゃー。
「ちょっと待つんだ！」
「なんだ？！　なにものなんだぜおめえ！？」
驚いたことに雄の三毛猫だった。しかも飼い猫のようだった。
僕はこの白い尻尾を振ったりヒゲをピクピクさせたりして思いを伝える。
「カレーは鼻が利かなくなるから嫌いだぜ！」
彼は僕にそう言った。僕はひとまず同意する。
「猫か！　お前も猫か！　そろいもそろって気まぐれ猫じゃ！　猫の脳みそじゃ！」
「こいついったいなんなんだよ！」
「落ち着くんだ、暴力は何も解決しない」
「正当防衛なんだぜ？！」
「何か深い事情がありそうじゃないか」
「むしろ俺にとっての不快事情だぜ！」
我々がニャゴニャゴ言っていると、老人は塀を蹴り飛ばし、興奮したまま去っていく。
「今日もカレーじゃ！　明日も餅じゃ！」
肩を怒らせ、大股で歩いていくご老人の背を見送りながら、僕は彼に提案する。
「ついていってみないか？　何か面白い事件が見られそうじゃないか」
「確かにこれじゃ納得がいかねえ、是が非でもあのジジイの不快な

事情を突き止めてやるぜ！」
　我々は頷き合うと、ご老人の後をコッソリつけるようにして歩み始めた。
「おめえ名前は！」
「名はまだ無い」
「俺は人間様に“ふぐり”って呼ばれてるんだぜ。意味は良くしらねえが男らしそうだろ？」
　ふぐり、か。オスの三毛猫は生殖能力を持たないが、それに由来してのことだろう。僕は人の世における彼の名を、深く胸に刻み込んだ。この辺りにはロクな人間がいないのだ。
「一つ宜しくたのむぜ相棒」
「こちらこそ」
陽が微かに西へと傾いた、そんな頃合の出来事である。

二、カレーなる晩餐

クッチャクッチャ……
ズゾッ、ズゾゾゾー……
カレー雑煮を咀嚼する音だけが円卓の間に響く。
世暇家（よいとま）の豪奢な食卓を照らすシャンデリアの光が、どこか虚しく揺れている。カレーも三日続くと飽きるという、遠い昔の人々の格言を、いまさらながらに噛み締める。
「……死にたい」
　僕がそう一人ごちると、祖父のハシが止まった。そしてにわかに震えだす。
　円卓を囲む父、母、叔父、叔母、長兄、次兄、従兄弟、又従兄弟、そして世暇家の末子である僕の手は、もくもくとカレー雑煮をたぐり続ける。
「紀夫！　いま何と申したか！」

「もうしわけありません、お爺さま。あまりにカレー過ぎる空気に耐えかねまして」

僕がそう言うと祖父の手が、もう我慢ならぬというような様子でワナワナと震え始めた。目がギラギラと血走って、額に血管が浮かんでいる。そんなに怒られては寿命に差し障ります。

「このタワケどもが！　こうなったのもみなお前らの愚鈍であるというのに！」

傍らに控えるメイドのドロシーさんがオロオロと目を泳がせる。

祖父は続ける。

「どいつもこいつも、そろいもそろって餅ばかり買い込みよってからに！　あれほど分散投資をせよとワシが口をすっぱくして言っておったに！　そろいもそろって猫頭じゃ！」

そして祖父は怒り余って食卓に拳を叩きつける。茶碗がひっくり返り、カレー雑煮が卓上にこぼれる。慌ててメイドのドロシーさんが万能掃除機を手にして駆けつけた。

――ギィイイイイイン！

場の雰囲気を引き裂くような機械音をたて、カレー雑煮を綺麗さっぱり吸引していく。

流石はターミガン製のカラクリ雑貨だ。

「やかましいがな！　このくらいダスキンを使え！　ダスキンを！」

「も、申し訳ありません！」

そう言いながら祖父はドロシーさんのエプロンドレスの裾を引っつかむと、それを使って食卓をゴシゴシと拭きはじめた。僕は顔をしかめた。

「まったくもって不愉快じゃ。紀夫！　今月のお駄賃はなしじゃ！　反省しなさい！」

そう言って祖父は書斎へ戻っていった。

「二度と出てこなければいいのに、まったく」

母がぼやく。誰も否定しないし、肯定もしない。気の弱い父の額に冷や汗が浮かんでいる。

そして僕は知っている。母は叔父叔母とつるんで祖父を早死にさせようとしているのだ。今回の合成餅への過剰投機も、その一環なのだ。母は、祖父が餅を喉に詰まらせて他界することを期待している。動悸はもちろん祖父の財産。つまりそう言うことなのだ。

「ご馳走さまでした」

僕は早々に食事をすませ、食器を持ってドロシーさんが泣いてるだろう厨房へと向った。

「……シクシク」

案の定、万能掃除機を片手に涙しているドロシーさんの姿がそこにはあった。

今は無き惑星国家ターミガン。彼女はその星の主要産業であった宇宙船製造業の雄、コスモニアワークスの元令嬢だ。昨年ターミガンは、国家管理局のコンピューターが暴走事故を起こしたことがきっかけで国家運営が破綻し、暴動と戦争の泥沼と化した。コスモニア財閥はその混乱に巻き込まれて破綻し、一族は散り散りになったのだ。そんな状況においてドロシーさんは、どういうわけか裏ネット市場の奴隷商品にまで落ちぶれてしまっていた。そして僕が祖父に頼んで、彼女を買い取ってもらったのだ。

「ドロシーさん」

「ああ、紀夫さまの手をわずらわしてしまうとは！　も、申し上げございません！」

ぎこちない日本語を喋りながら僕の食器を奪うドロシーさん。僕はその腕をひしと掴む。

「いいんですよ、ドロシーさん。それよりも、また服を汚されてしまいましたね」

「私がいけないのです！」

「いいえ、いけないのは祖父です。服はまた買って差し上げますから」

僕より年上とは思えない、幼げな表情。温室育ちで、気苦労などまるで感じずに育ったのであろう、その青い瞳。肩ほどに伸びた美

しい金色の髪の毛に、僕はそっと手をかける。
「紀夫さま……？」
僕が守ってあげないと、この人はきっとやつれてしまう。
僕が、この僕こそが、この人を守れるのだ。そして僕は彼女の薄紅色をした唇を奪う。
「！？」
彼女の手から茶碗と箸が零れ落ち、カランコロンと音を立てた。
唇を離すと、彼女はわあと泣いて、僕の腕の中に飛び込んできた。
その素顔とは不釣合いなほどに豊かな彼女の胸が、僕の体にひたと押し付けられる。彼女の体を抱きしめるこの腕にも、自然と力がこもってしまう。
（もっと苛められればいい）
僕はそう思う。
（そのたびに僕はこうして彼女を癒してあげよう）
ふと、目の前の窓を見上げると、夜の街灯りに溶け込むようにして、白い猫が一匹、塀の上からこちらを見ていた。僕がそれに気づくと同時に、その猫は走り去ってしまう。
眉をひそめたような理知的な表情がやけに鼻につく、そんな奇妙な猫だった。

三、惑星ホトトギス

人間が宇宙に旅立ってから、二千年の月日が流れました。
私達のご先祖様は「地球」という星からやってきたらしいのですが、私は歴史の授業があまり好きではないので、昔のことは良く知りません。けれども結局のところ、人間は同じことをずっと繰り返しているようです。お金持ちの人と貧乏な人がいて、ケイキが良くなったりわるくなったりして、そして時々宇宙のどこかで戦争が起こります。いくら故郷の星から遠くはなれてみても、人々の営みと

いうものはそう変わらないものなのですね。
私達の生きる惑星ホトトギスの暮しは、そんな人間の歴史のなかでも《一番ましな時代》だったと言われている、西暦２０００年くらいの暮らしを再現しているんだそうです。
「人間って変ね、ふぐり」
私の膝の上に仰向けになっているふぐりのお腹をなでながら、そう話しかけてみます。
「ぶにゃ～？」
コウコツとした表情を浮かべながら、なんともだらしない鳴き声をかえしてきました。この子ったら、日に一度はこうしてあげないとごきげん斜めなんですよ？
「誰が貴方にそんな名前をつけたのかしら」
私は前のこの子の持ち主のことを考えます。「ふぐり」と書かれたネームプレートだけを残してこの子を捨てた、コッケイな人々のことを。始めはなんて可愛い名前なんだろうと思いました。でも、父上からその言葉の意味を聞いて、私はなんともいえない気持ちになってしまいました。ふぐりっていうのは、男の人の「たまたま」のことなんですって。私が近くの公園の片隅でぐったりしていたふぐりを見つけたとき、ふぐりはひどく荒んだ顔をしていたのです。
「貴子ー、夕食のお時間よ！」
「はーい、いま行きます、お母上！」
ふやけたお餅みたいになっているふぐりをベッドの上に放り出して、私はリビングへと向います。あの様子だと、しばらくはごきげんでいてくれるでしょう。
階段を下りる時に気がつきました。この香りはカレーですね。めずらしい。食卓にはカレーの入ったお鍋と、そしてこんがり焼けた合成餅が並べられています。私はお台所で手を洗ってから食卓につきました。
「お隣さんがおすそ分けしてくださったのよ！」
物珍しげな食べ物を貰った母の頬がツヤツヤとしていて、あたか

も喜びを表現しているようでした。お母上はススキの穂をあしらった季節外れの着物を着て、茜色に染めたセミロングの御髪を左肩に結わえたお姿。背中に取り付けられた「多関節マルチプルマニピュレーター腕」を駆使して、カレーと合成餅を盛り付けています。軽くて細い金属でつくられている母上の機械の腕は、とても軽くて肩がこりにくく、長い時間つけていられるのです。そして本物の手以上に繊細に動かすことができます。

「清美さん、月の3番地に新しいショッピングモールが出来るらしいよ。最近のウェン高のお陰で輸入雑貨が大変お安いようだ、今週末あたり行ってみようかね？」

「あらフジキさん、いいですわね！」

父上と母上のたあいのない話を聞きながら、私は漆塗りの茶碗に盛られた、カレー雑煮のおだしをすすります。カレーの香りと味を作り出すことはシナンのワザと聞いています。なんでも「味の元素」を１００種類以上も混ぜなければいけないとか。複雑で濃厚で、鼻の奥に絡みつくような、そんな素敵な風味が、私の口の中を満たしてゆきます。

「こんな大層なものを『腐るといけないから』なんて謙遜しながら大盤振る舞いなされる世暇さまは、まあ何て素敵なお富豪さんなのかしらねえ」

母上はしきりに感心しています。

「カレーなんて大したことはないのさ、お隣さんにとってはね。なんたってウェン高だ。むしろ大変なのはこの合成餅だよ」

そう言いながら、父上はどこまでも良く伸び、讃岐コロニーうどんのようなコシのある、ねずみ色をした合成餅をお箸で天高く引き伸ばしました。

「餅の合成が惑星ホトドギスの主要産業だということは、小学５年生の貴子だって知っていることだよね」

「はい、お父上」

「うむ。つまりお隣さんは合成餅の投機に失敗してしまったんだよ」

「トウキとはなんですか？　お父上」
「うむ。お隣さんはつまり、合成餅の値段が上がると踏んで合成餅をしこたま買い占めたんだ。でもね、残念なことにそれ以上にウェン高が進んでしまって、ホトトギスの主要な輸出物資である合成餅があまり売れなくなってしまったんだよ」
今ひとつ答えになっていない父上の言葉を私はにこやかに聞き流します。
「お隣さんは損をしてしまったんですね？」
「そうなんだよ、貴子はやはり賢いな、あっはっは」
母も私も、父につられて笑います。いつもと変わらぬ一家団欒、世の中では色々な問題が起きているようですが、我が家はこの通り平和なのでした。

四、あさぼらけ

東の空が明るみ始めた。夜明けのようだ。
ゴミを出しにきた人の、ガサゴソという音とともに僕は目を覚ました。
「コンビニ」と呼ばれる建物の裏に暖かい空気のでる機械があり、おあつらえ向きなことにダンボールが放り出されていたので、これはと思って昨夜はここを寝床に決めた。少し変な夢を見たが、久しぶりに良く休めたと思う。
日の当たる場所に出て、一つ大きく伸びをする。昨日一日、知り合いになったオスの三毛猫とともに、この辺では一ニを争う豪邸の詮索をしていたのを思い出す。
（なんだよただの財産争いかよ！　くだらないぜ！）
そんな三毛猫ふぐりのふくれ顔を思い出す。ああいうわかりやすい猫は嫌いじゃない。
（あームカムカする！　帰って貴子ちゃんに撫で回してもらわない

と気がすまないぜ！　ところでおまえ、野良なんだろ？　寝る場所とかどうしてんだ？　なんならうちに来たっていいんだぜ？　家の奴ら、なんかちょっと変だけど、とりあえず猫の居場所としては悪くないぜ？　メシもうまいしな！）

でも僕は彼の親切な申し出を断った。なんと言うか野良猫なりのプライドみたいなものだ。

（家の奴ら、なんかちょっと変だけど）

そんな彼の言葉が、僕の気まぐれな猫脳をくすぐった。気がつけば僕の足は自然と彼の住む家に向かって踏み出されていた。薄汚れたコンクリ壁のアパートが連なる、雑多な住宅地。ゴミくずや生活用品が散らばる小路を早足で抜けていく。

やがて人の背よりも高い、壁のような塀に突き当たる。僕は近くに転がっていた「ホンカワビアー」と書かれた黄色いケースを足場にし、そこから思い切って飛び上がった。

壁の上に前足を引っ掛けてよじ登ると、朝焼けに照らし出されたホンコンカワゴエ市の街並みが開けた。僕がいま飛び乗った塀のこちら側は貧困層の町、向こう側は富裕層の町になっているらしい。富裕者の街の方には、セラミクス瓦や合成木材、プラスチックを使用した、ファッショナブルにしてトラディショナルな建物が並んでいる。

どうしてこの街はこういう状態になっているのか？　猫の僕にはさっぱり解らないのだけど、きっと人間にとっては大事な決まりなのだろうね。

三毛猫ふぐりの飼われている家は、限りなく貧困層に近い富裕層の町にあった。

両者を隔てるこの壁に半ばめり込むようにして、木造瓦葺き屋根の家が建っている。玄関前の小さな庭には、人の背ほどの松の木が立っていて、表札には『星川』と書かれている。僕は一階部分の屋根に飛び乗ると、二階の窓の前で「ニャー」と鳴いてみた。程なくして、細い木を組んで作られた和風な窓の向こうに、彼が顔をだした。

「うひょ！」

ふぐりは独特の引きつった笑みを浮かべると、窓の近くをウロウロし始めた。すると長い黒髪がヤマト人形のように美しい、ミカン柄のかいまきを着た女の子が窓の向こうに現れた。女の子は僕に気づくと、ぱっと表情を明るくし、そして窓を開けてこう言ってきた。

「ふぐりのお友達！？　寒いでしょ？　どうぞいらっしゃいな！」

僕はその導きに従い、かつ猫らしい警戒心も忘れずに、ソロソロと窓辺に歩みよる。

「怖がらなくてもいいのよ！　待ってて、今お御飯を持ってきてあげますから！」

女の子が部屋から出て行ったのを確認してから窓辺に駆け寄り、そして首を突っ込んで部屋の中の匂いを嗅ぐ。木材とたたみ、そして女の子の体の、石鹸みたいな香りがした。確かに、猫が暮らすには悪くない場所のようだ。

「来ると思っていたぜ」

「君のような猫を飼っている人々に興味がわいたんだよ」

「にゃ？　それってどういう意味なんだぜ！？」

部屋の扉の向こうから、階段を駆け上がる音が聞こえたので、僕はとっさに身を伏せた。さきほどの女の子が、食べ物をかかえてやってくる。

「はい白猫さん！　どうぞお召し上がれ！」

窓際に突き出された漆塗りの皿。その上にコンモリと盛られた食べ物は、どうやら焼き魚のフレークのようだ。まだホクホクと湯気をたてている。急激にこみ上げる食欲に背筋がワナワナと震え、思わず尻尾がピンと立ってしまう。

僕が食べようかどうか迷っていると、ふぐりが先に食べ始めてしまった。

「ああ！　いけませんふぐり！　お客さんが先でしょ！」

そんな言葉も馬耳東風ならぬ猫耳東風。遠慮もくそもなく、ガツガツと食らいついている。

「めっちゃうまいぜ！　お前も食えよ！」
　これで僕が一口も食べなかったら、女の子は面目丸つぶれだろうな。
「では、遠慮なく頂くことにしよう」
　はらぺこの僕達が大盛り焼き魚フレークを平らげるのに、そう時間はかからなかった。そのあいだ中、女の子は窓辺の机の上に頬杖をついて、僕たちの姿を幸せそうに見つめていた。
「おいしい？」
　途中で女の子がそう聞いてきたので、僕はせめてもの礼儀にと、
「にゃー（ええ、とても）」と鳴いて答えてみせた。

五、白眉

　ふぐりのお友達がやってきました。雪のように白い毛並のネコさんです。朝食のイソベ餅を食べている間中、ネコさんが帰ってしまわないかどうか、心配で心配でしかたなかったんです。
「貴子、そんなに急いで食べなくてもおかわりはいくらでもありますよ？」
「いいえお母上、そんなに急いではいません」
　今ひとつちぐはぐな母上の問いかけに、私はにこやかに答えます。食後のお茶を慌てて飲んだせいで、少し舌がヒリヒリします。急いで部屋に戻ると、白ネコさんとふぐりが、小さいゴミ箱の中に潜りこもうと懸命に頑張っていました。いったいどんなお遊びなのですか！？
「みにゃー！」
「ブゴにゃー！」
　よくわからないけど、とにかくネコさんが帰ってしまっていなくて安心しました。でも学校に出発する時間まで、もう１０分もありません。お着替えとお遊びを同時にやらなければいけないようです。

私はふぐりのおもちゃ箱の中から、超伝導ブルブル猫じゃらしを取り出してスイッチを入れ、ふぐり達のすぐ近くに放り投げておきます。そうして、かいまきを脱ぎ、パンツとシャツだけの姿で振るえながら、桐のタンスから着物を取り出して、せっせと着付けを始めます。最近はフケイキなので、メタンのヒーターは節約中です。

「にゃ……」

「ムご……」

ふぐり達はゴミ箱の中にすっぽり収まったよう。出られるのかな？

私は着物の裾を膝の上までたくし上げて折り返し、ミニスカートのようにします。そして、自分でお裁縫をして作った穴にかんざしを挿して止めます。これは最近のホトトギスの流行なんですよ。そしてニーソックスを履きます。母上は、冬は冷えるからルーズソックスを履きなさいといいます。暖かいのは確かですが、ルーズソックスは私が生まれる前の流行です。

そのとき丁度、超伝導ブルブル猫じゃらしが、上手い具合にゴミ箱にぶつかりました。

「！？」

白ネコさんとふぐろはまるで大砲のように、ゴミ箱から飛び出しました。ふぐりは光の速度で猫じゃらしに絡みつきます。白ネコさんはびっくりマークを頭の上に浮かべながら、ふぐりを見たり私の顔を見たり。私もなんだか興奮してしまって、ニーソックスを上手く履けません。

「面白いでしょネコさん。この間アキバコロニーで買ってきたのよ」

私はニーソックスをつま先に引っ掛けたまま、猫じゃらしの柄を動かして、ふぐりと白ネコさんと遊びます。白ネコさんは猫じゃらしより、猫じゃらしと遊ぶふぐりが気になるようです。そしてどういう訳か、ときどき私の方をジッと見ます。ふぐりと一緒で男の子のようですが、たぶんふぐりと違って子供を作れる男の子なのでしょう。お尻の下に丸い毛玉のようなものが二つついています。ジッと見つめられると顔が熱くなってしまいます。相手は猫さんなのに。

そうこうしているうちに、もう残り時間はわずかです。私は急いでニーソックスを膝の下まで履くと、その上にルーズソックスを上履きして、着物の上にウグイス色の防寒服を羽織ります。母はニーソックスが嫌いなので、私はいつもこうしているんです。

振り向くとやっぱり白ネコさんは私を見つめていました。気持ち首を傾げて、なにかとても興味深いものを見るような視線です。良く見ると、ネコさんのおでこにうっすらと、まるで眉毛のような長い毛が生えています。この眉毛のような毛が、このネコさんの表情を何とも賢そうに見せているのでした。

「ねえネコさん。ネコさんは野良ネコさんだから、名前はないんだよね？」

ネコさんは何も言わずにうつむいて、私の膝のあたりをクンクンと嗅ぎました。ふぐりはネコじゃらしにもつれてグルグル巻きになっています。

「私、ネコさんのための名前を思いついたんだけど、どうかな？」

するとネコさんは首を上げて「にゃー」と言いました。なんて賢いネコさんなんでしょう。

「今日からネコさんのこと、『はくび』さんって呼んでいい？」

ネコさんはしばらく考えてから、また「にゃー」と鳴きました。

「はくびさん！　今日から貴方ははくびさんね！　いつでも遊びに来てね！」

私はランドセルを背負って、急いで階段を駆け下ります。時間はもうギリギリです。

「貴子！　ちゃんとルーズソックス履いた？」

「はいお母上、この通り！」

私は母上の前でクルッと一回転すると、走って玄関を飛び出しました。

第?部　―2―

六、午睡の後

いつの間にか眠ってしまっていたらしい。

陽はもう随分と高くまでのぼり、こうして窓際の机に寝そべっていると暑いくらいだった。ふぐりは床の座布団の上で仰向けになって四肢を伸ばし、なんともだらしない格好で寝ている。僕が机から飛び降りると、その気配で彼は目を覚ました。

「んあ？　朝か？」

「昼だよ。外も随分と暖かくなってきただろう。少し出かけないか？」

僕がそう提案すると、ふぐりは窓際に駆け上がり、窓枠を爪で器用に引っ掻いて開けた。

「無用心だね、鍵はしないの？」

「オヤジがずっと家にいるからな」

僕たちは外に出ると、塀を伝って家屋の反対側に回る。途中、書斎のような部屋の前を通り過ぎる。部屋の中には本のギッシリ詰まった棚が所狭しと並んでいて、まるでここまで書物の匂いが漂ってきそうな雰囲気をかもしていた。しっかりとした作りの木製風の机があり、その上にも開きかけの分厚い書物が何冊も散らばっている。そんな部屋の中を、この家の主人と思しき男の人がウロウロしていた。作務衣を来て、ふちの黒い眼鏡をかけている。少し白髪の混ざった髪の毛をいじりながら、なにやら調べ物をしている様子だ。

「何をしているのだろう？　狩にはいかないのかな？」

「ああしてあれこれと考えるのがあの人の狩りなのさ」

表玄関の前の通りに出る。どこまでも続く格子状の路地には人っ子一人いない。この時間帯はいつもこんな感じだ。この街の人々は、どういうわけかあまり外に出たがらない。食べ物に困ることが無い

からだろうか？　僕の知るかぎり、この街に人の食料は十分にあるらしい。

僕がボンヤリと思いふけっているうちに、ふぐりは勝手にどんどん進んで行く。どうやらあの富豪の家へと向っているようだ。

「あのジジイがどうなるか、一つ最後まで見届けてやろうぜ！」

彼の鼻息は、昨日以上に荒々しい。

「そういやおまえ、名前つけられちまったな。良かったのか？」

「まんざらでもないんだ」

「はくび、か！　なんか良い響きだな！　いかにも頭が良さそうだぜ」

「うん、僕もそう思うよ」

名前はともあれあの女の子、どこかで会ったことがあるような。気のせいだろうか？　僕は有るのか無いのか解らない記憶を探りつつ、ぼんやりと空を見上げる。

「なーに鼻のした伸ばしてんだー？」

はて、鼻の下を伸ばしているように見えてしまったのだろうか。

「そんなことはないが」

「貴子ちゃんはオレっちのものなんだからな！　勝手に惚れちゃダメだぜ！」

「だからそんなことではないって……」

野良猫が人の子に恋などするものかと、僕はフンと鼻をならした。

七、イリジウム・オブ・ホトトギス

どうにも筆が重い……。

書物の頁をたぐりつつため息をつく。ふと窓の外を見上げると、うちのふぐりと見知らぬ白猫が連なって駆けて行くのが見えた。識別帯を付けていないようだ。野良猫とは珍しい。

「惑星ホトトギスのナノマシン衛星による管理の導入、その是非」

という題目について記事を書かなければいけない。夜空に浮かべた77個のナノマシン衛星によって、この星を維持するための仕組みの殆どを構築してしまおうというものだ。実現すればゴミを拾う人も下水管を掃除する機械もいらなくなるのだという。なんとも荒唐無稽な構想だが、きちんとした科学的裏付けがあるらしく、こうして書物を解いて調べているのだが……私のこのちっぽけな脳みそには、いまひとつ理解しきれない部分がある。

こんな時でも矯脳器を使えれ一瞬なのだろうが……。

ふとそう思って首を振る。あれは悪魔の道具だ。人の心でさえ機械に代えてしまいかねない恐ろしい代物だ。私はさんざん矯脳器の実用化に反対する記事を書き続けてきたのだが、世論はあっさりと矯脳器の実用化を認めてしまった。星中の有力者がこぞって矯脳器を推奨する論説を発表したからだ。

惑星ホトトギスは無政府国家で、この星に関する決め事などは全て、惑星民全員の多数決で決められている。つまり、実質的な権力はニュースや新聞といったマスメディアが握っているわけだ。マスコミュニケーションの手法をもって世論を煽り、民衆の心をなびかせれば、星全体を動かす事だって出来てしまう。私も僭越ながらその一端を担わせてもらっており、可能な限り世の中をを良い方向に導いていきたいと思っている。

税制に関しては中央コンピューターが管理している。正確には、中央コンピューターに税金の管理を任せることを、ホトトギスの惑星民が承認している。景気の良いときは税率を上げ、悪いときは下げる。今はウェン高デフレ不況だから、中央コンピューターは民衆にウェンを撒き散らすための計算にキリキリ舞いだ。昨年のターミガン紛争の影響で逃避的なウェン買いがすすみ、さらにターミガンという巨大な消費市場が没落したせいで深刻なデフレが生じている。この状況を打破するために、来月には巨額の給付金が支払われるらしい。貧困層にとっては、それだけで数ヶ月は食べていけるだけの額であり、おそらくはありがたい話なのだろうが、インフレリスク

が無いわけではない。
さて、ナノマシン衛星のことだが、いったいどうしたものかな。衛星軌道から舞い降りる１０００京個のナノマシンが、下水を浄化し、ゴミを分解し、私の体のコレステロール値まで調べてくれるなんて、一体どう解釈したら良いものかね？　悪魔の機械、とまでは言えないものの、メリットに比例するデメリットがやはりあるように思う。川の上にプカプカ浮かぶペットボトルやお菓子の袋が綺麗さっぱり無くなることは良いけれど、毛穴につまった角質をゴミと勘違いして分解してしまうかもしれない。ご婦人方は喜ぶかもしれないが、私の週に一度の「毛穴根こそぎパック」の楽しみがなくなってしまう。
　物事には全て、良い面と悪い面があるもので……さてはて、困ったものだ。
――ピンポーン
　おや、誰かなこんな時間に。作務衣の上にどてらを羽織って玄関に行く。
「どちらさまで？」
「世暇家の者にございます」
　そこには世暇家に５００人はいるといわれる下男の一人が、執事風のスーツを着て、手に鍋を持って立っていた。
「若奥様よりおすそ分けの一品をお持ちいたしました。どうぞお受け取り下さい」
「これはこれは、ありがたく頂戴いたします」
　頂いた鍋を台所に持っていき、蓋を開けてみる。そこには赤々とした液体が満たされていた。どうやらチゲ鍋のようだ。いや、チゲ鍋という呼称はあまり適切ではないのかもしれない。チゲとは鍋のことだ、つまりどちらかの言葉に訳すと、チゲチゲ、もしくば鍋鍋になってしまう。チゲチゲの鍋鍋だ。そうふと思いつき、台所で一人「ふっ」と、吹き出してしまう。今日の夕食のときの話題にしようかな。小腹が空いていたので早速味見をさせてもらう。なかなか

に辛い。そして脂のとろみが効いていてコクがある。いかにも血圧が上がりそうな一品だ。

鍋の蓋に便箋が結わえてあったので、取り出して読んでみる。

『ご機嫌麗しゅう、ホンコンカワゴエの庶民のみなさん。先日はわたくしどもの合成餅をご消費いただき、大変ありがとうございました。喜んでいただけたと確信しております。大量にバラ撒きましたので、きっとまだ余っていることでしょう。ですので今度は、寒い季節にうってつけのチゲ鍋を送らせていただきます。必ず餅を入れてお召し上がりくださいませ。決してパスタやラーメンなどは入れてはいけませんよ。ホトトギスの繁栄のためにも、みなさんで一致団結して、内需景気を高めましょう。まあ、聡明なみなさんのことですから、そんなわざわざ愚民と呼ばれるようなことはなさりませんでしょうけど。オーホホホ。　世暇夫稀子』

よくぞここまで高邁な文章を綴れるものだと感心しながら、私はお昼ご飯の合成餅を焼く。それにしても、内需を高めるとか言っておきながら、なんでチゲ鍋なのだろうか？　世暇家の自己矛盾に私は首を傾げた。

八、矯脳器

「それでは紀夫お坊ちゃま、お勉強を始めましょう」

「ああ、始めておくれセバスチャン」

堅いセラミクスの椅子が一つだけポツンと置かれた広い部屋。ここが僕の学習スペースだ。床にはどの部屋よりも毛足の長い絨毯が敷かれ、壁はクッション材で覆われており、万がいち気がふれて暴れまわったりしても大丈夫な作りになっている。僕は一通り部屋を眺めて深呼吸を一つついてから椅子に腰をおろした。

セバスが足元に剣山プレートを置く。僕はそれを強く踏みしめる。これは意識を高いレベルに保ち続けるための、僕独自の工夫だ。そして頭の上にボウル型の矯脳器を取り付け、体が勝手に動いてしまわないよう、ベルトで椅子に固定していく。

「もう少しきつく」

「はい、お坊ちゃま」

屋敷の外から岩を削るような音が聞こえてきた。祖父が庭で何かをやっているのだ。

「耳栓をしてくれないか？」

「はい、ただいま」

「今日の科目はなんだい？」

「量子心理学概要と惑星間為替取引についてでございます」

耳栓がされ、何も聞こえなくなる。目をつぶるとそこには静寂な闇が広がっていた。

「ふむ、では始めてくれ」

僕は静寂の闇に向かってそう投げかける。程なくして闇は反転し、限りない光の渦が僕の意識を満たしてゆく。その光の中に僕は様々なイメージを見る。

両手に「嘘」の文字を持った人々が笑っている……スキンヘッドの男が頭の上に靴を載せて舌を出している……星と星の間にプラスとマイナスの粒子が漂っている……Ｘ－Ｙ軸に描かれた曲線群が複雑に絡みあって竜になる

それら抽象的なイメージの数々が、稲妻の如く僕の頭に打ち込まれていく。強いストレスのために、僕の体は憑かれたようにビクンビクンと跳ね上がる。そのたびに僕は足の裏の剣山を強く踏みしめ、霞む意識にムチを入れる。歯を食いしばり、腹の底から脳天めがけて突き上げる、針のむしろのような不快感に耐える。

時間にして１０分たらずの矯脳学習は、通常学習の一週間分に及ぶ学習効果を僕にもたらす。しかしそれ相応の苦痛は覚悟しなければならない。

矯脳学習が終わり、僕の世界に再びもとの静寂が訪れた。矯脳器を外され、耳栓を取られ、拘束を解かれる。僕のワイシャツは汗でじっとりしていて、肌にピタリと張り付いている。なんともえぬ不快感。まるで脳みそが岩石になってしまったように感じられる。

「お疲れ様でございます」

セバスから手渡された補強液をグッと飲み干す。そしてよろよろと立ち上がり、寝室に向う。記憶を定着させるための睡眠をとらなければならない。廊下に出ると、先ほどの掘削音がより大きく聞こえてきた。岩のように凝り固まった僕の意識に、それは例えようもなく不快に響く。祖父は温泉を掘って、その泉源を担保とした為替取引を行おうとしているのだ。

「時は金なりじゃ！　早く始めるほど、事業を大きく膨らませることができるのじゃ！」

時折、下男達の体にムチが入れられる音が聞こえる。それとともに響く「アー！」という男たちの呻き声。祖父はこうした肉体労働が好きなのだ。機械は人から働く喜びを奪うらしい。

寝室ではドロシーさんが蒸しタオルと着替えを用意して控えていた。僕が汗ばんだ下着を脱ぎ捨てると、彼女は蒸しタオルでせっせと僕の体を拭い始める。僕もそれを一枚もらい、顔の汗をぬぐい、脇の下を拭き、睾丸の裏側を拭く。さっぱりしたところで、ドロシーさんに手伝ってもらいながら、シルクの寝具を着る。

「おやすみなさいませ、紀夫さま」

そう言って退出しようとするドロシーさんの腕を掴む。そしてベッドに引きずり込む。

「の、紀夫さま?！」

彼女の柔らかな体を抱きすくめ、接吻する。そのしっとりとした感触と甘い味わいは、僕の凝り固まった精神を解きほぐすのにうってつけのようだった。

「ん……んん！　い、いけません紀夫さま……学習効果がなくなってしまいますわ！」

彼女は僕の腕を振り解くと、泣きそうな顔をしながら部屋を飛び出していった。

「ふふ……ふふふふ……」

僕の鼻腔から自然と含み笑いがこぼれ出る。確かにね、ちゃんと勉強しないと、お爺さまが厳しいからね。僕は導眠剤のアンプルを腕にインジェクトしてベッドの中にもぐりこんだ。枕には少しだけだが、ドロシーさんの残り香がしみついていた。

九、金の星から来たスパイ

地下の私室に戻り、すぐに口紅を拭いて塗りなおす。

あのクソガキ、すっかりいいように扱いやがって！

けれどもまあ、首尾は上々といったところね。奴隷に扮して世暇家に入り込んではや三ヶ月。あのボウヤ、もうすっかり私への警戒心を解いているわ。この調子で世暇家の情報を根こそぎ奪いつくしてやる。

さて、手に入れた情報をメールにしたためて、お父様に届けなくては。

《世暇の陰謀はあいも変わらず継続中。嫁は投機と見せかけて、親族達に合成餅を大量に購入させました。毎日のように餅が食卓に並びます。大旦那が餅を喉に詰まらせる、もしくは何らかの循環器疾患にかかるのも時間の問題。さらに嫁は餅をご近所に大盤振る舞いし、自己アピールにも活用している様子。この鬼嫁に尻を叩かれた若旦那は、温泉の発掘を大旦那に提案して許諾されました。大旦那は掘り当てられた温泉をホンコンカワゴエの名物にし、投機資源にしようと目論んでいます。この温泉発掘、世間ではまるで無駄な投資とか言われているようですが、温泉は確実に湧きます。その秘密を私は入手しましたわ。世暇ＨＤ株は確実に急騰いたします。正確

な時期が解りしだい、ご報告さしあげますわ――親愛なるお父様へ》

ふふふ、送信完了……。お父様。私達ターミガンの民衆が受けた屈辱、必ずやホトトギスの愚民どもに味あわせてやりましょう。

「ドロシー！　何をしているの！　はやくお買い物にいってきなさい！」

「はい奥様！　ただいま！」

ええい、いちいち偉そうに！　いい気にしていられるのも今のうちなのですよ。今夜のメニューはチゲ鍋。大旦那さまの鍋に特別に入れる体質改善用合成牛脂を買ってこなければなりません。この牛脂には依存性があり、継続して摂取するにつれ、脂っこいものを食べないと気がすまない体になっていきます。もともとは虚弱体質や食欲不振を美味しく改善するために作られた品物。普通の人間が過剰に摂取すれば、どうなるかは言うまでもありませんよね？

屋敷の庭にでると、睡眠を終えたあのボウヤが、掘削現場を呆けた顔をしてボーっと見つめていました。私に気づくと、何とも嫌らしい微笑を投げかけてきました。

「さ……先ほどは大変失礼いたしました紀夫さま」

「いや、僕が少しどうにかしていたんだよドロシーさん、とても失礼なことをした」

「きっと矯脳学習のストレスのせいですわ！　わたくし、紀夫様がとてもお優しい方だということを存じておりますもの……」

そして私はボウヤの手を握ってやります。私は哀れな没落貴族、あなたの寵愛なしには生きてゆけませんのですよ……いまのところはね？

「ドロシーさん、君は本当に聡明で寛大な方だ。平メイドのまま一生を終えて良いわけが無い。僕は必ずあの愚かな家族たちを出し抜いて、この家の権力を握ってみせる。その時はきっと君を、メイド長に任命するよ」

「ああ、紀夫さま……なんともったいないお言葉」

そう言って私は彼の胸に飛び込みます。メイド長ですって。ふふふ、素敵ですね。でも残念ながら、あなたが家族達を出し抜く頃には、私はきっとユートピア衛星でバカンスを楽しんでいることでしょう。惑星ホトトギスの悲鳴を、ラジオか何かで聞きながら。

十、冬の日差しの中で

セパタ野球の競技場なみの広さがある世暇家の敷地。
植樹や彫刻、色とりどりの造花で飾られた芝生の庭をグルッと覆い囲む高くて厚い塀。
その上に箱座りになって、僕らは人間達の不思議な所業を眺めていた。

「あいつら何やってるんだぜ？」
「何かを掘っているようだが」
冬空の下、執事服を脱ぎ捨ててふんどし一丁になった下男達が、老人の指揮の下で「えんやこら！　どっこいせ！」と掛け声を上げながら、人力ドリルを地中にねじ込んでいる。そこから少し離れた道の上で、若い青年と、異国のメイド女性が抱きしめあっていた。
「それにしても哀れな女性だ、いいように扱われてしまっている」
「んあ？　おまえ頭良い割には意外と見えてないんだな」
「どういうことだい？」
「可愛そうなのはあのガキんちょの方なんだよ！　あの女は相当腹黒いんだぜ！」
そう言われて良く観察すると、男性の腕の中でうっとりしているように見えていた女性の目が、一瞬、掘り返されている現場の方を向いて、ギラリと光った。
「ほらな！」
「なるほどね、なんとも恐ろしいことだ」
太陽がちょうど一番高い場所に差し掛かった。ポカポカとした小

春日和。アゴが外れんばかりに大きく口を開けてアクビをするふぐり、僕もつられて大アクビ。

「良い日和だぜ……」

遠くから響く「えんやこら！　どっこいせ！」という掛け声を聞いていると、僕はだんだんウトウトとしてきた。僕に名前をくれたあの女の子は今頃どうしているだろう。一眠りしたらふぐりの言うガッコウとやらにでも、行ってみようか。

ふと頭上に違和感が生じる。僕は首をプルプルと振って、そして辺りを見渡してみる。

「どうしたんだぜ？」

ふぐりが驚いてこちらを注視してきた。口が半開きになっていて、ただでさえ間抜けそうな表情がなおのこと間抜けそうに見えた。

「いや、なんでもないよ。頭の上に何かが飛び回っているような感覚があったんだ」

「それって何でもなくないぜ？」

「まあ、気のせいというやつさ」

「そういもんか？　ま、とにかく今は眠たいな」

たまにこういうことがあるのだが、特に良くないことが起こるわけでもないので、僕は気にしないことにしている。それに今はそんなことより瞼が重くて仕方ない。冬の日の麗らかな日差しの中で、僕は静かに目を閉じる。

冷たく爽やかな風の流れを耳に感じる。掘り返されている土の匂いが鼻をくすぐる。

意識を半分残した浅い眠りは、まるで真っ白な湖面に浮かんでいるような心地がする。

僕は時々夢をみる。他の猫はどうか知らないけど、少なくとも僕は夢をみる。真っ白な湖面に人の影が映るのだ。僕はその人のことを良く知っている気がするのだけれど、その人が誰かなのかはまったく思い出せない。僕は湖面の上にいて、そして湖の底にうごめく人影を見守る。

僕の見る夢は、大抵はそのような夢なのだった。

第?部　―3―

十一、温泉だ！

ざっぱーん！！

「何事なんだぜ！？」

すごい音がした。僕たちはビックリして目を覚ます。

驚くべきことに、世暇家の庭からお湯が噴出している。

「温泉だ！　彼らは温泉を掘っていたんだ！」

「なにはともあれ逃げるぜ！　ビショビショになっちまう！」

僕らは塀を飛び降り、一目散にその場を離れる。

「うはははは！　やったぞ！　わが敷地にこんな財源が眠っていたとはな！」

ご老人は大喜びのようだが、僕ら猫にとってはなんのメリットもない話だ。

「ちょっとかぶっちまったぜ、気持ち悪りぃ！」

「毛を乾かそう、良い場所を知っている」

僕らは昨夜ねぐらにしていたコンビニの裏へと向った。暖かい空気の出る機械は、相変わらず回り続けていた。僕らはその空気にあたりながら、舌で体を舐めたりして毛を乾かす。

「ひどい目にあったぜー」

僕らが毛を乾かしていると、建物の裏口から妙に頬がツヤツヤしたご婦人が出てきた。背中に生えた機械の腕でゴミ袋を抱えている。

「あらフーちゃん、こんなところで油売り？」

そう言ってふぐりの喉を撫でる。星川家の母君のようだ。ふぐりはゴロゴロ喜んでいる。

「あら、お友達かしら、こんにちわ～」

そう言ってご婦人は僕の喉元にも手を伸ばしてくる。僕は少し身を引く。

「あらぁ……」
ご婦人は残念そうに手を引っ込めた。その手は僕の喉をゴロゴロ言わせたくてムズムズしているようだった。僕はちょっと考えてからニャーと鳴き、三歩ほど歩み寄った。
「まあ！」
ご婦人の手が再び僕の喉元に伸びてくる。ご婦人の生身の手、その力加減は実に絶妙なものだった。正直たまらない。ゴロゴロ言ってしまう。ご婦人は僕の体を抱え上げようと、今度は機械の手を伸ばしてきた。それは遠慮したいと思った僕は、サッと身を引いた。
「ん～、もう～、またね、猫ちゃん達！」
ご婦人は残念そうに言い残し、建物に戻っていった。
「ところでふぐり、ガッコウとやらに行ってみたいのだが」
「なにー、おまえやっぱり貴子ちゃんのことが！」
「だから違うってば」
しかし先ほどのご婦人の、あのツヤツヤした頬。あれもどこかで見たことがあるような気がするのだが、はて。通りに出てガッコウの方に歩いていくと、温泉の噂を聞きつけたらしい町人達が、世暇家の方に向かってせわしなく駆けて行くのにすれ違った。
「人間ってなんで風呂が好きなんだろうな？」
「はて、毛があまり無いからではなかろうか？」
僕達はそろって首をかしげた。

十二、家族のこと、自分のこと

学校で歴史のお勉強をしています。覚えないといけない単語がたくさんあって大変です。
「タイセーホーカン」とか「ドージタハツテロ」とか「ギジュツテキトクイテン」とか「チョウミンシュシュギ」とか。こういった丸暗記みたいなことは、キョウノウ器を使ったほうが早いと思うの

だけれど、お父上はキョウノウが大嫌いな人なので、私はこうして「ナチュラル教育」を受けているのでした。ナチュラル教育は先生の呪文みたいな朗読に５０分も耐えなくてはいけません。歴史の授業は特に眠くなるので、好きにはなれません。

今日は２１～２２世紀にかけての歴史を学んでいます。地球という星全体で戦争があって、情報爆弾という恐ろしい兵器が何度も使われました。地球上のいくつかの国は、悲しいことに情報汚染で人の住めない土地になってしまったんだそうです。けれども住む場所を失った人達の中に、とても勇敢な人達がいて、その人達は大きな宇宙船を作って夜空に打ち上げて、そこを自分達の国にしてしまいました。

自分達の住む場所って大切なものだと思います。人間は弱い生き物だから、猫さん達みたいに外で暮らすことが出来ません。生きるためには暖かい家がいります。一緒に生きる家族が必要です。家族みんなが仲良く出来なければ、きっと生きることは地獄そのものでしょう。

昔の人達は、どうして仲良くできなかったのでしょう。そして宇宙で暮らした人達は温かい家庭を築けたのでしょうか？　残念ながら歴史の教科書はそれを教えてくれません。

ふと思います。私がいま暮らしている家庭はどうなのでしょう？　私がいま暮らしている家は、本当に暖かい家なのでしょうか？　生まれつき腕の神経が弱いお母上は、あまり握力がなくて、よく箸を転がしてはケラケラと笑います。私はそれを見ていつも悲しくなるのですが、母上が笑っているので一緒に笑います。

父上はとても頭のよい人です。努力家で、キョウノウ器をまったく使わないのに、使っている人達と肩を並べてギロンします。とても家族思いで、私達を楽しませようとたくさんの冗談を言ってくれます。でもそのほとんどは難しすぎて、私にはよくわかりません。でもお父上が私達を笑わせたいと思っていることはわかるので、私はよくわからないなりに笑います。

私の家に笑顔が絶えることはありません。でも、私の家は本当に暖かい家庭なのでしょうか？　これは贅沢な疑問でしょうか？　家族みんながお互いのことを思いあって暮らせているのだから、それで良いと思ったほうが、良いのでしょうか？

そんな取りとめもないことを考えながら、ぼんやりと窓の外を見つめます。どこからともなく校庭に、二匹の猫が迷い込んできました。白い猫さん、三毛の猫さん……え？

「なんでここにいるの？！」

私は思わず立ち上がってしまいました。あ！

ふと我に返ったときにはもう遅い、教室中の視線が集まってる！

は、恥ずかしい！

「貴子ちゃーん？　何が見えたのかな～？」

先生の優しくも鋭い問いかけ。教室中に笑いが渦巻きます。

「ご、ごめんなさい！」

私は慌てて椅子に座ると、熱くほてった顔を、教科書で隠しました。

十三、小さな人間達

僕の予想に反して、ガッコウという場所は随分と面白そうな場所だった。

入り口と建物の間に、驚くほど広い運動場があり、程よい大きさのボールが転がっていたり、爪を研ぐのにいい堅くて大きな塊が置いてあったりした。その塊の上には、どういうわけか小さな人間の彫刻が立っていた。木の枝の束を背負って運びながら本を読んでいるという、なんとも不思議な姿をしていた。

僕達は、あの女の子がジュギョウというものを受けている間、鉄パイプを組んで作られた四角い山や、ブラブラ揺れるつり椅子、妙に釣り合いの取れた不安定な板などで遊んだ。とりわけ驚いたのが、

不必要なまでに大きいトイレだった。猫が２００匹は同時に座れるくらいの広さに砂がびっしりと敷き詰めてあった。だが残念なことに、そこで僕らが用事を済ませようとするまえに、なにやら奇妙な機械がやってきて、僕らを外につまみ出してしまった。

「なんだよ！　突然首筋掴んで放り投げやがって！」

「首の皮が少し伸びてしまったではないか……」

仕方がないので僕らはガッコウの入り口の上に登り、そこで女の子を待つことにした。

ほどなくして鐘の音が鳴り響き、小さな人間達がワラワラと建物から出てきた。

塀の上に居る僕らに気づくと、彼らはしきりに手を伸ばしたり、飛び上がったりして、僕らを捕まえようとしてくる。たぶん、捕まるとただではすまない。

「ネコさーん！」

あの子の声だった。着物の裾を揺らしながら、お友達の女の子と一緒に駆けて来る。

「貴子ちゃんが授業中に見つけたのってこの子達ね！　かわいいー」

「ガッコウまで遊びに来ちゃったの？」

そう言って手を差し伸べてくるが……こうも人が沢山いては降りられない。

「小さい人間は加減を知らないから嫌いだぜ！　貴子ちゃんは別だけどな！」

「まったくだ。しかしどうしたものかなこれは」

その時、女の子の後ろから忍び寄ろうとしている男の子に僕は気づいた。逃げろ！　と鳴いて伝えようとしたが遅く、女の子は着物の裾を止めていた棒を取られてしまった。

「キャー！」

「てめえ！　俺の貴子ちゃんに何しやがる！」

ふぐりは塀を飛び降りると、勇敢にも小さな人の群に飛び込んでいった。

「フシャアアー！」
「うわ！　なんだこのネコ！　おっかねぇ！」
尻尾をタヌキのように膨らませて威嚇するふぐり。驚いた人の子らは一目散に逃げていく。
「ちょっと！　かんざし返しなさいよ！」
そして逃げる彼らを、お友達の女の子が追っかけてゆく。
「あんた達いいかげんその悪戯やめてよね！」
「悪戯されたくなかったらそんな格好してこなけりゃいいじゃねーか！」
「そんなのあんた達に関係ないでしょ！　このクソガキ！　腐れ！　死ね！」
なかなかに元気な子だ。危険な者達はいなくなったようなので、僕も下に降りる。
「ありがとう、ふぐり」
ふぐりは背中を撫でられ、情けないくらいに鼻の下をのばしている。男の子を追っかけていったお友達が、かんざしを取り戻して戻ってきた。ショートヘアーの良く似合う、いかにも活発そうな女の子だった。防寒服の下に着ているのは、ノースリーブの着物のようだ。
「ありがとユキちゃん」
「貴子もガードが甘い！」
「えへへ、油断した……」
「まったく！　あんな奴らキョウノウされちゃえばいいのよ！」
女の子は着物の裾を直すと、僕達に向かってしゃがみ込んできた。
「さ、帰ろう」
急いで直された裾は微妙にはだけていて、白い下着が少し見えている。腿の内側にバンソウコウが貼ってあるのが見えた。はて、あれは何だろう？　となりでふぐりがブニャッと鳴く。
「ロリコン！」
僕はびっくりしてふぐりの方を向いて、そして慌てて否定する。

「違うってば！」

十四、ホンコンカワゴエ温泉街

夜空を白く曇らせる湯気、湯気、湯気。
庭の真ん中に突然出来た巨大な露天風呂。
それを取り巻くように建てられた木造風のアーケードに幾つもの屋台が並んでいる。
世暇家の広大な中庭に突如出現した、ホンコンカワゴエ温泉街。突貫工事で作られた浴場の板壁には若干隙間があって、絶好の覗き見ポイント。女性客にはやや不評。
「あの隙間さえなければ最高なんですよここは！　何とかして下さいよ若奥様！」
「まあまあ！　覗かれるうちが花というではございませんか奥様。オーホホホ！」
母の高笑いを聞き流しつつ、僕は世暇家の広大な中庭を開放して作られた屋台村をはっぴ姿で視察する。世暇ＨＤの系列会社からかき集めた品物が所狭しと並べられ、通りは人でごったがえしている。不景気で消費の冷え込むホトトギスの惑星民達は、本当はこうして景気よく騒ぎたかったのだろう。夜空を見上げれば、惑星中からの来訪者を乗せたシャトルジェットが引っ切り無しに飛び交っていて、うっかりぶつかって落ちて来はしないかと心配になった。
宴会場の方から拍手と歓声が聞こえてくる。なんだろう？
「温泉が湧いたと聞きまして！」
「星の裏側よりやってきました！」
「いやいや、お前の家この辺だろ！」
去年ブレイクした「やさぐれクマーズ」が、クマの着ぐるみを着て漫才をやっていた。
「まあ、お前の実家のことはどうでもいいんだ。大事なことはやっ

ぱり温泉だろう？　兄弟」
「湧いたねー、ありえないねー」
「そうだね、ありえないよね……って世暇さんに失礼だろ！」
「くまままま、くまままま」
「笑い方きも！」
「いやあ、俺も早く入りたくてさ。待ちきれないね、兄弟」
「ああ、早く入りたいね兄弟」
「ああ、早く“一緒に”入りたいね」
「おい！　『一緒に』は余計だ！　気持ち悪いな！」
「じゃあ別々に入るかい？」
「え？　いや、そういうことじゃ」
「俺が男湯で、お前が女湯だ」
「なんで？！」
「のぞいちゃいやよ」
「のぞかねーよ！　ってか俺が女湯入ったら大変なことになっちゃうだろ！」
「大変な変態でした」
「いやなに上手いこと！　普通に二人で男湯に入ろうよ」
「ならば早くそう言えばいいのに、素直じゃないなあ」
「いやだから！　っておい！　変な笑顔浮かべるな！　ギャラクシー！」
　でた、持ち前の銀河スケールホモネタだ。ホンコン酒に酔ったオヤジが数人、腹をかかえて笑い転げた。この二人、まだ結構いけるみたいだね。
僕は宴会場を後にして、視察を続ける。行燈の列が屋台村を明るく照らし、射的屋の前に子供たちが群がっている。イカ焼きを作っている店から香ばしい煙が立ち昇り、フル稼働し続ける砂糖合成器の周りに入道雲のような綿菓子の山が出来ている。大気中の水と二酸化炭素だけで作られる綿菓子は無料で、いくらでも食べていい。僕も一掴みいただく。それはまるで一夜の夢のように、口の中で溶け

て消えた。

「何もかもワシの強運のなせる業じゃい、不景気なんぞ吹き飛ばしてくれるわ！」

途中でお爺様の声が聞こえた。しわがれた声が今日はまた一段とけたたましい。毎日餅を食べているせいか、その風貌は日毎に福福しくなっていく。お爺様は屋台村の食べ物を片っ端から味見していた。なんだあの食欲は？　母がまた何か盛ったのだろうか？　それともただ単に、この景気良い状況を楽しんでいるだけなのだろうか？　いずれにせよ、いま掴まるのはやっかいだ。僕は気づかれないように通り過ぎる。そして屋台村を一巡りした後、屋敷へ戻る。

地下に下りると、そこにはモップで床を磨いているドロシーさんが居た。こんな時間までご苦労なことだ。彼女は僕に気づいて手を止める。

「紀夫さま？　こんなところに、どうしたのですか？」

「ドロシーさん、まだ掃除をしていたのかい？　もう十分だから屋台村でも見ておいで」

「でも……私一人でお祭り騒ぎの中を歩き回っても、いっそう悲しくなるだけですわ。私にはこの地下室がお似合いなんです……」

「何を言うんだいドロシーさん。君はこんなところで終わる人間じゃない。そうだ、ついておいで、君に良いものを見せてあげよう」

僕はドロシーさんの手を引いて、さらに地下へと続く階段を下りる。鍵の掛かった扉を幾つもを開け、さらに地下深くへと進んでいく。

「紀夫さま、この先にいったいなにが？　私、少し怖いです……」

不安げな表情を浮かべ、僕の手をにぎり返してくるドロシーさん。地下に進むにつれ、配管や動力装置などの機器類が目立つようになってくる。程なくして、岩壁がむき出しになっている洞窟のような部屋にたどりついた。鉄製の階段を、足音を立てないように慎重に下ると、やがて広く開けた空間が見えてきた。赤茶けた光に照らし出された洞窟のような場所。その先で炎が吹き上がる音がする。赤

茶色の光に照らされて浮かび上がる、巨大なタンクと極太の配管類。
そして、その間をうごめく謎の人影。
「あれは?!　若旦那さま!」
それらは巨大なボイラー装置だった。それに紛れるようにして、作業着を着た父の姿が見えた。タンクの上に登って、粉末状の入浴剤を投入している。
「これがあの温泉の正体さ」
ドロシーさんは驚きに顔を引きつらせている。
「紀夫さま、こんなところを見つかったら私ただではすみませんわ……早く戻りましょう」
そう言って僕の袖を引っ張るドロシーさん。ふふ、なんて愛らしいのだろう。
「そうだね。見つからないうちに行こうか。僕はただ確認したかっただけなんだよ」
僕はもと来た道を引き返す。来るときよりも早い足取りで階段を登って行く。ドロシーさんの胸の高鳴りがここまで聞こえてくるようだ。僕も少し興奮しているが、けして何かを恐れているからではない。嬉しいのだ。この屋敷の決定的な秘密を僕はこの手に握った。そして彼女と同じ秘密を共有した。ドロシーの部屋まで戻ってくるころには、僕らはもう肩で息をしていた。何階分もの階段を急いで駆け上がったせいで心臓がバクバクいっている。
「すっかり汗をかいてしまったね。そうだ、続きはお湯に浸かりながらでも話そうか」
僕の提案に、ドロシーは静かにうなずく。
「よし、じゃあお風呂に入る準備をしよう。僕もいったん部屋にもどるよ……そうだな、温泉の入り口側から三番目の隙間で待っているよ。いいね、入り口から三番目だよ」
彼女は怯えたような表情を浮かべたものの、しっかりと頷いた。
僕はそれを確認してから、自分の部屋に入浴道具を取りに戻る。胸がワクワクと高揚してしまって、どうにも気持ちを抑えられなかっ

た。

脱衣所の手前の休憩室には、湯上り姿の人々が畳の上に横になったり、ソーダ水を飲んだりして、心地よさそうにくつろいでいた。

僕は地下でお湯を沸かし続けている父の姿を思い起こす。その姿は実に滑稽だった。

資産家として民衆を動かすべき立場にいる父が、どうして民衆のために汗まみれになってお湯を沸かしているのだろう。そう思うと実におかしかった。僕はけしてあはならない、母のような腹黒い女を嫁にしたりはしない。

脱衣所の手前で二人の少女にばったりと出くわす。ユキと貴子だった。最近じゃ会う機会も少なくなった。昔はよく一緒に近くの公園で遊んだものだけど。

「紀夫お兄様！　お久しぶりです！」

「なあに？　お兄ぃもこれから入るの？　覗いちゃダメだからね！」

「やあ、二人とも早速きてくれたんだね。ご両親もいらしてるのかな？」

「お父上達はお酒を飲んでしまって、もうすっかり出来上がってしまったんです！」

「ははは、そりゃあ困ったね。二人だけで迷子になるんじゃないぞ？」

そう言って僕は二人に手を振って男湯に入る。二人とも随分と大人っぽくなった。特に貴子はきっと良い女になるな。聡明さと穏やかさを併せ持ち、従順で、それでいて一つ芯の通った素敵な女に。僕が将来だれかを娶るとしたら、相手はきっとそんな女性だろう。

十五、ナイスバディ！

「うっわー！　超ひろーい！」

「凄い露天風呂だねユキちゃん！」

池みたいな広さの大露天風呂。たち昇る白い湯気で、反対側が見えないくらいです。

「てか、めっちゃ寒いね！　早く入ろう！」

私達は急いでお湯の中にもぐりこみます。かなりの深さがあって、腰まで体が沈みます。男湯と女湯を分ける板には隙間があるらしいので、その反対側の縁の方に向かいます。ジャブジャブと、もうほとんど泳ぐようにして進んで行きます。なんだかとても楽しいな。

「この辺がいいかな」

座り心地の良さそうな場所があったので、そこにユキちゃんと二人、腰を下ろして肩までお湯に浸かります。宝石のような緑色をした綺麗な温泉です。いいお湯加減。

「オヤジ達、一体何しに来たんだろう。温泉に来て温泉に入らないなんて訳わかんないよ」

「ウェン高の話で盛り上がっちゃったんだね、ついうっかり」

「うちのオヤジがホンコン酒なんって買うからいけなんだ。あの飲んだくれ」

「お父上もお酒が入ると難しい冗談が止まらなくなるんだよ」

「貴子んとこのおじさんはいいよ、暴れたりしないもの。オヤジなんて酔っ払うと『家族のスキンシップだ！』とか言ってセクハラしてくるんだから！　この間なんてお尻を鷲掴みにされたんだ。思いっきり頬っぺたひっ叩いてやったよ」

「ええ！？　それは大変だね」

そうは言いつつも、そんなユキちゃんの家が少しうらやましかったりします。父上の頬を叩くなんて、私の家では考えられないことです。

「ねえユキちゃん、ユキちゃんは何歳くらいまでお父上とお風呂に入ってた？」

「ん～、学校に入るころにはもう別々だった気がするなー。貴子んとこはどうなのさ？」

「え？！　わ、私？　私はね……うん！　学校に入るまでだよ！」

「だよねー。やっぱそのくらいだよね！　うちのオヤジ、最近私を見る目つきがイヤラシイくて、気持ち悪いんだ」

やっぱり私の家は変なんだ。本当は私、今でも父上とお風呂に入っているんです……。

「ん？　どうした？　もうのぼせたか？」

「ううん、そんなことないよ！　ユキちゃんはもう胸も大きくなってきたんだし仕方ないよ。おじさんだって男の人だもの。私なんてまだこんなんだよ」

自分の小さい胸を触ってみます。少し脂肪みたいなのがついて……きたのかな？

「貴子のだってだんだん膨らんできてるじゃん、貴子のおばさんだって結構胸あるでしょ？　あのくらいにはなるよきっと」

「そうかな……」

「じゃあさ、大きくなるように揉んであげよっか？」

「え？！　何をいってるのですかユキちゃん！」

「まあまあ、そう遠慮するなって……」

そう言ってユキちゃんは背後から掴みかかってきて、私の無い胸をさすり始めました！

肌と肌がツルツルとこすれ合って……く、くすぐったい！

「ちょっとユキちゃん、くすぐったいよ！　それじゃおじさんと同じセクハラだよ！」

「あはは、確かにね！　血は争えないなー」

その言葉を聞いて私はハッとしました。ユキちゃんとユキちゃんのお父上の間にある、見えない絆のようなものを感じたんです……って、ユキちゃんいつまで揉んでるの！？

「あ、あの人」

ユキちゃんに言われてそちらを見ると、この辺りでは珍しい他惑星の女の人がいました。

「世暇家のメイドさん……」

「うん、そうだね、うっわー、胸おっきいな……腰もあんなに細く

て」

「肌も真っ白で、すごい美人さんだよね」

その人はタオルで軽く前を隠して、女の人達の視線から隠れるようにして、お湯の中にもぐりこんでいきました。注目されて緊張しているのでしょうか？　少し表情が怖い。

「あっ、仕切りの方に向っていくよ。さすが異星の人だね、大胆！」

その人は仕切り板にぴったりくっついて、わざわざ隙間のあるところの前に腰を下ろしました。一体どういうことなんでしょう？！なんだか私達の心拍数の方が急上昇してきました。

「向こう側にいる人とお話している……の？」

「そうみたいだね……きっと仲の良い男が向こう側にいるんだ、なんかそんな雰囲気だろ？　彼氏さんとかかな……」

「ええ！　彼氏さん？！」

その後の私達の会話は、あのメイドさんとその向こう側の男の人との関係についての話でもちきりになってしまいました。

十六、湯煙ハニー

世暇家の若旦那、世暇誠があのジジイを騙して温泉詐欺を行っていることに、あのボウヤが気づいたみたいです。さっきは少しヒヤっといたしました。私とあのボウヤが内通していることをあの人に知られるわけにはいかない。私は生きるために若旦那にすがっている哀れな妾として、ユートピア衛星に連れて行ってもらわないといけないのですから。

しかし、あのボウヤがこの温泉の秘密を握ったとなると、少しやっかいです。勝手にこの温泉の秘密を暴露されたりしたら計画が頓挫してしまいますもの。温泉バブルが高騰して弾けるその裏で、密かに資金を動かしてボロ儲けする計画です。これって犯罪ですよね？　まあ私には関係ありませんけど。ともかくバブルが弾けるタイ

ミングを逃せば、あの人がユートピア衛星に逃れる時期も遅れてしまいます。さて、どうしたものかしら。

お風呂場に入るとさっそく好奇の視線が飛んできました。物珍しげに私の体を見つめるアジア顔の人々。その煩わしい視線を振り払いながら、入口から三番目の隙間の前まで行って腰を下ろします。胸を少し持ち上げるようにして腕を組み、湯面の上に少しだけ、胸の谷間を晒します。あのボウヤは仕切り板に沿って視線を走らせ、女湯を覗こうをする不埒な輩共を追っ払っているようですが。

「紀夫さま……参りました」

「ああ、待っていたよ、ドロシー」

人のことを気安く呼び捨てにして。お前が横目で私の体を見ていることなど、すっかりお見通しなのです。若いわりには我慢できているみたいだけれど、本当は欲しくて仕方ないのね？

「紀夫さま、この温泉のこと、一体どういたしますの？」

「どうもしないさ。放って置いてもいずれ明らかになる、そうなれば世暇家の信用は地に落ちるだろう。だからそうなる前に祖父の財産を頂いて、その資金で新しい事業を起こす」

温泉のことなどどうでも良いと？　それも何だかつまりませんわね。

「まあ……でも、そんなことが出来るのですか？」

「お爺さまがあの父や母、愚鈍な兄達に財産を相続したがっているとは思えない。僕は母と父の悪巧みをお爺さまに教えるつもりだ。そして僕の事業計画を伝える。お爺さまは怒り狂うだろうけど、きっと僕に資産を分けてくれる。なぜならこの家でお爺さまを愛しているのは僕だけだからだ。この温泉の後始末は、みんな父と母が背負えばいいさ」

「大旦那様にはいつお話に？」

「出来るだけ早いほうが良い、明日にでも」

「そうですか……うまくいくことをお祈りしておりますわ」

「ありがとう」

このとき私は、このボウヤが予想以上に使える人間だということに気づきました。このボウヤは今、ホトトギスの経済情勢を揺るがすほどの情報を握っているのです。これを利用しない手はない。私は慎重に言葉をえらんで、ボウヤに提案してみます。

「差し出がましいことを申し上げますが、紀夫さま。温泉の件につきましては、きっと紀夫さま自身の口でホンコンカワゴエのみなさんに伝えるのが良いと思うのですわ」

「僕に内部告発をしろと言うのかい？」

「はい、ホトトギスの人達はきっと紀夫さまの潔白な人柄に心打たれると思いますわ。それはきっと、紀夫さまの今後の事業にも良い影響をもたらすはず……」

私がそう言うと、板の向こう側がやけに静かになりました。ボウヤはまるで呼吸まで止めてしまったかのように黙り込んで、そしてなにやら頭の中で色々な思索をめぐらせているよう。竹筒から流れ出るお湯の音だけが、私達の世界を満たしてゆきます。

「ドロシー、君は本当に素晴らしい女性だ。事業が上手くいって、僕が新財閥を作り上げた時には、必ずやメイド長になっておくれ」

ふふふ、かかってきたわ。

「はい、その時を待ちわびておりますわ……紀夫さま」

温泉の効果で今頃、世暇ＨＤの株価は急上昇しているはず。お父様はこの波にのって、一体どれだけお稼ぎになったかしら。そしてその波は必ず急降下する。このボウヤの告発によってね。そしてそのタイミングさえ今は私が握っている。急降下にあわせて大量の資金操作を行えばホトトギスはどうなることやら。うふふ……約束の時は間近ですね。

「紀夫さま、わたくし少しのぼせてきたようです……」

そう言って私は。仕切り板に体をもたれさせ、板の隙間に胸を少しだけ押し込みます。

さあボウヤ、男と女がお湯につかって秘密の会話をしましたよ？

そのあと殿方がご婦人に対してとる態度がどんなものかくらい、お

分かりのことでしょう？　さあ！

「そうだね、そろそろ上がろうか。ドロシー、僕は本当に信頼できるパートナーを求めている。君が本当に信頼できる人かどうか、実はまだ確信を持てていないんだ」

さあもっと、もっと思い上がりなさい。

「無理もありません、お金のことが絡むと人はとんでもない化け物になりますもの」

「そうだ、そうなんだ。僕は嫌というほどその例を見てきた。だからこそ、本当に心から信頼できる人を求めているんだ。僕はのぼせ上がったことを言っているかもしれない。だけどあえて言わせてもらうよ。僕に……僕に君を信じさせて欲しい。今夜、君を部屋で待っている」

私はおかしさに顔が引きつりそうになるのを抑えて、しおらしい口調でこう伝える。

「……はい紀夫さま。必ず参ります」

彼が生唾を飲み下す音がはっきりと聞こえました。その音を聞いて私は、私の中で空回りし続けていた幾つかの歯車が、全てかみ合ったのを感じたのでした。

第?部　―4―

十七、ふぐり

ふぐりの飼われている家の敷地、その片隅で僕は目を覚ました。
時々ゴオッという音をたてて蒸気を吹く機械の下が暖かく、ビックリさせられはするものの、居心地はそう悪くなかった。朝日を浴びながら毛づくろいをしていると、屋根の上から「ぶにゃー」という間の抜けた声が聞こえてきた。
「朝飯の時間だぜー」
「わざわざ知らせに来てくれたのか、ありがとう」
塀を伝って二階の窓際に上がる。僕らが並んで待っていると、かいまきを着た女の子がなにやらカリカリしたものを持ってきてくれた。その表情はニコニコと、とても嬉しそうだ。
「どうぞおあがり!」
始めて見る食べ物だったが匂いは悪くない。僕らはそろってガツガツと食らいつく。
「少し喉に引っかかるが、うまい」
「でも俺っちは肉のほうが好きだぜー」
女の子は、今朝はバタバタと着替えたりせず、のんびりしているようだった。
「ガッコウにはいかないのかな?」
「7日に2日くらいガッコウに行かない日があるみたいなんだよ、よく知らねえけどな」
結局この日も、太陽の光がかなり高くなるまでお邪魔していた。ずっと例のブルブル震える何かとじゃれあっていたのだが、遊んでいたのか遊ばれていたのか、よくわからなかった。
「ちょっとお買い物に行かなきゃいけないの、二人で遊んでいてね」
女の子は僕らにそう言ってきた。そして手でいじっていた道具を服

の中にしまう。人間達がケイタイと呼んでいる道具だ。女の子は上着を羽織って、バタバタと階段を降りていった。
僕は女の子がおもちゃ箱の中から出しておいてくれたボール適当に弄ぶ。これといって他にすることがない。平和と言えば平和、退屈といえば退屈だ。遊び疲れた様子のふぐりが、一つ大きくあくびし、そしてボンヤリとこちらを眺めてきた。
「なあおまえ」
「なんだい？」
「もういっそここに居座っちまえばいいんじゃねえか？」
「ふむ……」
「いつまでもこんな半野良みたいなことを続けるのか？　てかお前、昔誰かに飼われていたりしてたんじゃねえのか？」
「飼い猫だった記憶はまったくないんだ」
「でもお前、どう見ても野生のネコじゃねえよな。野生にしては人間になれすぎてるぜ」
「そうだな、なんでだろう」
「まあ、俺っちは大して気にしねえけどさ。でもおまえやっぱ、少し変わってるぜ」
「そうかもしれない。でも大抵の猫は昔の飼い主なんて覚えてないじゃないか」
「だな。良いことは大体忘れてしまうもんだしな。でも嫌な思いをしたことはいつまでも覚えてるもんだ。まったく俺ら猫の嫌な習性だぜ」
「なにかあったのかい？」
「ああもちろんだ。こう見えて結構苦労してきたんだぜ。前の家はあのジジイの家と同じでかなり金持ちだったんだ。ペットショップって所でミイミイないていた記憶がちょっと残っているんだが、どういうわけか俺っちはかなりの金額で売られていたらしいんだ」
オスの三毛猫は生まれる確率が極めて稀で、高値で取引されるという。

「俺っちは散々しつけられてな、もうしつけ地獄だったぜ。仰向けにでもなって寝そべっていたらムチやビンタが飛んでくるんだ。まったく、イヌじゃねんだっての。まあメシは極上だったからさ、半年くらいは我慢してお行儀よくしてたよ。でもな、ある日その家のガキんちょにいたずら書きされた時にもう我慢ならなくなっちまった！　思い出すだけでも忌々しいぜ」

「なるほどね」

「この家はとても自由にさせてくれるから気にいってんだ。このままずーっとこの部屋でごろごろしていたいぜ」

そう言ってふぐりはまたアクビをする。そろそろ昼寝の時間だ。

「俺っちはな、俺っちにいたずら書きしたあのガキのことをな、本当は一番信頼していたんだ。全然厳しくなかったし、かまってもくれたしな。でもな、一度でも裏切られちまうとな。それが信頼していた相手ならなおさらだ。一度でも人間に裏切られた猫はもう一生人間を信じられなくなる。お前も猫ならわかるだろう？」

そういって彼は、珍しくしょげた顔をする。

「確かに。もしかして、あの子によく体を触らせているのは、その反動だったりするのかい？」

「うひょ！　よく解ったな！　おまえやっぱり頭良いよ、人間みてえだ！」

急に元気になって鼻の下を伸ばした彼をみて、僕はフッと笑う。

「何だぜ？　気味がわるい」

「いや、思いのほかちゃんと考えて生きているんだなと思ってさ」

僕がそういうとふぐりは、さも心外であるかのような面持ちでブニャっと鳴いた。

「ぶにゃ？　それってどいう意味なんだぜ！？」

十八、公園にて

カニさんウィンナー用ウィンナー（合成タンパク質使用）のタイムセールがあるんです。
慌ててお父上からお駄賃をもらって、買い物袋をもってスーパーに向かいます。お母上はパートのお仕事中で買い物に出られないんです。スーパーにはご近所中の主婦さんや主夫さんがやってきていて、凄い列が出来ていました。お店の外まではみ出てます。
１０分ほど並んで、ようやく私はカニさんウィンナー用ウィンナーを買うことができました。それともう一つ、自分のお小遣いを使ってある物を買います。最近はどこのお店も混んでいて、ウィンナー一つ買うのも大変です。父上が言うにはケイキが良くなってきたんだそうです。
私はスーパーの中の人ごみを抜け出して、なんと言えない達成感とともに家路につきます。それにしてもいいお天気。まるで春みたい。足取りが勝手に軽くなる。
世暇さまのお屋敷の前を通ると、庭で露天風呂の工事をしていました。板をきちんと張りなおしたり、石の彫刻を作ったりしています。正門の脇に紀夫お兄様が立っているのを見かけました。どうやら工事の様子を見守っているよう。
「こんにちは、紀夫お兄様」
お兄様は私に気づいていないみたいです。何でしょう？　急に凛々しくなられたような？　お兄様の頭の中で色々な考えが渦巻いているのがひしひしと伝わってきます。
「お兄様？」
「ん……ああ、貴子ちゃんか、お買い物？」
「はい、バーゲンセールがあったんです。お兄様は露天風呂の工事ですか？」
「そうだよ。改修工事の責任者にされちゃってね」
「まあ、それはすごいです！」
私より５つ年上の紀夫お兄様は、もうこんなに立派に働いています。
「そういえば、珍しくお爺様の姿が見えませんね」

「お爺様は今朝、隠居されたんだよ」
「ええ!?」
昨日の夜はあんなにやる気まんまんだった世暇のお爺様がご隠居？
「驚いたかい」
「は、はい！　とても急な話ですね」
「うん、でも祖父はかなり以前から隠居を考えていたらしいよ」
「そうなんですか……では叔父様が後を継がれたのですね」
そう私が聞くと、紀夫お兄様はとても深刻そうな顔つきになりました。聞いてはいけないことだったんでしょうか？　世暇家の良くない話はたまに聞きますから。
「ご、ごめんなさい……」
「ふふ、いいんだよ。この家には色々あるからね。お爺様なら散歩に出かけたよ。たぶん、その辺りの公園で日向ぼっこでもしているんじゃないかな。寂しい思いをしているかもしれないから、貴子ちゃん、良ければ行ってあげてくれないかな」
お兄様に言われて近くの公園に行ってみます。そこには世暇のお爺様が、どこか寂しそうな様子でベンチに腰かけていました。
「世暇のお爺様」
「んん？　おお、星川さんとこの貴子ちゃんか。お買い物かな」
「はい！　カニさんウィンナー用ウィンナーが特売だったんですよ？」
「ほほほ、その様子だと良い買い物が出来たようじゃの。良かったのう！」
そう言ってお爺様は顔をクシャクシャにして笑って、私の頭を撫でてくれました。それでもその枯れた声の裏側には、やっぱり少しだけ寂しそうな響きがこもっているのでした。
「そうなんですよっ。このウィンナー、初めから切れ込みが入っていて、火を通すだけで簡単にカニさんになるんですって。今晩お夕食を作るときに貴子挑戦してみます！」
お爺様はにっこり笑って何度も頷くと、それっきり何も言わなくな

ってしまいました。ただ空の上のお日様を、目を細めて見つめています。こういうときって、どういう言葉をかけてあげればよいのでしょうか……。

「あ、あの、露天風呂とても気持ちよかったです。またお父上とお母上と入りにいきますね！」

そう私が言うと、お爺様はますます悲しそうな顔をなさいました。どうしましょう、どうしましょう、こんなときお父上だったらきっと、気の利いた難しい冗談を言って、お爺様を笑わせてあげられるのでしょうけど。

「すまんね、貴子ちゃん」

お爺様はそう言って、また私の頭を撫でました。

「きっともうすぐ、あの温泉は無くなるじゃろう」

「ええ？　そうなんですか？！」

「ああ、アレはワシの、最後の悪あがきみたいなもんじゃ。ワシが隠居すれば直ぐにでも消えてなくなるじゃろうて」

「え、でもさっき紀夫お兄様が……」

「紀夫は紀夫でええんじゃ、アレはまだ若い。この家のしがらみになんぞ関わらずに、自由にやればいいんじゃよ。紀夫は若い頃のワシにそっくりじゃ。いつも周りを気にしてピリピリして、頭の中にいつも野心を秘めていて、そしてなりよりワシに似て助平じゃ、かっかっか！」

事情はよくわからないけど、お爺様は何だか元気になってきた。私は少し安心します。

「お嬢ちゃん、あれはきっと良い実業家になるで、今のうちに目をつけておけば、玉の輿に乗れるかもしれんぞい？」

「お、お爺様？！　そんなわたし！」

「かっかっか！　助平なのがたまにキズじゃがの！　さて、こんなところでいつまでもボーっとしていても始まらんわい、残りの人生を精一杯楽しまなければの！　それ、どっこいしょ！」

そういってお爺様が立ちあがったその時……。

「ん?!　うう!」
お爺様は突然頭を抑えてうずくまったのです!
「お、お爺様?　お爺様!」
「う、ぉ、ぉ……あ、頭が……」
「お爺さま!　待っていてください!　すぐに人を呼んできますから!」
私は一目散に世暇のお屋敷に走ります。
「お兄様!　お兄様ー!」
お兄様は門のところにはいませんでした。その代わりに、世暇のおばさまが、買い物かごをもって出てきました。
「あーら、貴子さんじゃないですか、どうしたんですかそんなに慌てて」
「おばさま!　大変です!　お爺様がさっき公園で倒れられて……っ!?」
……私がそういった瞬間、一瞬おばさまの表情に鬼のような微笑みが浮かんだんです。
「まあ!　大変大変!　お前たち!　お前たちー!」
おばさまそう叫ぶと、世暇さんで働いている人達があちこちから湧き出てきました。
「大旦那様が倒れれられたそうよ!　急いで担架を!　お医者様を!」
男の人達が慌ててバタバタと走っていきます。おばさまはいきなり私をだきしめて、髪がくしゃくしゃになるほど頭を撫でてきました。どうして……?
「ありがとね貴子さん!　あなたは命の恩人ですわ!　天使のように私の前に現れて、大切な報告をしてくださいましたわ!　大旦那のことでしたら心配いりませんよ、私達のお屋敷には腕の良いお医者さんが専属でついてますからね、すぐにでも治療しますからね!」
そうおっしゃるとおばさまは、公園の方へと走っていきました。その後姿が、どういうわけか喜んでいるように見えてしまって、私は

しばらくの間そこから動けませんでした。

十九、父と娘１

夕食時になった。仕事も一段落ついたので、私はリビングへと向かった。そっとキッチンを覗くと、貴子は清美さんと夕食の準備に取りかかっていた。どうやら昼間買ってきたソーセージを茹でているらしい。買い物から帰ってきた時、貴子は酷く沈んだ表情をしていた。私が不審に思って声をかけると、あわてて笑顔を取り繕い「なんでもありません」とだけ言って、足早に部屋へと戻っていってしまったのだが……なんだったのだろう。

「お母上、カニさんの足が開いてまいりました」

「まあ本当、カニさんの甲羅の模様まで浮かび上がってきたわね」

私は貴子の様子に変わりがないことを確認してから、何も言わずに食卓についた。お台所は女の戦場だ。私の介入する余地は残されていない。卓上には清美さんがいつも用意しておいてくれるホンコン酒が置いてある。杯を返して酒を注ぎ、一口だけ飲んで息をつく。

「ねえ貴子、レタスを千切ってちょうだい」

「はい、お母上」

電子ビジョンのスイッチを入れ、ニュースを眺めながら貴子のことについて考える。世暇家の大旦那が倒れられた報は、ご婦人方の噂話という超高速通信網によって、日が暮れるころにはホンコンカワゴエ中の知るところとなった。軽い脳卒中のようで、命に別状はないらしい。

噂話によれば、なんでも大旦那のことを一番に知らせたのが貴子だったのだという。貴子のあの暗い表情はその時のショックによるものなのだろうか？

うむ……しかし、帰ってきた時の貴子の表情にはもっとこう、複雑な事情がこめられていた。世暇家は財を成す家系の概ねがそうであ

るように、色々と問題を抱えている。大旦那様の財産をめぐる確執があるのはまず間違いないことなのだ。もしかすると貴子は、そのいざこざに巻き込まれてしまったのかもしれない。特にあの若奥様は、時にその本性をむき出しにすることがあるからな。貴子があまり見たくないものを見せられてしまった可能性は大いにある。

「フジキさん、夕食の支度ができましたよ！」

「ああ清美さん、ありがとう」

夕食の仕度が終わったようだ。清美さんは機械の腕にオカズのもられたお皿を二つ持ち、そして力のあまり入らない生身の両手でもう一枚の皿を持ってやってきた。貴子はお味噌汁の鍋を持って来て、卓の上に置くと何も言わずに席についた。

「貴子もありがとう。このソーセージは貴子が一人でやったのかい？　よくできているね」

「お父上、ソーセージではなくウィンナーです」

「はは、そうか、それはついうっかりだったな、ははは」

「あらやだフジキさんったら、うふふ」

娘に元気がないせいか、食卓の空気が重い。いや、娘のせいなどにしてはいけないな。娘が気を重くしているのは、私達の気遣いが足りないせいでもあるのだから。何か話して、貴子の気をほぐしてやらなければ。

「貴子や、頂きますの前に少しだけ話しをしようか」

「はいお父上、なんでしょう？」

私は世暇家の話をしようと思っていた。私は大人達の間でしばしば繰り広げられる狂想劇について、貴子に何かを語る必要があったのだ。しかし私は恐ろしかった。今の貴子がこの世界の穢れた部分を知るに足る段階にあるかどうか、確信が持てなかったのだ。

「貴子は空売りという言葉を知っているかい？」

「……いいえ、知りません」

私は結局お茶を濁してしまった。

「ふむ、そうだろうね。普通に暮らしていて身に付く言葉ではない

からね。そうだな、例えばこのウィンナーの値段が一個１００ウェンだったとするね」
「はい、１００ウェンだということにするのですね」
「うんうん、そして、このウィンナーの値段が９０ウェンに下がることがわかっているとしたら、貴子はどうする？」
「はい、値段が下がらないうちに、誰かにあげるか、自分で食べるかしちゃいます」
「ははは、まあそうだよね。それが普通だね。でも父さんはちょっと違うことをしてみる。貴子のウィンナーをちょっとだけ借りる。いいね、借りるだけだ。あとでちゃんと返す」
「はい、お父上にウィンナーをお貸しします」
私は新しい箸で貴子の皿の上のウィンナーを頂く。
「そして借りたウィンナーを父さんは１００ウェンで清美さんに売る」
「フジキさん、私そんなに沢山たべませんよ」
「ははは、とりあえず買ったことにしてくれないかな。そしたらちょっと待つ。ウィンナーの値段が９０ウェンに下がるまでね。下がったら９０ウェンになったウィンナーをまたどこからか買ってくる。そして父さんは貴子にウィンナーを返す。さあビックリだ、父さんは１０ウェン儲けてしまった。これが空売りの仕組だよ。自分のものじゃないものを売る、だから空売りと言うんだね」
「お父上、私なんだか損をした気分です」
「フジキさん、私なんか確実に損をしたわ」
「そうだね、父さんはちょっとずる賢かった、ははは。しかしまあ物に値段が付いていると、どうしてもこういうことが起きてしまうんだよ。不思議なものだ。けどね、このウィンナーにはきっと値段なんてつけられはしないさ。だって貴子が茹でたウィンナーなんだからね」
「まあ、そんな上手くまとめちゃってフジキさん！」
清美さんには良く受けたみたいだ。口元を抑えてクスクスと笑って

いる。貴子もその顔に柔らかな笑みを浮かべてくれている。どうやらわかってもらえたようだ、よかった。

「じゃあ食べようか、冷めないうちに。頂きます」

今日は久しぶりに餅ではなくて白いご飯だ。貴子の茹でたウィンナーと一緒に食べる白いご飯は、とても美味しかった。

二十、父と娘２

母上が食器を洗っている音がお台所から聞こえてきます。食事が終わって、今は父上と二人で電子ビジョンを見ているところです。

《さあ今日もやってまいりました断崖絶壁！　よじ登るのはもちろんこの方！　キャッティー・クルーガーさんだ！　みなさん拍手～！》

私はナレーターさんの声に合わせてパチパチと拍手をします。父上はクルーガーさんという無精ひげを生やした男の人の手足が気になるみたいです。

《やあ！　お茶の間のみんな！　今日もこの猫の手と足と使ってシュルシュルと昇っちゃうよ！　もちろん命綱なんてつけない。落っこちる瞬間を見逃さないでくれよ！》

《はいクルーガーさん！　番組を終わらせるようなことは言わないでくださいね！》

画面からこぼれ出る「ワハハハ」という声にあわせて、私もウフフと笑います。さっそくクルーガーさんは、命綱もつけずに昇り始めました。ときどき崖から手を離して、足のかぎ爪だけでその場に留まって、一服したりします。

《クルーガーさん！　番組を終わらせないでくださいね！》

《ハッハー、いつ終わるかわからない人生だからこそ、面白いんじゃないかい？》

《く、クルーガーさーん！（ワハハハ）》

「あの……お父上」
「いやまったく、あの手足はどうなっているんだろうね？」
私は開きかけた口を閉じる。父上はあごをさすりながら番組に見入っていました。実は私、あの手足が好きじゃないんです。まるで本物の猫の手足をちょん切ってつけたみたいで。
実は父上に言いたいことや聞きたいことがたくさんあるんです。もう一人でお風呂に入ろうと思っていること、世暇の奥様の、あの恐ろしい表情のこと。でもどう言い出せばいいかわからなくて、何をどう言っても父上を困らせてしまいそうで、うまく話しを切り出せません。
そう思っているうちに、クルーガーさんは頂上にたどり着いてしまいました。崖から崖に飛び移ったり、わざと岩のでっぱりを掴みそこねたりして、お茶の間に冷や汗をバラマキながら。
《いやー、ひやひやしました！　ディレクターの寿命がまた数年縮まりましたよ！》
《ハッハー、このくらいでビビッてちゃいけないぜ？　来週はなんとあのヘルズノーズに挑戦だ！　ナレーター君、ヘルズノーズって知ってるかい？》
《もちろんですよクルーガーさん。ヒヨドリ山脈の最難関ですね！　標高３０００メートルの高みに出っ張った地獄の鼻！　誰が呼んだかヘルズノーズ！　登るのも厳しいが、撮影もするのも命がけ！　またディレクターの寿命が縮まっちゃう！》
《ハッハー、今からワクワクだねー。それじゃお茶の間のみんな、来週は時間を拡大してお送りするぞ！　見逃すな！　じゃあな、また来週！》
番組が終わると同時に、急いでお風呂に向います。父上が入ってこないうちにすませてしまうことにしよう。そうすれば父上は自然と気づいてくれるかもしれない。
脱衣所で着物を脱ぎ、たたんで竹のかごに入れます。早く入って、早く出たいのに、電気五右衛門風呂のお湯がいつもより熱く沸いて

しまっています。いつもなら父上が水を入れたり、かき混ぜたりして冷ましてくれるのだけど、今日は自分で頑張ってやります。

「熱い！」

お湯で体を流してみたのですが、まだかなり熱い。でも我慢して体や頭を洗い始めます。

何をやっているのかな。自分でもそう思います。どうして今夜はこんなに父上とお風呂に入るのが嫌なんだろう。父上が私に何かを隠しているから？　それに私が気づいてしまったから？　わからない。紀夫お兄様のことも、世暇のお爺様が倒れたことも、そして世暇のおばさまの、あの恐ろしい微笑みのことも。大人の人達はいったい何を考えているんだろう。

体を洗い終わったので、お湯に浸かります。板が上手く踏めません。電気五右衛門風呂は底が熱くなっていて、湯面に浮かべた板を沈めて入らないと火傷してしまいます。

「はっ……」

脱衣所に人影が。父上が来てしまいました。間に合わなかった。ともかくお湯に浸かろう。やっと沈めた板の上に、私は体を乗せました。お湯が少し溢れます。お湯はとても熱くて、全身の肌がピリピリ痛む。

しかしどういうわけか、父上は中々入ってきません。それはそれで困ったことでした。

何をしているのですか父上？　何を考えているのですか父上？

週に一度の鼻パックをつけているのですか？

「貴子、入るよ」

父上がお風呂の入口で声をかけてきました。どうして？　いつもそんなこと言わないのに。

「おお、貴子。自分で板を踏めたのか」

「お、お父上、水を足したらお湯が一杯になってしまいました。一緒に浸かったら、お湯がたくさん溢れてしまいます」

「そうみたいだね。じゃあ父さん、先に体を洗うよ」

そう言って父上は、垢こすりに石鹸をつけて、ガシガシ体を削るように洗いはじめました。

「なあ貴子」

「……なんですか？」

「何だか今日はずっと元気がないね、大丈夫かい？」

「世暇のお爺様が倒れられて、ショックでした。でも大丈夫です」

大丈夫？　大丈夫かと聞かれて、大丈夫じゃないとは答えにくいものです。

「若奥様のこともあるんだろうね、貴子」

そういわれて私は、父上が私を理解してくれたという嬉しさと、父上に嫌なことを思い出させられたという悲しさを、同時に感じました。

「あまり、考えたくありません。すごく怖かったから」

「うむ、貴子にはまだ難しい話だと思うよ。良くわからないこととというのは、それだけで恐ろしく感じられるものだからね」

「貴子にも……そのうちわかる時が来ますか？」

「ああ、いつかは来るよ。成長するにつれて少しずつわかってくるさ」

「いつ、わかりますか？　紀夫お兄様くらいの年になればわかりますか？」

私がそう訪ねると、父上はしばらく黙りこんで、そして静かな声で言いました。

「貴子、世の中に知らないでいた方が良いことだってある。無理して考える必要はないんだ」

それが父上の本音なのだと思いました。父上はきっと、私にずっと子供でいて欲しいだと思いました。なんだろう、この感覚。頭を押さえつけられて、湯船の中に沈められていくような、そんな感覚。悔しい。なんだかとても悔しい。

「父上！」

胸の中にたまっていたもの噴出した。もう自分で自分の気持ちを

どうにもできない！

「貴子？」

「父上はいつもそうです！　難しいことを沢山知っているのに！　貴子にも色々なことを教えてくれるのに！　本当に貴子が知りたいことはまったく教えてくれません！」

「貴子、父さんはね」

そう言って父上は、泡で汚れた両手で私の肩を掴もうとしてきた。私は反射的にそれを振り払う。触られたくない。体がそう言いました。どういうわけか目の奥が熱くなってきて、鼻の奥がツーンと痛くなってきて、なんだか悲しい気持ちでいっぱいで……。

「父上、貴子はもう子供じゃありません！　ごめんなさいお父上。明日から貴子は一人でお風呂に入ろうと思います！　ごめんなさい！」

「あ、ああ……」

父上は、今まで聞いたこともないような頼りない声を出すと、湯船のお湯を一杯すくって体を流しました。そして私が湯船から出るのと入れ替わりに、父上は湯船へと沈んでいきます。

「すまない、貴子。貴子はいつまでも子供じゃあないんだよな……」

振り返ってみた父は、窓の方を向いて、少しうつむき加減でした。

お父上と喧嘩をしてしまった。

お父上と喧嘩をしてしまった。

私は脱衣所で着替えている間中、まるで念仏のように、そう頭の中で呟いていました。

二十一、猫を生かした冒険心

ふぐりが暇で暇で死にそうだというので、僕はあるところへ連れて行くことにした。夜の住宅街を二匹並んで歩いていく。

「なんだかきも試しみたいだな、冬だけど！」

「スリルと刺激は保障するよ」
星川家から猫の足で5分くらいのところに、6階建ての薄気味の悪いビルが建っている。最上階の窓の一つに小さく《NMクリニック》と書かれている。意味は良くわからない。
「ここか!?　でもどうやって入るんだ?」
ビルの入り口には鍵がかかっていて猫の手ではどうにもならない。
僕はふぐりを促すと、隣のビルの壁についている管をよじ登って、2階くらいの高さにある機械の上にあがった。
「そこの壁に、僕らがちょうどくぐれそうな太さのパイプが突き出ているだろう?」
「ああ、鉄の枠もついてて良い足場になりそうだぜ。ちょっとサビてるけどな」
「ここからあそこに乗り移って、パイプを潜り抜けて中に入るんだ」
「まじでか!　失敗したら痛い目みそうだぜ!」
「スリルと刺激は保障するっていっただろ?」
まずは僕が先行する。猫の6匹分くらいの距離をサッと飛びぬける。錆びた鉄の枠に前足を引っ掛けよじ登る。足場の上で体勢を整えて、突き出ているパイプの中に頭を突っ込んだ。
そのままいったん建物の中に入ってまた戻ってくる。そしてふぐりが無事渡れるか見守る。
「俺っちも猫の端くれ!　こんくらい朝飯まえだぜ!」
強気なセリフを吐くと、ふぐりはその大きな体を空中に放り出した。月の光に照らされた三色の体が、重い放物線を描いて宙を舞う。いけるか?　枠に前足を上手く引っ掛けたものの、ふぐりの体はその重さでずり落ちそうになった。
「おわ!　うひょ!」
そしてしばらくそのままブラブラしていた。僕は肉球に汗握って見守る。ふぐりは何とか体を引き上げて、パイプの中に体を突っ込むと、ミチミチになりながら這いずってきた。僕はそれを確認して、後ろに戻って建物の中に入る。ふぐりも程なくしてパイプから出て

くる。
「ふぃー、死ぬかと思ったぜー」
「僕も冷や冷やしたよ。帰りは比較的楽だ。さ、行こうか」
建物の中には幾つもの部屋があって、わけのわからない機械で埋め尽くされている。お菓子の袋や透明な容器などが放置されている部屋もあって、人が生活していたと思しき痕跡が残っている。部屋の一つに巨大なオリが三つ置いてある部屋がある。そこに置かれた一つの機械の前で僕らは足を止める。機械の足の下にある受け皿にフレーク状のものが貯まっている。
「なんだぜこのブニブニしたやつは？　すごく微妙な匂いがするぜ。食べられるのか？」
「食べられるんだよ、これが」
僕はそういって、そのフレーク状のものを口にする。
「大丈夫なんだぜ？！」
疑問なのか驚愕なのか良く解らない声をあげて、ふぐりもそれにかぶりつく。
「ホントだ食べられるぜ、美味くも不味くもないけどな！　なんでこんな場所知ってんだ？」
「何かのはずみで迷い込んだんだ。よほどお腹が空いたときしかこないよ。薄気味悪いからね」
僕らが皿の上にあるものを全部食べきると、機械は勝手に動きだす。
「なんだ！？」
ふぐりはビックリして飛び退いたけど、僕はわかっていたから特に動じない。しばらくすると、またあのフレーク状のものが機械から出てきて皿を満たした。
「なんだこれ！　ぶったまげた！」
「これのお陰で僕は飢え死にしなくてすんだようなものなんだ。この街はどういうわけか、鳥やネズミが少ないからね。虫は少しいるけど今は冬だし、あんまり美味しくないし」
「そうだったのか。なんかお前も苦労してるんだな。いやしかしぶ

ったまげた」
奇妙な満腹感を得た僕らは、その部屋を後にする。
「他にもあんなのがあるのか？」
「いや、あれだけだよ。食べ物が出てくる機械は。別の階はまた違った機械があるのだろうけど、今のところ行ったことが無いんだ。どうにもそういう気にならなくてね。何となく匂うだろう？　上の階から」
「ああ、匂ってきてるぜ。生き物が死んで腐ったときの匂いだ」
僕はもうこれで帰ろうかと、出口に向かって足を進めたのだが、そんな僕を呼び止めるようにして、ふぐりは「ぶにゃ！」と鳴いた。
「おい、ここまできて帰っちまうのか？　このままじゃ収まりがつかないぜ！」
「調べるというのか？」
「あたりまえだぜ。俺っちはな、わからないことをわからないままにしておくのが大嫌いなんだ。今夜中に調べつくすんだぜ、あのパイプをくぐるのはもうこりごりだしな！」
僕は軽くため息をつく。でも彼をつれてきて良かったと思う。本当はとても気になっていたんだ。一匹じゃとても怖くて行く気にはなれなかったから。

二十二、窓の向こうに

ふぐりがいません。
猫一匹分だけ開いたの窓の隙間から、冬の夜風が吹き込んできます。お風呂上りの身体が冷えていく。かいまきを着て窓を閉め、机に座って足元の電気湯たんぽをつけます。
宿題を終わらせないと。今日の授業で習ったマンガというものについて、作文を書かなくてはいけないんです。机の中からE和紙と電子ペンを取り出します。

《昔マンガの中で書かれていたことは、今は人間の暮らしの一部になっています》

そうE和紙に書いて文字を隅に寄せておきます。これだけだと短すぎて作文になりません。もう少し色々と書き足さないと。

《マンガの中には良く、マホウというものがでてきます。手から火を出したり、良くわからない力を使って空を飛んだりします。でも今はそれは全部簡単に出来ることです。でもそんなことをしても危ないだけなので、誰もしません》

“でも”を二度続けて使ってしまったのに気づいて、後のほうの“でも”を慌てて消します。それでもなんだか変な文章です。首を傾げつつ、続きを書いていきます。

《物を簡単に持ち上げられるマホウがあります。私のお母上はそれを使うのに失敗して、顔に大火傷をしてしまいました。マホウは使い方を間違えると、大変です》

あとは私なりに何か上手いことを言って結ばないと。

《昔の人はマンガをよく読んだそうです。でもそれはマホウがあったからではないと思います。マンガの主人公の生き方がすばらしかったからだと思います》

こんなものでどうかな。いつもなら父上に見てもらうのだけど、それはもう出来ない。合わせる顔がありません。

宿題を終えてもふぐりは帰ってきませんでした。帰ってきたとき入りやすいように、ちょっとだけ窓を開けておきます。かいまきを着直して、ベッドにもぐりこみます。

なんだか今夜はうまく寝付けそうにない。目を閉じて数を数えてみます。猫が一匹、猫が二匹……。五十匹まで数えて諦めます。何度も寝返りをうったので、かいまきが着崩れて気持ち悪くなってきました。私は寝るのをあきらめてベッドから出ます。

暗闇に目が慣れたので、外の街灯りがとても明るく感じられます。窓の向こうから差し込んでくる、青白い光。私ははだけた姿のまま窓辺に立ちつくして、ボンヤリとその向こう側を見つめます。ふぐ

りはどこに行ってしまったのだろう。こんなに遅くまで帰ってこないなんて、いままで一度もなかった。もしかしてこの家に愛想をつかしてしまったのでしょうか。あの白猫さんとどこかに行ってしまったのでしょうか。

とても悲しい気持ちになる。誰もいない部屋に一人、話しかける相手もいません。夜景の遠くに、小高い丘が見えました。春になると桜の咲く高台です。不意に、家を飛び出したい衝動にかられます。あの丘に駆けて行きたい。そして大きな声で叫びたい。

何だか変な気分です。私はどうかしてしまったのでしょうか。だれか、教えて。

二十三、猫を殺した好奇心

僕たちは暗い建物の階段を登っていく。例の匂いは階を上がるごとに強くなっていく。

「本当にいやな匂いだぜ」

「まったくだね」

一番上の階まで上がると、僕は窓際に飛びった。静まり返った街並みが月の光に照らされている。通路を挟んだ真向かいに、小さな覗き窓のついた扉がある。僕はその向こう側と目を凝らす。部屋の中は緑色の光でうっすらと照らされている。

「何かみえるか?!」

「思ったとおりだ。小さい入れ物の中に色んな動物の死骸が入っていて、半分干からびている」

「ひでえ話だぜ……閉じ込められて干からびて死ぬなんて、考える限り最悪の死に方だ」

動物を生きたまま放置してまで、この建物を離れなければならなかった理由とはなんなのだろう? ここで一体何が起きた?

「むっ……」

そう考えたとき、頭の中が一瞬フラッシュした。思わず窓際からず

り落ちそうになる。
「どうした！　気持ち悪くなったのか！？」
「いや、立ちくらみのようだ」
「ネコが立ちくらみするかって！　もういいから降りるんだぜ！」
僕は通路に降りる。そして二匹で辺りを見回す。
「あっちに扉の開いている部屋があるぜ！」
「行ってみよう」
僕らは足音を殺して、開いている扉の側まで歩いていく。鼻をヒクヒクさせ、耳をピンとすまし、ヒゲの先の神経を研ぎ澄ます。そして二つの視線を慎重に扉の中へと差し込んだ。
……見たこともない装置がところ狭しと並んでいるが、他には何もないようだった。
……にもかかわらず僕の鼓動は際限なく高まってく、この感覚は一体何なのだろう。
「俺っちが先に入るぜ」
「気をつけるんだ、嫌な予感がする」
ふぐりは部屋の中に入ると、辺りをかぎ回りながら、機械を操作するものらしき台の上に飛び乗った。僕は床の上を真っ直ぐ歩いていく。突き当たった場所に、また半開きの扉があった。僕はその周りをウロウロしながら様子を伺う。ただの扉でないことは明らかだった。やけにぶ厚く、覗き窓はとても小さい。人間が引っ張って開けるための取っ手も変わった形をしている。僕は扉の中を恐る恐る覗き込む。暗くて良くわからないけど、内側には幾何学的な模様の刻まれたパネルがびっしりと張り巡らされているようだ。中に入ると、不思議と懐かしい気持ちになった。やはり僕はこの場所を知っている？
「このぼんやり赤く光ってんの、何なんだぜ？」
ふぐりが外で何かをいじった、そのときだった。
ピコピコン！　ピコピコン！

甲高い音が闇を切り裂き、部屋の中が太陽のように明るくなった。
なにごとだ！
急激な照明に目が眩み、頭の中が真っ白になる。あまりの驚きに全身が石のように固まってしまった。動けない！　部屋中に唸るような騒音が響き渡り、壁に張り巡らされた幾何学模様の板が真っ白な光の中でさらに明るく光って、めまぐるしく点滅を繰り返す。
フギャニャ！
ふぐりがビックリして叫び声をあげた。部屋の外から僕にむかって、はやく逃げろと鳴き叫んでいる。パネルの隙間から何かがでてきた。ノミのようにすばしっこく、花粉のように細かい何かだ。それは僕の体の周りを、とぐろを巻くようにして飛び回る。
まとわり付いては離れてを繰り返し、やがて何か意味のある一つの型になった。
それはまさに人の姿をしたものだった！
「なにやってんだお前！　早く逃げるんだぜ！」
そんなのわかっているよふぐり、でも体が動かないんだ！
僕の目の前に浮かび上がった人型は、細かい砂を寄せ集めたような腕で僕を抱きかかえようとしてきた。僕は彼を知っている？！

第?部　―1―

限りない欲望

「わたしネコの耳が欲しいの！」
６歳の女の子とその母親が診療所にやってきた。
母子ともに、いかにも高価そうな人工ミンク毛皮のコートを着ている。
「この子ったら、朝から晩までネコ耳のことしか考えてませんのよ。まあねぇ、こんな年頃ですから仕方の無いことですわ。わたくし思いますの、小さい頃に叶えられなかった願いは、例えそれがどんなことであれ、その人の一生に消えることの無いシミを残すのですわ。わたくしこの子にそんな思いはさせたくありませんの。そのためにも先生の技術を拝借したいのです」
付けまつげとアイシャドウで顔の半分くらいが埋め尽くされているのではないかと思われるようなそのご婦人は、そう言ってきた。
特に反対する理由も無かったので、すぐに施術を始めることにした。
「ちょっとチクっとします」
女の子の腕にナノマシンを注入する。仄かに青白く光る、少しとろみのある液体だ。
次に、用意しておいたネコの体に同じもの注入をする。試験用に繁殖させた白ネコだ。そして女の子とネコに「光の部屋」に入ってもらう。
「少しジッとしていて下さいね」
コントロールパネルを操作し、システムを立ち上げる。
異性体融合　対象《人》　目的物《猫の耳》
各種パラメーターを設定し、赤い色をした開始ボタンを押す。
光の部屋の照明が点灯し、そのエネルギーと光量子情報を得てナノ

マシンが活性化する。ネコの体内に注入したナノマシンが、耳の部分に集中し、細胞組織を分解・蒸発させていく。蒸発したネコ耳の成分は、呼吸とともに女の子の体内に侵入し、頭皮の狙った部分に蓄積し、徐々に耳の形を生成していく。神経の接続も滞りなく行われ、３０秒ほどで施術は終了する。既に女の子の意志で自由に動かすことが出来るはずだ。

「うわーい」

扉のロックを解除すると、女の子は自分の頭に生えたネコ耳をつかみながら躍り出て、嬉しそうにクルクルと回った。

「あらぁ、よかったわねー。先生！　まったくもって素晴らしい技術ですわ！」

「喜んでいただき、光栄です」

受付で報酬を受け取り、母子を見送る。診察室に戻るとそこには、まったくもって当然のことではあるのだが、耳を無くした猫が、丸い頭をした白猫が、キョトンとした顔をして佇んでいた。とりあえずエサをあげよう。

＊＊＊

「あたい尻尾が欲しいんだ！」

髪を鮮やかな金色に染めた妙齢の女性だった。無料支給品とおぼしき灰色のスウェットを着ている。なにやら切羽詰まったご様子。

「なあ先生、先生とこのナノマシン治療は、高いけど一味違うって聞いてやってきたんだ。色んな生き物の体をくっつけたりはがしたりできるんだろ？　あたいはもう付け尻尾とかじゃダメなんだ。金ならあるよ。リンリとかキンキとか色々あるだろうけどさ、ひとつ頼むよ！」

そう言うと彼女は脱色された髪が床に着くほど頭を下げてきた。

「どうか顔を上げて下さい。当クリニックの異生体融合は法的にも認められた施術です。保険はききませんので高くついてはしまいま

すが、明確な治療理由があり、料金を支払っていただけるのなら、施術はきっちり行わせて頂きます」
「そ、そうなのか？　それを聞いて安心したよ！」
「はい、ご安心ください。して、何ゆえ猫の尻尾を所望なされるのでしょうか？」
「え……いわなきゃダメなの？」
「はい、後々のトラブルを防止するためにも、治療の動悸を聞くことは欠かせません」
「ドウキしだいじゃダメなこともあるのか！？」
「滅多にございませんが、明らかに悪用される見込みがあったり、治療者の心身に深刻な問題を発生させるようなことが危惧される場合は、施術をお断りすることがあります」
　そう伝えると女性はにわかに顔を赤らめ、右を向いたり左を向いたりと、落ち着かない様子で、モジモジと話し始めた。
「う、ううん……いや、ちょっと恥ずかしいんだけどさ……実はその……ダーリンを驚かせやりたくてさ……なんというかその、マンネリ……っていうのかな？　ちょっと刺激が欲しい、みたいな……んもう！　察しておくれよ！」
　特に治療を断る理由はないようだった。
「わかりました、では施術を始めましょう」
「い、いいのかい？　じゃあ宜しく頼むよ！」
「はい、それではまず尻尾を選びましょう」
　そう言って、実験動物のケージを指差す。
　イヌ、リス、ウサギ、ニワトリ、ハツカネズミ、カモノハシ、そしてネコ。
「うーん……これ以外にはないの？」
「はい、残念ながら。融合の際にある程度の細工は施せます」
「ホント？　じゃあそうだな、やっぱりネコかな。ネコのしっぽが一番かわいいもんな」
「はい、ネコですね、わかりました」

ケージの中からネコを取り出し、光の部屋に入れておく。女性はその猫に耳が無いのに気づいて、ギョッとしたようだった。手を洗い、消毒し、注射の準備をする。

「少しチクっとします」

女性の腕にナノマシンを注入する。そして光の部屋へと導く。

「では、理想の尻尾をイメージして下さい。脳波スキャニングを行います」

女性の脳波をスキャニングし、解析した尻尾のイメージを何種類か表示する。

「どれにしますか？」

「さ、三番が良い感じだよ」

「三番ですね、本当に良いですか？」

「うん、お願いするよ」

「はい、では少しジッとしていてください」

光の部屋に光が満ちていく。白猫の尻尾は徐々に形を失い、空気に溶け込んでいく。そしてだんだんと、女性の尾てい骨の付近に集積し始める。

「うわ、来たよ、なんか来たよう！」

女性のスウェットのお尻の部分がモソモソと膨らみ出した。

「あと少し辛抱願います」

尻尾の毛の先まで成分が行き渡り、女性の体内で活発に動き回っていたナノマシンが不活性化していく。光の部屋の電源を落とし、扉のロックを解除する。中から出てきた女性は、しきりに自分の臀部を気にし、手で触って確かめている。

「ちょ、ちょっとトイレに行って見てきてもいいかな」

そう言うやいなや、女性はトイレに駆け込んでいく。程なくして歓喜の声が響いてきた。

光の部屋に取り残された白猫を抱えあげ、そっとケージに戻してキャットフードを一掴み与える。ほどなくして女性がトイレから飛び出してきた。

「先生ありがとう！　ほんっとうにありがとう！　あいつ超ビックリするよ、恩にきるよ！」

そして受付に向かい、報酬を受け取る。

「ちょっとさ、ハサミあったら貸してくんないかな？」

そう言われて、受付に置いてあったハサミを渡す。女性はそのハサミで、スウェットのお尻のところに切れ込みを入れた。

「こんな小娘がなんでこんな大金持ってるのかって、そう思ってるんだろ先生」

突然の告白に多少驚きはしたが、黙ってその話に耳を傾けることにした。

「あたいみたいなロクでもない女が、まとまった金を稼ぐ方法なんてたかが知れてるさ。でもね、あたいにだって大事なものがあるんだ。誰にだってあるだろ？　その人の心の支えみたいなもんがさ。あたいの場合、それがこの尻尾だったってだけでさ……。ごめんね先生、なんだか教会で懺悔してるみたいな気分なんだよ……さっきの猫、あの耳はどこにいっちまったんだい？　まあ、深くは詮索しないけどさ、きっとやっぱりあたいみたいなバカが持っていっちまったんだろ……胸が痛まない訳じゃないんだ、痛まない訳じゃさ」

女性はスウェットのお尻の部分を両手で掴むと、ひと思いに引き裂き、その裂け目から尻尾を出した。フワフワと揺れる尻尾は、まるでそれ自身が一つの生き物であるかのようだった。

「どうぞ、できるだけ大事にお使い下さい」

可能な限り適切な言葉を選んだつもりだったが、その言葉に女性は感極まってしまったらしい。目元に一筋の涙を流す。女性は袖で目元をぬぐって一礼すると、生えたばかりの尻尾を揺らしながら、逃げるようにして診療所を飛び出していった。

＊＊＊

耳と尻尾が無い猫との生活が始まって、二週間がたった。

猫はしばらくの間、耳のない頭を気にして頻繁に毛づくろいをしていたが、日が経つにつれて、その状態に慣れてしまったようだ。今はケージの中で眠っている。

今日は朝の9時から診療を始めて、お昼までに3人のクランケが訪れた。

顔の皮を厚くしたい人、鉄の胃袋が欲しい人、親知らずを抜きたい人。

それぞれに対して適切なナノマシン治療を施す。最後のクランケの親知らずはアンプルに詰めて冷凍保存しておく。いつか歯が欲しいという人が現れた時のためだ。

そろそろ昼食にするか。そう思った時、誰かが診療所にやってきた。先日、猫の耳を所望したあの母子だった。母親に尋ねてみる。

「何か問題でもございましたか？」

「いえええ、とんでもございませんですわ。この子ったら毎日おおはしゃぎで、とっても幸せそうでしたのよ。たいへん素晴らしい猫耳でございました。本当にありがとうございました」

「猫さんに耳を返しにきたのー」

どうやら二週間で飽きたようだった。

「せっかく付けて頂いて、こんなことを申し出るのは恐縮なのですが、まあこのような小さな年頃の子にはよくあることでございましょ？　頭を洗う時などもいささか不便なものでして」

母子の話を一通り伺ってから、女の子を再び光の部屋へと導く。注射はしない。まだ十分な量のナノマシンが体内に残っているはずだ。

「少しジッとしていてください」

光の部屋に光が満ち、女の子の頭の上の耳が七色の輝きを放ち始める。そしてものの数秒で分解され、綺麗さっぱり消えて無くなった。

女の子は耳のあった場所を手でポリポリと掻きながら、光の部屋から歩み出てきた。

「なくなっちゃった！　ねえ先生、このお耳をくれた猫さんいる？」
女の子に、ケージで眠っている白猫を指差してあげる。耳の無い猫がすやすやと眠っているのを見て、女の子は少しショックを受けたようだった。
「猫さんの耳、ちゃんと元に戻る？」
女の子を安心させるように、頷いてみせる。そして母親の方を見て言う。
「少々よろしいですか？」
「あら、なんでしょう……ちょっとご本を読んで待っているのよ、先生とお話があるからね」
母親を診察室に招き、椅子をすすめる。母親の表情には不安の色が浮かんでいる。
「なにか娘の体に問題でも……」
「いいえ、娘さんは健康そのものです」
「では一体なにが？」
「はい、実はあの猫のことなのです。おそらくあの耳は元には戻らないでしょう」
「ええ！　そうなんざますか！？」
「はい、元に戻そうと思えば戻せるのですが、猫自身が戻された耳を拒絶するでしょう。よほど鈍感な猫でない限りは、十中八九。それに、耳が無くなってから2週間もたってしまいました。猫もその状態に慣れてしまっています」
「あらぁ……」
「先ほどは娘さんにショックを与えてはいけないと思い、とっさに頷きはしましたが。実際はそういうことなんです。どうか、胸のうちにお留め置きください」
「そうですか、そうだったのですね、それはショックなことです。猫さんには大変申し訳ないことをしました。娘には、そうですね、時期をみて話したいと思いますわ。大事なことですからね。必ず申し伝えますわ」

話を終えて診察室を出ると、娘さんは気持ち良さそうにクシで髪をすいていた。
「あっ、ママぁ、お話なんだったの？」
「ううん、大したことじゃないのよ。それよりお渡しするものがあったでしょう？」
「あ、そうだった！」
そういうと女の子は、ポーチからタッパーに入ったカツオの刺身を取り出した。
「猫さんにあげて欲しいの！」
どうやら猫の耳を借りたことに対する、女の子なりのお礼のようだ。
母子を見送った後に、光の部屋に戻って猫耳の成分を回収する。そしてアンプルに納めて「元猫耳」と記す。それは綺麗なピンク色をした液体だった。ひとまず冷凍保存しておこう。もしかすると何かの役に立つかもしれない。
白猫が目を覚ましていたので、さっそくカツオを食べさせることにした。色艶からして、最近では珍しい養殖品のようだ。合成品に比べると、やはり養殖は高い。味は良いのだが。
「カツオだよ、お食べ」
白猫はニャーの一言も言わずに食い付くと、あっという間に平らげてしまった。

＊＊＊

目を覚ますと、窓の外は夕日の紅に染まっていた。診療所の窓辺に腰かけて、箱レコードを聴いていたら、いつの間にか眠ってしまっていた。膝の上に耳と尻尾を無くした猫が眠っていた。背中を撫でてやると、目を瞑ったままヒゲをピクピクとさせた。
学生のときに受けた矯脳学習のイメージを夢に見た。それは数学と幸福に関する授業だったように思う。この世界の遍き事象は、全て

数学で解き明かされる。人の幸せや、歴史の行く先、果ては神の存在に至るまで、全ての事象が。

それがその時に受けた内容の主旨であり、今に至るまでずっと頭の中に染み付いている理論であり、一種の行動規範でさえあった。科学者とは数学的手段を用いて人類の幸福の最大化に寄与する職業だ。

それはきっと、これからもずっと変わらない。

ガチャン……コツコツコツ……

扉を開ける音、靴の音。誰かがやってきたようだ。白猫は床に飛び降りると、走ってゲージに戻っていく。待合室に向うと、そこには意外な人達が待っていた。ねずみ色の軍服を着た三人の男……二人は護衛の若い将兵のようで、その二人の前に、胸元にバッチを幾つかつけた恰幅のいい男性が立っていた。歳は５０代半ばほどか。

「軍の方ですか？」

「はい、私はアルバトロス星域第五宙艇団所属防衛技術研究企画局局長の栄輪儀・ワンと申します。貴方の独自技術である『異生体融合』について話を伺いたく参りました」

医療技術として開発された異生体融合が、どうして軍事研究の興味を惹いたのか。事前連絡もまったく無かった。どういうことかと訝しく思いながら、彼らを奥の部屋に案内する。

「ああ、お茶は結構ですよ。そんなに長居はいたしませんので」

そう言われて大人しく腰を下ろす。実験動物達はいつもより苛立っているようで、ケージの中を駆け回るカシャンカシャンという音が時折響いていた。

「ではさっそくですが話を始めさせて頂きます。当星域内にあります惑星ターミガンの運営局のシステムが暴走事故を起こしたことは、ニュースなどでもうご存知のことかと思います」

その話は連日報道されているので、もう散々耳にしていた。システム暴走の原因は未だ不明。そしてターミガン中で暴動が起こっている。

「原因は不明とされていますが、実は何者かがコンピューターウィ

ルスを持ち込んだのがその原因なのです。この話は最重要機密ですので、けして他言はされませんように」

これで我々共犯者だ、とでも言わんばかりに、三人の男はこちらを睨みつけてきた。

「こんな話が公になったら、星系中がパニックになります。わかりますよね？　我々は、他の運営体にもウィルスが持ち込まれるのではないかと危惧しております。そして、それを防止するための技術を研究中なのです」

「それと異生体融合の間にどんな関係が……」

「我々はありとあらゆる可能性を検討しなければなりません。情報工学的にウィルスを防衛する方法はもう散々考えつくされてきましたが、コンピューターが実用化されてから数千年、１００％完璧な解決方法は未だ見つかっておりません。この世に悪意を持つ人間がいるかぎり、我々のシステムは脅かされ続けるのです。そこで我々はいま、そのウィルスの発信源となる人物を見つけ出し、犯行が行われる前に捕縛するための手段を模索しているのです」

案外まともな用件のようで、ホッと胸をなでおろす。

「私どもは動物に着目いたしました。人間以上に鋭い感覚をもつ動物の能力です。これをシステムを管理する人間に備えさせることが出来たなら……どうでしょうかね？」

「なるほど、そこで異生体融合の出番というわけですか」

「お察しが早くて助かります。さしあたっては、人間を遥かに陵駕する危機察知能力を持ったアニマロイドの研究を進めたいと思っております。同意いただけるのであれば当研究所より１０名ほど研究員を派遣いたしますが、いかがでしょう？」

「はい、人類の平和的生存に寄与する素晴らしい研究だと思います。是非とも協力したい」

そう伝えると男は、満面の笑みを浮かべて手を出してきた。

堅く、長い握手が交わされた。

＊＊＊

翌朝さっそく、軍の研究所から研究員が派遣されてきた。
予想以上に大人数で、待合室は白衣の学士達で埋め尽くされてしまった。
「おはようございます、栄輪儀さん。しかしいささか人数が多くありませんか？」
「確実な成果が求められる研究ですので、この中から適格者を選別を行います。では早速」
栄輪儀さんが指をパチンとならすと、その場にいた全員が、自前の矯脳器を自分の頭に取り付けた。異生体融合の理論をこの場で教授しろということか。そして最後まで教脳に耐えた者から順に、適任者として選定していくという方針のようだ。しかしこのように密集した状態で強度の矯脳を行って、はたして大丈夫なものか。
「安全性にいささか疑問を感じますが……」
「何かありますれば直ちにそこの二人が対応します。大丈夫、全員たび重なる選別を潜り抜けてきた生え抜きの頭脳達です。容赦なくご教授してやってください」
栄輪儀さんがそう言うと、サイボーグのように鍛えられた二人の将兵が、完璧な同期のもとに私に敬礼をしてきた。張り上がった胸板、岩のような肩、丸太と見まごうほどの上腕筋。浅黒く焼けた頬の肉までもが筋肉質だった。
「では……始めましょうか。何かありましたら出来るだけ早めの対応をお願いします」

十五分後……最初の脱落者が出た。
限界まで耐えていたのだろう。突然ガクガクと震え始め、ものの数秒で意識を失ってその場に倒れた。将兵の一人がその片足を掴んで、乱暴に外へと引きずり出していった。

二十分後……矯脳学習の限界とされる時間が過ぎた。既に2割が脱落している。残った者も、強く歯をかみ締めたり、太ももにペンを突き刺したり、矯脳器を外そうとする右手を左手で必死に抑えたりして耐えている。さすがに心配になってきた。

「休憩をはさんだほうが良いのでは?」

「いいえ、それでは選別になりません。今が一番辛い時間です。続けて下さい」

二十五分が経過したところで一気に脱落者が増えた。

研究員の一人が、けたたましい悲鳴を上げて自分の矯脳器を叩き割ったのを引き金に、半数近くの者が自ら矯脳器を外した。悲鳴を上げた研究員は将兵に拘束され、外に引きずり出されていく。

「くるってやがる! くるってやがる! まるでスポンジのようだ!」

彼はしきりに何かを叫んでいた。

人数が10人に絞られるまでに、結局五十分以上の時間を要した。そこに至るまでの様相は、まさに地獄としか言い表せないものだった。汚物を垂れ流したものが数名おり、部屋には鼻を刺すような臭気が漂っていた。最後まで残った者はみな、殆どまともな意識を留めておらず、ある者は全身を痙攣させてのたうち回り、ある者はあらぬ方向に目の焦点を合わせて歯をカチカチと鳴らし、ある者は口の端から舌をダラリと出して伸びていた。彼らの顔はみな一様に、汗とヨダレと涙と鼻水でグチャグチャになっていた。

「お疲れ様でした先生。こちらの診療所が入っているビルはまるごと軍が接収いたしました。先生の研究施設として自由にご活用ください。また、本研究は軍の最高機密となりますので、常に軍の者が常駐して機密の保持に努めます。ご理解とご協力のほど、宜しくおねがいします」

「……わかりました。して、脱落した彼らはこれからどうするのでしょう?」

恐る恐る訪ねてみると、栄輪儀氏は不適な笑みを浮かべて、こう言った。

「先生、この世界には解き明かさなければいけない問題が山ほどあります。研究者はいくらいたって足りないくらいなのです。今回このような辛い選別作業を行ったということは、それだけ先生の研究に期待が寄せられているということなのです。ですから先生は余計なことは気にせず研究に邁進して頂いて、確実に成果を挙げてもらいたい。それが彼らのためにもなるというものでしょう」

選別された１０名は、あれだけの試練を耐えただけあって実に優秀だった。一眠りした次の日にはもう研究所に出所してきて、１人で２０体のオートロボに指示を与えながら、１００本以上のテストを同時進行させていた。

昼頃には軍用の貨物車が何台もやってきて、夥しい数の試験動物や実験機材を研究所に運び入れ始めた。その搬入作業の指示だけで、その日の仕事は終わってしまった。

＊＊＊

研究がスタートして一週間。最初のブリーフィングが行われた。研究所に軍の関係者を招いて、これまでの研究成果について説明を行う。

「ふむ……やはりネコですか」

最初に口を開いたのは栄輪儀氏だった。

「はい、即時運用が可能な４０００種の哺乳動物について検討を行いましたが、ネコの能力がやはりずば抜けています。欠点としては水辺の行動への不適合があげられます。水辺での活動を想定する場合、カモノハシの適性が最も高くなりますが、中央コンピューターを水辺で管理するという可能性はあまりないでしょうね」

「無いとも言い切れないので、一応検討は続けていただきたい。しかしやはりネコでしたな」

――うむ、ネコだった、ネコだったね、やっぱりね……

口々にネコネコと口ずさむ軍服姿の老年の幹部達。胸には無数のバッジが光っている。

「それでは先生、早速ですが人体適応の試験に移って頂きたい」

「人体適応ですか？　まだラット試験さえ行っていませんが？　特に脳機能の異生体融合に関してはデータが殆どありません」

「先生、事態は非常に切迫しておりまして、司令部からもかなり圧力がかかってきています。被験体については私どもに考えがありまして……」

栄輪儀氏の提案は実に驚くべきものだった。惑星ホトトギスの二つ外側を回る、惑星ニューカンブリアに住んでいる「亜人」を使うというのだ。

惑星ニューカンブリアは、機械文明を極限にまで発達させた惑星で、そこに暮らす人達はまったくの労働をしなくて済むほどの場所だ。生活圏は快適な気温と湿度に保たれ、常に清潔で、食物や娯楽を生産するための機械樹や機械花で埋め尽くされている。その中には、ラーメンのなる樹やミックスジュースの取れる花、ハナフダの相手をしてくれるシダ植物などもあるらしい。だが、この惑星に好んで住もうとする人は意外と少ない。極限といってもいい堕落に、殆どの人々は適応できないのだ。

ニューカンブリアに適応してしまった人々は、もはや人としての原型を留めておらず、丸々と肥え太った外見はまるで毛と肉の塊のようであることから、オークや亜人などと呼ばれており、星系の人口統計にも数えられていないのである。そんな人権保護団体にすら見捨てられた個体であれば、確かに実験材料にしたところで誰も騒ぎはしないのかもしれないが、しかし。

「良心が痛みますかな？　解らなくもありませんが、彼ら亜人は人間としての生きかたを完全に放棄した、もはや人間でもなんでもない生き物です。先生はこれまで数え切れないほどの動物実験をしてきたでしょう。例えばサルとか」

「はい、サルを使った実験はこれまで幾度となく行ってきました」
「生命としての尊厳、という意味合いにおいて、亜人とサルの間に何か特別な違いを見出せるでしょうか、先生」
どう口を開いて良いかわからなかった。サルを使えるのなら、亜人も使えるだろう。確かにそれは、もっともらしい理屈のように聞こえる。
「確かにね、自らの意思で働かないと決めた人は沢山います。しかしそれは増大しすぎた生産性が、あまり多くの労働者を必要としなくなったということの影響でもあります。私達の文明は、たとえそのようにして発生した不労者にあっても、他者を思いやり、社会を思いやる人の心を持った人達に対しては、きちんとした生存の保障を行ってきたんです。しかし亜人はそれにすら満足できず、欲望を極大化させていった。人としての節度、とでも申しましょうか。それら一切を放棄してね。もうはっきり言ってしまいましょう。亜人は生命のゴミです、クズです。だから先生、私は何も迷う必要などないと思うのです。殺したりするわけでもないですし」
最終的に、栄輪儀さんの熱のこもった説得にこちらが折れるという形になった。
同意書にサインしてから、研究所に亜人が搬入されてくるまでに一昼夜とかからなかった。ニューカンブリアまでは、反物質推進を使ったとしても往復一ヶ月はかかる。おそらく、何体かの亜人が常にストックされているのだろう。
シャトルジェットで宙輸されてきた亜人は麻酔で良く眠っていた。ＤＮＡの整合率はヒトの９９．９９９９９９パーセント。それにも関わらずその姿は、まるで空想小説の世界に出てくるような怪物そのものだった。肥大しきった皮下脂肪が幾重にも胴回りにぶら下がり、試験台の上に乗せるとまるで溶けた餅のように広がった。巨大な耳たぶのような頬の肉が、肩の上に乗るほどに垂れており、首もアゴも隠れてしまっていた。四肢はその巨体に対して不釣合いなほどに細く、指先だけが生々しいほどシャープな輪郭を保っていた。

おそらく彼らは指先の操作だけで、生きるための殆どのことを済ませてしまうのだろう。風呂に入る習慣も無いらしく、皮膚の表面をこすると古くなった角質がボロボロとこそげ落ちた。薬品か何かをつかって清潔を保っているようで、外見ほどに体臭は強くなく、ほんのりとアルコール類の匂いがした。

「まずは人の形に戻さなければいけませんね」

研究員の一人がそう言う。

「そうですね、光の部屋に運びましょう」

30分ほどかけてゆっくりと亜人のトランスフォーミングを行った。不必要な体脂肪を分解し、骨格や筋肉、内臓器官などを調整する。全身のメディカルチェックを行い、無駄な体毛を処理する。トランスフォーミングの全工程が終了したことを告げるブザーが鳴り響くと、近くで作業をしていた研究員達が神妙な表情を浮かべながら集まってきた。

光の部屋の扉を開き、試験台に横たえられた亜人を搬出する。その姿に、我々は少なからぬ衝撃を覚えた。研究員の一人が驚きをこめたニュアンスで言った。

「先生、意外に良い男ですね」

光の部屋から運び出された生物。それは細身の体つきと凛々しい顔立ちを持った、若い男性の姿をしていたのだった。

＊＊＊

その日我々は、丸一日かけて3体のキャットアニマロイドを合成した。

麻酔をかけて眠らせた亜人一体と四匹の実験用ネコ、それぞれにナノマシンを注入し、光の部屋に搬入する。そして研究員全員の立会いの下、実験開始の赤いスイッチを押した。光の部屋に光が満ち、やがて七色の輝きとなって覗き窓から溢れ出る。

融合時間は一時間。脳組織の融合は複雑なメカニズムが伴う。尻尾

をつけたり耳をつけたりするのとは訳が違う。若い研究員の一人が融合作業中の光の部屋を覗き込んだ。そしてすぐに嗚咽とともに目をそむける。中では解体された猫と亜人の生体部品が飛びまわっているはずだ。合成後には必ず「余り物」が発生する。それを処理する係りを、我々はくじ引きで決めた。

試験体一番　亜人五割・猫五割　オス

うつ伏せの状態で、手足を折畳むようにして眠っている。骨格構造は殆ど猫であり、直立歩行はおそらく出来ないだろう。全長１７５センチ。体重８５キロ。３体の中でもっとも大柄だ。足先にははっきりとした肉球がある。内部に爪を収めた指が五本あるが、小さく丸まっており細かい作業には耐えないだろう。鎖骨の周りと前足の内側を除いた全身を、密度の濃い白色の体毛が覆っている。あご周りの体毛が特に濃く、長いネコヒゲが生え、まるでトラのような顔立ちだが、その寝顔にはどことなく人間臭さを感じる。口の内部には発達した巨大な牙が生えており、なおかつ人間のような臼歯も存在している。舌は鋭角な棘でザラザラとしていた。襟首は高級な絨毯のようにフカフカとしていて良く伸びる。背中はまさに猫背であり、しっぽの先に至るまで毛で覆われている。

最後に陰部を観察する。人間のものよりいくぶん大きく、やや先細りで赤みが強い。未虚勢のオス猫をつかったためか、陰茎の根元には突起物が残っていた。

試験体二番　亜人七割・猫三割　メス

　横向きになり、腰から身を折るように丸まって眠っている。猫背気味ではあるが、おそらく二足歩行に耐える骨格だろう。全長１５０センチ。体重４２キロ。全体的にシャープな印象を受ける。白毛に覆われた手足には人間と変わらない指が生えているが、爪の先は非常に鋭く、やや湾曲している。毛が生えていない箇所は、腕の内側と膝の裏、そして肩周りから鎖骨、喉元から顔の一部にかけてで、

露出した皮膚はややピンクがかった肌色をしている。
小ぶりな二つの乳房はその下半分が毛で覆われ、発達した乳首がそれぞれついている。腹部の毛を掻き分けて調べると残り六個の乳首が小さく退化した状態で点々とついていた。亜人の状態の時に残しておいた髪の毛は全て真っ白になっており、肩ほどの長さに伸びたまま残っている。とても柔らかくてクセのある毛、俗に猫毛と呼ばれるものだ。人間のものより高い位置に三角に近い形の耳があり、そこから頬にかけて毛が生えている。やや潰れ気味の鼻の下に、薄い唇があり、口を開いて中をみると、小ぶりではあるがきちんと牙が生えていた。
陰部を観察するために片足を持ち上げる。腹部から臀部、大腿部にかけては毛が深めに生えているため、これだけでは確認することができない。
「やはり見るのですね、先生」
若い研究員の一人が顔を赤らめながら言う。
「はい、必要なことですから」
陰部の毛を手でかき分けるとそこには、性器は性器であって性器以外のなにものでもないものが、きちんとついていた。
試験体三番　亜人九割・猫一割　オス
大の字と言っていいほどの見事な仰向けの姿で彼は眠っていた。その骨格は人間そのものであり、違いを探す方が難しいくらいだった。口を開けると発達した犬歯が、牙のように見えなくもない。目を開いて虹彩を確認すると、それは確かにネコのものであった。体毛はあまりなく、前腕部と脛、下腹部、そして頬などにうっすらと生えているのみだ。陰部に至ってはわざわざ確認するまでもなかった。なにせ仰向けで寝ているのだから。その立派な一物を、研究員の一人が羨ましそうに眺めていた。
全身的に筋肉が、融合前より発達しているような印象を受ける。肩、胸、上腕部、大腿部、そして背筋。それらはとても引き締まっており、かつ柔軟で、良く鍛えられたアスリートの体を彷彿とさせた。

三体の中でもっとも脳の容積が大きく、ヒトの九十七パーセント程もある。心なしか、寝顔にも理性のようなものが感じられた。彼らが目を覚ましたら、一番先にコミュニケーションを試みてみよう。

それぞれの試験体の体内に、生体情報をモニタリングするための装置を埋め込み、そして鋼鉄製の巨大なケージに入れる。

「とうとう、やってしまいましたね」

研究員の一人がそう呟く。

「もう後戻りはできないさ」

研究員の一人がそう呟く。

それぞれのアニマロイドに、脳の働きを抑制する薬を投与しておく。麻酔が覚めた時に暴れて、彼ら自身が傷つかないようにするためだ。今日の仕事はこれで終了。実に長い一日だったように思える。時計を見れば、時刻は夜の１０時を過ぎていた。研究者としての好奇心からか、その日はみな、なかなか帰らなかった。

こよみの日付が変わる頃、最後の研究員が家路についた。灯りを消した研究室に、非常等の青白い光だけが灯っている。最上階の診療室に向う。今は宿直室として使っている。耳と尻尾をなくした白猫が、こちらに気づいて目を覚ました。エサを一掴み与えてやる。猫がエサをかじるカリカリという音が診察室に響く。

そういえば最近全然鳴かなくなった。ふとそう気づいて、猫の頭に簡単な脳波計を乗せてみる。猫の頭の上で手を鳴らしてみるものの、脳波計に反応はまったくみられない。どうやらこの猫の脳は、中途半端な聴力を捨てる選択をしたようだ。

エサを食べている白猫の姿を見ていると、ふいに腹が鳴った。食事を取ろう、そう思って冷蔵庫の中を覗き込む……その時だった。

ガタガタ……という不気味な音が、下の階から響いてきた。白猫は無くなった耳で何かを聴くようにして、その場に固まっている。取り出しかけたレトルト食品を冷蔵庫に戻し、彼らが眠っているはずの部屋に向う。調べなければならない。

階を下るにつれて、ガタガタという音に混ざって猛獣がうなるような声が聞こえてきた。部屋の前まで辿りつくと、そこで一度立ち止まり、扉に耳を当てて音を聞く。

ヴー……ヴァァー……ココドコダ！……クライ！……サムイ！……

ケージの中でオスの試験体が暴れているらしい。まだ麻酔の切れるような時間ではないが、それはあくまでも理論上のことだ。ネコとヒトの融合体に麻酔をかけた事例はいまだかつて無い。人知では推し量れない何かが、扉の向こうで起きているようだ。ケージが破壊されている可能性はまずないだろう。しかしこの扉を開けた先に何が待ち構えているか、それはまさに想像しうる範疇を超えていた。しかし逃げるわけにはいかない。これが行動に対する結果なのだ。この先に何が待ち構えていようとも、しかと見届ける義務がある。一つ深呼吸をして気を静める。そして意を決して扉を開け、すかさず部屋の灯りをつけた。

「ヴァアアアアアア！」

おぞましい叫び声とともに、正面のオリに格納された猫5割のアニマロイドが猛然と食いかかってきた。毛むくじゃらの腕で鉄格子を掴み、必死になってに牙を噛み立てている。急な照明に驚き、瞳孔を針のように鋭くして、こちらを睨みつけている。

その隣の猫三割のメスのアニマロイドは姿勢を低くしたまま眉間に険しいシワを寄せ、怒りの表情とともに「シャー！」と威嚇してきた。そして、まさに扉に入ってすぐのところにいる、猫1割のアニマロイドはなんと立ち上がっており、オリに背をもたれた状態でいかにも不愉快そうな視線をこちらに向けていた。

「ココ！　……ドコダ！……エサ！　メシ！……サムイ！」

どうやら騒音を立てていたのは猫5割の試験体であるらしい。手先の震えが止められない。恐怖を感じていないと言えばそれは嘘になる。彼らに投与した薬はまったく効いていないのか？　まず一番にそう思う。しかしすぐにそれが思い過ごしであることに気づいた。彼らはこちらを睨もうとしているものの、その焦点はまるで合って

いない。自分達の置かれた境遇があまりに変化してしまったことに驚き、そのショックが彼らの意識にムチを入れているのだ。なんということをしてしまったのだろう。そんな思いが胸によぎる。かけるべき言葉もなく、その場から動くこともできず、ただその場に立ち尽くす。

しばしその状態が続いた。時の流れがこれほど遅いと感じたことはない。時計の秒針が計板を一周したころ、ようやく猫五割のアニマロイドが抵抗をやめ、その場にぐったりと倒れこんだ。虚ろな視線をあらぬ方向に向けている。メスのアニマロイドはそのままの姿勢でうずくまり、朦朧とする意識と戦っている。

猫1割の試験体としばし視線を交わす。熟睡中だったところを叩き起こされたような、とても不快そうな表情を浮かべつつも、しっかりと二本の足で立っている。体毛の少ない彼はどこか寒そうな様子で、両腕をかかえてさすり始めた。

「ここは、寒いだろうか？」

そんな言葉が自然と喉の奥からこぼれ出た。彼は首を少し傾げる。何故そんなことを聞く？　そう思うならさっさと空調をいじれ。そう訴えているようだった。

「今、温度を上げる」

空調を操作する。そして再び会話を試みる。

「我々は君達の体を勝手にいじった。当然怒っているだろう」

当たり前だ――そう訴えるかのように、彼は口をあけて牙を見せてきた。

「我々が憎いか？」

そう言って、檻の中に手をいれてみる。危険な行為であることは承知している。しかし、試みずにはいられなかった。彼らがどれほどの敵意を持っているか、身をもってを知る必要があった。そのためならこの際、手を噛み切られるくらいはどうでもよい。そう思わずには居られなかった。彼はしばらくこの眺めた後、その鋭い爪を振り下ろしてきた。

「うっ！」

皮膚が裂け、手の甲に三筋の亀裂が入る。血がにじみ出て、ポタポタと床に滴り落ちた。それでもこちらが動じないのを確認すると、彼はようやく口を開いた。

「……お前ら殺す、我ら殺される」

それだけ言って彼は、また再び、威嚇するように牙を見せてくる。よくもこんなことをしてくれやがって、誰だってこんな状況になればそう思うだろう。そう牙は語っていた。

「我々は君達を殺さない。それだけは約束できる」

「……何がそれを約束する」

「君達は我々が作った最初のアニマロイドだ。我々は最終的に、君達の寿命を調べなければならない。だから我々は君達を殺さない」

思いつく限り最も説得力のある説明を試みる。それを聞くと彼はため息をひとつつき、そして力尽きたようにしてしゃがみ込んだ。

「電気はつけておいた方がいいか？」

「眠る……消せ……」

「わかった」

電気を消して部屋を出る。眠ろう、強くそう思う。食欲はまったく無かった。

＊＊＊

結局、この研究所で作られたキャットアニマロイドはその3体だけだった。このような市中にある研究所で、アニマロイドを量産するのは危険であると判断されたためだ。

我々の予想に反して、彼らは実に良く眠った。何か困ったことが起きたとき、とりあえず眠るという亜人の習性に基づく行動だろうか。それともただ単に猫であるということなのだろうか。いずれにしろ彼らは、そうして眠る度に、現状に適応していくようだった。

研究員達が初めのうち、どれだけおっかなびっくりで彼らに接して

いたかは想像に難くないだろう。アニマロイド達も、最初は露骨に彼らに牙をむいていた。

しかし我々と彼らがこの状況に馴染むのに、そう時間はかからなかった。研究員達は実に熱心に彼らの面倒をみたし、アニマロイド達も気に入った研究員に対して、懐くような行動を見せ始めた。程なくして名前も付けられた。

亜人五割：猫五割のオスの試験体「ヒム」
亜人七割：猫三割のメスの試験体「シー」
亜人九割：猫一割のオスの試験体「ゼム」

名前が付けられると同時に、彼らの交流は一気に進んだ。研究員とアニマロイド達の間に、意志疎通のようなものが見られるようになったのだ。

「先生、シーがヒムの性欲を嫌がっています。部屋を分けましょう」
「先生、ヒムが猫舌のくせにラーメンを食べたいといっています、出前をとって良いですか？」
「先生、シーが僕の眼鏡をしきりに覗き込むんです。鏡を与えたいのですが」
「先生、ゼムが歯間ブラシを望んでいます。買って来ますね」
「先生、ヒムがケージから出たがっています。ネコの割合が多いから、ストレスになっているんでしょうね。シーとゼムは相変わらず眠りまくってますけど」
「先生、何回やってもゼムにカードゲームで勝てません。どうなっているんでしょう？」
「先生、シーが床に体をこすりつけています。これって、これって発情ですよね？　どどど、どうしましょう！」

毎日のように研究員達からオーダーや質問があがってきた。今思えばこの時期が、我々にとって一番楽しく、そして幸せな日々だったのかもしれない。

程なくして栄輪儀さんから連絡があった。静止軌道上にある軍の隔

離研究所でアニマロイドの量産実験が始まったらしい。融合するネコの品種や、その融合率を変化させた試験体を何百体も作って、その能力の比較検討を行う。隔離研究所から送られてくるデータの処理と、3体のアニマロイドの世話が、当面の我々の仕事となった。

ある日、研究所に忘れ物をして戻ったとき、宿直の研究員がシーの部屋で何かしているのを発見した。

「……ほらシーちゃん、約束のエビフライ。一緒に食べよう」

「アリガト！　だいスキ！」

研究員の一人がシーと懇意になったらしい。しばらくの間、二人がエビフライを食べるサクサクという音がしていた。

「シーちゃん、やっぱりここを出たいかい？」

「ココせまい、ひろいトコ、イキタイな……」

「だよね、そうだよね。君達をそんなにしてしまった僕らが、何をいえたものでもないけど。シーちゃん、僕は君を自由にしてあげたいよ」

「ハジメ、びっくりした。コンランした。デモこのカラダ、太ってない、小さくもない。フサフサしてて気持ちイイ。ミミかわいい、しっぽカワイイ」

二人が話しこんでいるようだったので、もう少し覗き込んで様子を見てみた。檻が開けられているようなら注意しなければいけないが……どうやらそれは杞憂であったようだ。二人とも床に四つ足をつき、同じような猫の姿勢をして見つめ合っていた。

「シーちゃん、僕もうすぐボーナスをもらえるんだ。そしたらここを出よう。二人でカンブリアに帰ろう！」

「ボーナス?!　それってオイシイの？」

「ああ、とってもおいしいものだよ。僕たち人間のご馳走さ」

「ボーナス、シーもタベたい！」

……聞かなかったことにする。二人が幸せならばそれにこしたことはないだろう。シーは人間に比べると遥かに気配に敏感だ。気づか

れないように、慎重に慎重に、その場を後にする。
ついでに、ゼム達の部屋も覗いてみた。灯りがついている、まだ起きているらしい。
「なにしにきた」
ゼムはトランプのカードを並べて、一人で神経衰弱をやっていた。彼は大抵のカードを一発で当ててしまうので、人間相手では勝負にならない。
「忘れ物をしたんだ。これを取りに来た」
そう言って手に持った箱レコードを見せる。ジャケットに若い女性の笑顔が写っている。
「ソレナンダ！　クエルノカ！」
指を口にあて、わめきたてるヒムに『静かにするように』と伝える。
「音楽か」
「そこのレンタルショップで借りていたんだ。今日返さないと延滞料金がかかってしまう」
ゼムはしばらく何かを考えていたようだ。
「おいていけ」
「聴きたいのか？」
「ここは音がなさ過ぎる、おいていけ」
「使い方はわかるか？」
「わかる」
箱レコードを渡す。ゼムは爪の伸びた指で器用にディスクを引き出して床に置いた。ジャケットの中に畳み込まれていた光共鳴基材を展開し、3角錐型の立体ホログラフィックスピーカーを組み立てる。そしてモニターを操作して空間キャリブレーションを行い、回転数と針の感度を設定する。ゼムは一通りの下準備を何の迷いもなく済ませると、静かに再生スイッチを押した。三角錐の頂点から光の針が飛び出して、回転を始めたディスクとそっと触れ合う。
電子的な音を幾重にも重ねた旋律が、部屋の中に響き始める。
箱レコードの再生形式は、このように非常に解りにくく、かつマニ

アックなものだ。ゼムに予備知識はまったく無いはずなのだが、彼は亜人だったころの記憶を足がかりにして、もちまえの観察力と直観力だけで大抵の機器を操作してしまうのだ。もしも彼が優れたシステムエンジニアだったとしたら。もしも彼が経験を積んだハッカーだったとしたら。一体どれほどの能力を発揮することになるのだろう。

ふと気づけばアニマロイド達は、目を閉じて音楽に聞き入っていた。箱レコードから流れでる幻想的なエレクトロニカ。それは二千年以上も昔に、地球という星で流行った「ワールド・アセンション」という曲だった。

♪……

明けてゆく朝　胡乱な景色
街角をゆく　ネジ巻きの人
今日も遠い星を目指して　最寄の駅に向う

同じところをグルグル回る　色とりどりの乗り物は
右へ左へ行ったり来たり　上を目指して翔けてゆく

舞い散る紙吹雪　イリュージョン
飛び散る魂の欠片　アセンション

明けては暮れる星の日々　背中のネジを巻くのはだれ
バベルの塔の檻の中　私はここにただ一人

変わらぬ日々の平穏を
空にたゆたう天使の影を
あと何回見送れば
望むべき今にたどりつけるか
……♪

＊＊＊

衛星軌道上の隔離研究所から送られてくるデータに違和感を覚えたのは、そう最近のことではなかった。解析を求められているデータが、感覚器の機能から身体の機能に移行していったからだ。中央コンピューターを管理する人間に、それほどの身体機能が求められるとは思えなかった。研究員の中からも実験内容を疑問視する声が上がり始めていた。

「先生、軍はアニマロイドを戦争の道具にしようとしているのではないでしょうか？」

研究員達がそういったことを口にするようになってきた。研究所の士気に関わる問題なので、早速その旨を伝えるメールを栄輪儀さんに送る。するとその日のうちに返信がきた。

【親愛にして優秀なる研究所のみなさまへ】

『この度のアニマロイド研究、その目的は、中央コンピューターの管理者に動物並みの危険察知能力を身につけさせることにありました。そしてみな様のご尽力の甲斐あって、状況改善の糸口が見え始めています。しかしその努力にも勝る勢いで、我が星系の秩序は悪化の一路を辿っております。惑星ターミガンの経済崩壊に端を発した騒乱が、とうとう武力行使が行われるまでに発展してしまいました。ターミガンの軍部には、この混乱に乗じてクーデターを企てる動きもあり、惑星間紛争の発展にいたる可能性も十分にある状況です。そうなれば、それこそ億単位の人的損害が出ることは明白。それを避けるために、我々はアニマロイドの戦地投入を最も有効な手段の一つとして検討しています。まもなく軍上層部から作戦遂行の認可が下るでしょう。みなさまにおきましては、まことに恐縮ながら、生体兵器の開発、その一端を担わせてしまいました。私は今、

この宇宙における私という人間のあまりの非力さに対し、無念の思いを痛烈に感じております。しかしながらみなさまには是非とも、アルバトロス星系の平安のために、今後も変わらぬご助力を賜りたい。それが今の私の切なる願いでございます。ご理解とご協力のほどを、重ねてお願い申し上げます』

思ったとおりの返答だった。我々の研究は破壊を目的とする軍事技術に転用されていたのだ。即座に遺憾の意思をメールにしたため、送信した。

今夜は宿直なので、休む準備をする。研究所を見回った後、診療所を改装してつくった仮眠室で私服に着替える。ベッドの上にあの白猫が横になっていた。ベッドに腰掛け、ネコを膝の上に抱く。そのときポケットの中の電話が鳴った。栄輪儀氏からだった。

「もしもし私です、夜分遅くに失礼します、先生」

「いえいえ、しかしどうなされたのですか？　こんな遅くに」

「先ほどのメールについてです。いや実に意外でした。先生が反対の意思を表されるとは」

そのレスポンスの迅速さに、いささか虚をつかれはしたが、ここで弱気に出てはますます軍の良いようになるだけだ。そう思い、可能な限り毅然とした口調で対応する。

「もうしわけありません。自身の研究成果が戦争の手段にされることに、研究者として同意するわけにはいきませんでしたので」

「何をおっしゃるのです。先生の研究成果は実に多くの人間を救えるのです。私は悲しい先生はもっと知と合理性に明るい人だと思っていたんです」

「合理性を突き詰めてゆけば、戦争という手段が不可避になる場合もあるでしょう。しかし我々の研究がそれを助長してしまうことを、認めるわけにはいきません。人間として」

栄輪儀氏は受話器の向こうでため息をついた。しばしの沈黙が流れる。白猫はさっきからずっとこちらを見つめている。

「人間として……ですか」
さらにしばしの沈黙、かすかな鼻息だけが受話器の向こうから聞こえてくる。氏は、受話器の向こう側で一つ大きく息をつき、そして話しはじめた。
「先生は《キャッティークライマー》という電子ビジョンの番組をご存知ですかね？」
「……はい、ときどき見ますので」
「あのタレントさんの手足、実に良く出来ておりますよなぁ。まるで本物のネコみたいだ。いや、本物なんでしょうな、あれは」
膝の上の白猫に視線を落とした。その手足には爪も肉球もなかった。毛玉のように丸まった足先が、まるで大きな毛虫のよう動いて空を掻いていた。
「先生、ネコは良くて、人は良くないんでしょうかね。どうでしょうかね。人間様が幸せになるためには、何匹ネコを駄目にしたってかまわないのでしょうかね」
異性体融合は軍事目的以外の需要も発生していた。つい最近、とあるメディア企業から依頼が入り、名も知れぬ登山家に猫の手足を提供したばかりだった。栄輪儀氏は早くもその情報を仕入れていたのだ。氏が何を言わんとしていることは明らかだった。人のつまらぬ欲求のためにさえ猫を殺すことを出来る科学者が、戦争の被害を最小限に抑えるための技術開発に、どうして億劫になるのか。つまりはそう言いたいのだろう。しかしここで退くわけにはいかない。人を幸福にするための技術と、人を殺すための技術を一緒くたにすることは出来ない。
「我々科学者の目的は人間の幸福を最大化することです。そのために動物の犠牲は避けて通れません。風邪薬一つ作るにしても動物実験は必要なのです。しかしそれが人を殺す技術となれば話は別です。技術が作られれば確実にそれに殺される人が出る。その人の幸福は最小化される。そんなことは科学者の倫理として認められてはいけない。私は人々の幸福のために猫を殺すことは出来ても、人々の死

のために猫を殺すことは出来ません」

「そうですね、はい。正論だと思います。でもね、それはあくまでも理想だ。現実的な考え方ではない。私達の頭の中にあるのは、死ぬ人の数をいかに減らすかということです。戦争をなくすことじゃない。無くそうと思って無くなるものじゃないですからね。まったく嫌な職業ですよ軍人ってのは。こういう職業を長くやっているとね、人が死ぬとかいうことには本当に鈍感になるものですよ。先生だってきっとそうでしょ？　先生は生命工学の研究者ですから、動物が死ぬということに関してきっと鈍感になっているんだ。ためしにさっき言ったことを子供にでも言ってみるといい、さぞかし嫌われるでしょうな」

否定は出来なかった。確かにそうなるだろうと思った。

「先生、私は生まれてこのかた、人を殺したいと願ったことは一度も無いんだ。それは先生だって同じでしょう？　でもね、どうしたって人は殺されるし動物も犠牲になる。困ったものですよ本当に。私は先生に喧嘩を売っているんじゃない。私は先生に助けを求めているんです。メールにもちゃんと書きました。私は無力だって。この広い宇宙のネットワークの中の、ほんの小さな歯車に過ぎないんですよ私は。お上がやれと言ったらゴミ掃除だって宇宙戦争だって何だってやらなきゃいけない。嫌だと言ったところでクビを切られて、他の人間が取って代わるだけです。世の中そんなものですよ。ねえ先生」

それは研究者たる我々も同じなのだと、そう氏は暗黙のうちに告げていた。我々が研究を放棄しても、すぐに代わりの人間を見つけて、同じことを続けるのだと。

「じゃあ軍の上層をなんとかすれば良いじゃないかとか、そういうことを言う人はたくさんいるんです。でも本当に的外れな意見だと思いますよ。確かに私の上には胸にバッチを歩けなくなるほど付けた人が居ます。論理に耽溺しすぎて半分脳みそが涌いたような連中です。でもね、その上にもっと大きな抑圧装置が働いているんです

よ。先生ならおわかりでしょう。エゴってやつですよ、人間のね。戦争反対とか言いながら、毎日メタンをつかってお風呂を沸かしたり、安い輸入食材を買いあさったりする人達ですよ。貧乏人は可愛そうだ、でも自分達は裕福でいたい。争いは嫌だ、でも平和は欲しい。そんな矛盾をわめき散らしながら、結局嫌なことは全部見えない場所に押しのけてしまっているエゴイストどもですよ。これまで争いや搾取をすることなく、平和と繁栄を成し遂げた文明がありましたかね？　人はいつだって銃とかお金とかを使って、弱者と強者を分けることで発展してきたんです。今はホトトギスが強者で、タヽミガンが弱者だ。そんな不可思議な構造が我々の上にのしかかっていて、我々を戦地へと駆り立てるんです。私達にできるせめてもの抵抗といえば、持てる力を総動員して、可能な限り早く戦争を終わらせることくらいなんですよ！」

栄輪儀さんはいい加減喋り疲れたようだった。よほどストレスが溜まっていたらしい。叩きつけるような言葉を吐き出しきると、受話器の向こうから荒げた呼吸の音が聞こえてきた。栄輪儀さんの主張が正しいのかどうかは、どうにも判断できないことだった。

「まあ、反対されるのなら、代わりの研究者を立てるまでです。何か言いたいことは？」

「いいえ栄輪儀さん、もう十分です。今日はもうお休みになられたほうがいい」

「そうですか、そうですね、お気遣い痛み入りますよ、では失礼しますね」

電話を切ると一気に疲れが押し寄せた。額や脇の下に変な汗をかいている。少し冷たい風に当たって頭を冷やしたい。そう思い、猫を抱えて窓際に行く。窓を開けると、冷えた空気の向こうに、無数の街灯りが見えた。

幾億千の欲望を包んで光る人の街。人一人の力では何もかも変えようの無い世界がどこまでも広がって、この惑星を覆い尽くしていた。氏の言うとおり、こんな世界にあっては人が死ぬのも、猫が犠牲に

なるのも、確かに仕方のないことなのかもしれない。

「あっ……」

夜景を眺めながらぼんやりとしていると、突然猫が腕のなかで暴れだした。窓から流れこむ冷気を避けようとしたのだろうか、それともこの研究所を抜け出して自由になりたかったのか。気づいたときにはもう遅かった。猫は腕の中を抜け出し、窓の向こう側に躍り出ていた。白猫は慌てて窓際にその爪のない前足を引っ掛ける。しかしその足で何かを掴めるはずもなく、その体は窓の向こうの闇にこぼれ落ちていった。

慌てて階段を駆け下りて、猫が落ちたと思しき場所に行ってみる。植え込みの一部が潰れていたが、そこに猫の姿はなかった。

＊＊＊

惑星ターミガンで戦争が始まった。毎日人が沢山死んでいる。栄輪儀さんの言う通り、それは誰にも止められないものだった。

まず始めに、飢えたターミガンの民が惑星外の経済を略奪するようになった。ターミガンにあったホトトギス星籍の食品合成施設が襲われ、衛星軌道上のスペースショッピングモールが暴走した宇宙軍に占拠された。

小惑星やスペースコロニー、そしてホトトギスを含む5つの惑星からなるアルバトロス星系共同体、それら全ての治安を統括しているアルバトロス宙艇団が、ターミガンに対する隔離政策を決定すると事態は一気に悪化した。しかしこれは軍の横暴などではない。この決定はあくまでも民主的に決められたことなのだ。アルバトロス星系に暮らす２００億の人々、その7割がターミガンの隔離に賛成したのだった。まさに厄介払いと言うほかにない決定だった。

ターミガンの人々がどれほど落胆したか、それは想像を絶する。ターミガンの防衛軍は直ちにクーデターを起こし権力を掌握すると、アルバトロス宙艇団に対して宣戦布告した。航宙船の製造が盛んな

ターミガンの潜在的な軍事力は、アルバトロス全星系の2割を占めると言われている。まともにぶつかりあえば、その被害は計り知れないものになる。

惑星ターミガンの一番近く、イオンロケットで二週間ほどの位置にある惑星ホトトギスは、この戦争の最重要拠点とされ、星系中の戦闘用航宙船が周辺宙域に展開した。

軍は戦争に関する一切のことを教えてくれなかった。しかし、連日報道されるニュースなどから、軍がどんなことを行っているかは容易に想像できた。

栄輪儀氏はまっ先にアニマロイドの戦地投入を提言したようだ。最初の戦闘において目覚ましい戦果があがったのだ。おそらく軍は実験中だったアニマロイドを武装小艇に乗せて、スペースデブリか何かに紛れ込ませて敵陣へと送り込み、先制攻撃を仕掛けさせたのだろう。

我々はとある筋より、隔離研究所で行われている資料の一部を入手し、そして愕然とした。戦地に送られたアニマロイドは全て強制矯脳を施されており、およそ理性と呼べるものを根こそぎ奪い取られていたのだ。反射促進剤や興奮剤の効き目を調べたデータがあることから、おそらくは戦闘中に使用されたのだろう。しかも限界に近い量をだ。生還させることはまったく想定されていなかったのだ。限界量の薬を投与された彼らは、その脳内に詰め込まれた本能を爆発させ、砲火の中を駆け巡り、そして散っていったのだろう。

知らなければ良かったのかもしれない。ふとそう思うことがある。ニュース番組でアニマロイドのことが報道されることは一切ないが、それでも我々にはわかってしまう。戦争の状況が報じられるたびに、研究所の雰囲気は重くなっていくのだった。

研究員の中には精神に失調をきたし、通院する者まで現れ始めた。

「先生、僕はもうこの現実に耐えられません。実家に帰って畑を耕そうと思います」

「先生、最近悪夢ばかり見るんです。しばらく療養したいと思いま

す」

日に日に、研究員達は研究所を去っていった。研究データの報告を渋っていることは、軍にはとうの昔に気づかれているらしい。最近仕事がめっきりとなくなった。

何もせずにジッとしていても気がめいるだけなので、診療所の仕事を少しずつ再開することにした。軍は当然のようにとやかく言ってきたが、言いくるめることは難しくなかった。この建物でなにやら怪しげな研究をやっているということで、近隣住民から苦情が出ていたのだ。診療所を再開すれば少しはイメージが良くなるだろうと提案したところ、渋々ではあったが承諾が得られた。

ある日の昼下がり、三人の家族連れがやってきた。

母親は顔に酷い火傷を負っていた。

「家内がこの通り顔にひどい火傷をしてしまいまして、普通の移植ではこれ以上よくならないらしいのです」

「お母上のお顔が元に戻るなら、私どんなことでもします！　先生、どうかお願いします」

娘さんが一番しっかりしているように見えた。三人が三人とも同じような表情を浮かべている。一見仲の良さそうな家族だが、その裏に言い知れぬぎこちなさを感じる。三人が懸命に気を使い合っている様は、見ているこちらが申し訳なくなる程だった。

「当クリニックを訪れたということは、誰かの皮膚をお母様の顔に融合させる、ということでよいのでしょうか？　ここで行っているのはそういった治療ですので」

「はい先生、私の皮膚を使って、お母上の顔を直してあげてください」

「貴子、まずは先生の話を聞きましょうね。無理があるようならお母さん、顔はこのままでいいんですから」

「いいえ、お母上、顔は女の命です。必ず直してください！　ね、お父上」

「うむ、そうだね……先生、いかがなものでしょうか？」
「そうですね、まずは少し傷の具合を調べてみましょう」
母親の顔を三次元光スキャナでモニタリングし、火傷の面積を調べる。母親本人の皮膚を使って治療するのならば、６センチ四方の皮膚の切り取りが必要になる。若い細胞の方がより多くの複製に耐えるので、娘さんの若い皮膚を使えば、およそ２センチ四方で済むだろう。出来栄えを考えても、娘さんの皮膚を使えるにこしたことはない。その旨を家族に伝えた。
「お母上、２センチくらいなら全然平気ですわ、是非とも使って下さい！」
「でもねぇ……貴子の体を傷つけるなんてそんなこと、やっぱり私の体で……」
家族はしばらく問答を続けていたが、やがて娘さんの皮膚を使うことで合意したようだ。
「太ももの内側の皮膚が柔らかくて扱いが良いです。傷も目立ちませんので。出血はしませんが、真皮細胞まで頂くので、痕はしばらく残ります。こまめな消毒も必要です」
一通りの説明を行い、母子にナノマシンを注射する。そして光の部屋に入ってもらう。
「では、しばらくじっとしていてください」
光の部屋に光が満ち、娘さんの内腿が光り始める。程なくして光の粒子は母親の頬骨の辺りに集中し、そしてキラキラと輝きだす。火傷で痛んだ皮膚の細胞を分解し、新しい細胞に置き換える。施術は２分ほどで完了する。
「はい終了しました、出てきてください」
母親は部屋を出ると真っ先に娘の内腿を確認する。着物の裾をたくし上げると、そこにはほぼ正方形にくぼんだ赤い痕があった。
「だ、大丈夫なの貴子？　痛くないの？」
「ぜんぜん平気ですお母上、それよりもお顔！　凄いですわ！　びっくりするほど綺麗になっています！　早く鏡を見てきてください、

はやく！」
娘さんにせかされて、二人は手洗いに駆け込んでいく。
「先生、かなり生々しい傷痕でしたが……」
「保護剤をきちんと使用すれば三ヶ月ほどですっきり消えるでしょう」
「はあ、それにしても見事な技術です。家内の顔はもう治らないのではと思っていたのに」
「傷の状態を見るに、油火傷か何かでしょうか」
「はい、よくお分かりで。家内は両手が生まれつき不自由で、てんぷら油を片付ける時にアシストアームが誤作動を起こしてしまって、引っくり返して被ってしまったのです」
「それは大変なことでした」
「いやしかし、先生のおかげであの通り、綺麗さっぱり治りました。しかも何歳も若返ったようにみえます。本当にありがとうございました」
「よろこんでいただけて何よりです」
この治療には保険が利かない。さらに最大限の増殖操作を行ったために、かなりのナノマシンを消費した。父親に請求しなければならない金額も相当なものになる。
母と娘が身を寄せあって診療室に戻ってくる。母親は少し涙ぐんでいた。娘さんの傷痕を消毒し、保護剤を塗り、そして受付に向かい、料金を受け取る。
「それではお大事に」
そういって三人の姿を見送る。父と娘が、まさに身を切って母を助けた。そんな光景を目の当たりにして、久しぶりに人の心をとりもどしたような、そんな気持ちになった。科学は人を苦しめるためにあるんじゃない。人を楽にするためにあるのだ。強くそう思う。
今日一日の診療を終え、後片付けのために外に出る。
日が暮れはじめていた。西の空が暁に染まっている。以前は不気味がって人が避けて通っていた通りに、買い物袋を提げた人々の姿が

見えた。みな今日一日の営みを終えて、それぞれの帰路へとついていく。この世界はひどく不完全で冷たいものかもしれない。しかしそれでも人々は、不完全であるなりに、懸命に生きようとするものなのだ。

「ん……おや？」

表通りに出した看板を片付けていると、ビルの影から猫が出てきた。良く見ると耳が無かった。尻尾もなかった。足の先もなかった。生きていたのか。しかしその姿はいったい？　そう思いながら彼の側に歩み寄る。猫は衰弱していて、体のあちこちに擦過傷がみられ、ところどころ毛がむしれていた。先のない四つの足で危うげに立って、小刻みに震えながらこちらを見つめていた。子供にでも捕まっていじめられたのだろうか、体に黒いペンでいたずら書きをされていた。

診療所につれて帰ろう。心の中でそう呟く。

そして体を綺麗にしてやろう。水とエサを沢山あげよう。もう窓から落とさないようにしよう。そしてもう二度と彼を奪うまい。決して何も奪うまい。

そう心に念じ、彼に手を差し伸べる。それにしても、誰がこんな酷いことを……。

――お前だ！

猫が叫んだ。人の言葉で。そしてこの手首に噛み付いてきた！

「うわあああああああ！」

私は叫んだ。恐怖で背筋が凍りついた。猫は末恐ろしい形相でこちらを睨んでいる。

肉に牙が食い込み、血管を突き破り、手首から血が溢れ出る。私は猫を振りほどこうと、反射的に、暴力的なまでに、この腕を振るってしまった。自分可愛さ故に、彼の精一杯の牙を退けてしまった。

あっと思った時にはもう遅かった。それほどまでに猫の体は衰弱し

きっていた。グキリと奇妙な音をたてて、猫の首があらぬ方向に曲がり、ひしゃげて折れた。

そして猫は絶命した。怒りと恨みに支配されていたその体からは力が抜け、グッタリとしたまま動かなくなった。私は震えの止まらない両手でその亡骸を抱え込み、なすすべもなくその場に崩れ落ちた。

私はこの時、私の人生の過ち、その全てについてようやく悟った。

私は自分のことを罪深い人間だと思っていた。しかし違った。私は人間ですらなかったのだ。人間というシステムに支配された冷たい機械。そして、幸福というパラメーターを最大化するための計算をし続ける、残酷な演算装置。それが私だった。それが私だった！

思わず仰ぎ見た天空は、まるで白猫の運命を嘆くかのように、夕日で真っ赤に燃えていた。私の行為をあざけるようにして、どこか遠くでカラスが鳴いた。

そして私は思った。この頭の中にあるらしい、脳という名の無機質な演算装置に、なけなしの血潮が巡ってくる。人々が幸せになるために、この猫の犠牲は本当に必要だったのだろうか。今の私にはどうしてもそうは思えない。罪なき命を貪って、誰の心をも満たすことができず、奪ったものをただ虚無に向かって投げ捨てる。私がしてきたことは、とどのつまり、そういうものではなかったか？　何もかもが無意味なことではなかったか？

この猫はどれほど私を憎んだだろう。そう思うと、瞳の奥から熱いものが溢れて止まらなくなった。この胸を満たす悔恨も、この腕の中の無念も、もはや数式では解決されない。私はこれから何をすれば良い？　何もかもが真っ赤に染め上げられた世界で、人の愚かさをそのまま形にしたような、この白い猫を抱いて。私は生まれてはじめて、心の底から泣いた。

＊＊＊

猫の亡骸を抱えて診療所に戻った。

椅子に座り、音楽をかけ、暮れゆく窓の外を眺めながら、何時間もそのままでいた。

辺りがすっかり暗くなった頃、ようやく立ち上がる気力が湧いてきた。色々なことを考え尽くしたが、その結論はとどのつまり、私の人生は何もかもが間違っていたということだった。せめてこの白猫だけは救いたい、私は強くそう思う。

猫の体をリンネルで包んで机の上に置く。そして研究室に降りて、ヒムとゼムのいる部屋に向った。ゼムは私の手首に刻み込まれた傷を目ざとく見つけて睨んできた。

「猫を殺したんだ」

ゼムはジャーキーをかじりながら寝そべっていた。箱レコードを聴きながら、とてもくつろいでいるようだった。ヒムは分けてもらったらしいジャーキーを早々と噛み下すと、物足りなさそうにゼムの方を見た。

「……そうか」

ゼムはそれだけ言うと、そっぽを向いてしまった。私は懐から鍵を取り出す。

「君にこれを渡しておく。この檻のカギだ」

ゼムは目線だけをこちらに向けて、あまり興味がなさそうに鍵を見る。

「なぜそんなものをくれる」

「これからしばらくの間、ここは人の入って来られない場所になる。我々もここからいなくなるだろう。だから渡しておくんだ」

ゼムは仰向けに転がると、またジャーキーを噛みはじめた。

「もう君達を檻に閉じ込めておく者はいない。後は君達の好きなようにやってほしい」

「我等は檻になど入ってはいない」

ゼムはそう言ってジャーキーを噛み千切り、残ったかけらをヒムに投げた。そしてトランプのカードを取り出すと、鍵のことなどどうでも良いかのように、めくり始めた。

「そうだな。檻に入れられていたのは、むしろ我々の方だったのかもしれない」

ゼムは『やっとわかったのか、このうすのろが』とでも言うようにして、こちらに向かって牙を見せてきた。私は檻のなかにカギを置くと、何も言わずに部屋を出た。

彼は檻の中にあってなお、十分に満ち足りているようだ。彼らについて我々が心配しなければならぬことなど、おそらく無いのだろう。彼らはきっと我々以上にたくましく、したたかに生きていけるのだろう。

診療所に戻る途中、通路で研究員の一人とバッタリ出くわした。シーと一番仲の良かったあの若者だ。こちらに気づいて、なにやらひどく慌てふためいていた。

「あ、うあ！　せ、先生！」

「お出かけですか？」

「は、はい、あの、ちょっとコンビニまで」

彼は青ざめた表情に苦しい作り笑顔を浮かべる。私は研究室の入り口に向かって言った。

「そこにいるのはわかっている。出てきなさい」

彼の額に冷汗が浮かぶ。やや間をおいて、扉の影からコートとマスクで体を隠したシーが現れた。彼女は金色の虹彩を隠すためのサングラスを外すと、射るような眼差しで睨んできた。

「シー！　でてきちゃだめだ！」

若者は酷く狼狽しているようだった。アニマロイドを檻の外に出すことは厳重に禁じられている。もし軍部にバレれば、それ相応の処分が待っているはずだ。彼はしばし頭を抱えて右往左往していたが、やがて覚悟を決めたらしく、こちらに向かって頭を下げてきた。

「お願いします先生！　見逃してください！」

私はシーの顔を見る。眉間に険しいシワをよせ、若者の服の袖をぎゅっと握っている。邪魔する者は誰であっても容赦しない、そんな決意が見て取れた。

「表には軍の警備員がいます。抜けられるのもでしょうか？」
「ぐ……いざとなったら、刺し違えてでもこの子を逃がします！」
その眼差しに曇りはなかった。彼がシーを救いたい気持ちは本物のようだ。
「二階の物置に隠れていなさい。今から一時間ほど後に、この研究所に混乱が起こります。それに紛れて、二階の窓から逃げなさい」
「え？……先生、それってどういうことですか？　いったい何をする気ですか！？」
「あなたにはもう関係ないことです。行きなさい」
「でも先生！　それってただことじゃないですよ！　どういうこ……」
「いきなさい」
彼は観念したようだった。こちらに伸ばしかけた腕を力なく下げる。
「わかりました……先生、どうかお元気で。シー、行こう！」
二人は手を繋いで駆けて行く。シーは何度かこちらを振り向いて、私の姿を見つめてきた。
診療所に戻ると、さっそく光の部屋を起動させる。以前から考えていた理論がある。それを実践する時がついに来たのだ。人の体を直接、別の動物に作り変える理論だ。
しかし、この理論にはいくつかの重大な欠点がある。ナノマシンを極めて大量に消費し、それを制御・実行するために、膨大な計算量と時間を要する。さらに今の診療所の設備では暴走によるナノマシン汚染の危険もあった。そしてなにより、人そのものの体を実験材料にしなければ理論を実証できないということが、これまでこの実験がためらわれてきた一番の理由だ。しかし今。その憂いは全て無くなったと言っていい。私の体を実験材料にする。全てはそれで解決する。採算なんて考えなくてもいい。時間もたっぷりある。この研究所が使われなくなって困る人もいない。
そして何もかも上手く行って、この体を猫の姿に作り変えることができたなら、その全てをこの白猫に捧げよう。それをもって私の償

いとしよう。
ありったけのナノマシンを光の部屋に注入し、何本もの注射を自分の体に打ち込む。制御板を操作して、ナノマシンの活動レベルを「最大値」に設定する。光の部屋の開放を自動に設定し、操作終了後に猫が外に出られるようにする。おそらく制御を失ったナノマシンが外に飛び出して、汚染警報が鳴るだろう。このような街中でナノマシン汚染を起こしたとなれば、それは大問題だ。軍は隠蔽のために、当分の間この施設は現状のまま放置することになるだろう。シー達が無事に逃げられることを祈る。ゼムとヒムが生き延びてくれることを祈る。
起動スイッチを押すと、機械が唸るような音をたてながら動き出した。私は白衣を脱ぐと、白猫の亡骸を抱えて光の部屋に入り、扉を閉じた。
光の部屋に光が満ちる。私と猫の体は、何百億もの微粒子に取り囲まれて、砂人形のように分解されていく。それはやがて脳組織にまで至り、意識がチカチカと明滅しだす。私の体も、猫の体も。まるで砂銀をはたいたように輝いている。
猫になれ――拡散していく意識のさなか、私は心のなかで呟いた。
この腕の中、今や白い光の玉と化した猫。はたして彼は復活できるだろうか？
そして私に、どんな罰を望むだろうか？

＊＊＊

この世のどこか、不思議な花の咲き乱れる丘に男は立っていた。
色とりどりの花々は、よく見ると全部猫だった。
葉は尻尾だった。花弁は耳だった。
そして花の芯は猫の目だった。
澄み渡る空と、萌え盛る大地。
その間を吹き抜ける風に揺られて、猫の花達は笑っていた。

男は呼吸さえままならない。
胸がつまって苦しくて、心臓がドクドクと脈打っている。
男は何とか一つ息をつく。
その音に気づいた花々が、いっせいに男の方を見た。
“おまえは誰だ”
無数の視線はそう問うた。
“お前はいったい何をした”
無数の視線はそう問うた。

無数の視線が投げかける詰問が、男の体の細胞を一つ一つ潰していく。男は思わずうめき声をあげ、体を抱えて震えだす。
『これが裁かれるということか。なんと美しく、なんと恐ろしい光景なのだろう！』
男は心の内でそう叫ぶ。
無数の猫の花に足が生え、男のまわりにザワザワと寄り集まってきた。

“お前をどうしてくれよう”
無数の足音はそう言った
“お前にはどのような姿がお似合いだろう”
無数の足音はそう言った

猫の花達は、男に向かい、一斉に触手を投げかける。
クモの糸のように細い触手が、幾重にも束ねられ、男の全身をなめ回していく。
男の体は憑かれたように震えだし、やがて体中の穴という穴から液体が吹き出した。
男の体がグズグズに溶けていく。男の魂が水飴のようにとろけていく。

そして男はネズミになった。ネズミになって猫に追い回された。必死になって逃げるネズミを、何匹もの猫が面白そうに追いかけていく。すぐには捕まえず、もて遊ぶようにして追い詰める。恐怖のあまり、糞尿をたれながすネズミ。猫達はネズミを岩の窪みに追い詰めると、前足で蹴り始めた。ネズミは掠れた声で泣きわめく。泣く力すらなくなった頃に、ネズミはようやく解放される。四肢を千切られ、腹食われて、最後に頭をガブリとやられた。

そしてネズミは魚になった。小さく透明な稚魚の姿で、海を目指して泳いでいく。大きな魚に食われたり、ひどい乱流に飲まれてバラバラになったり、仲間達は次々と力尽きて川の底に沈んでいく。それでも魚は海を目指した。食べる側にまわれる程に大きくなれた者は一握りだった。魚は真っ暗な海を泳ぎまわって大きくなり、あるとき何かに引っかかって海の上に引き上げられた。魚の体は生きたまますりつぶされて、そして猫のエサになった。

そして魚はミジンコになった。触覚をせわしなく動かしながら水の中にプカプカ浮かんで、真っ黒な目で辺りを見渡している。同じような姿をした生き物がたくさん浮かんでいて、とても気持ちが悪かった。ミジンコは目の前に浮かんでいた丸い物を口の中に押し込んだ。噛んでつぶすと中から甘い液体がドロリと出てきて、腹の中に溜まった。これでもうしばらく世界を見つめていられる。そうミジンコが思ったとき、辺りがザワザワと揺らめいて、あっという間に真っ暗になった。一つの方向に水が流れてゆき、体が勝手に押し流されてゆく。体中がピリピリしだした。少しずつ溶けているのだ。辺りは真っ暗で、たくさんの声なき悲鳴に満たされている。もう少しの間、明るい場所に居たかった。最後にミジンコはそんなことを思った。

何度も何度も生まれ変わり、生まれる度に何かに食われた。そうして男の魂が、綺麗さっぱり微塵と化した頃、光が渦巻く部屋の中、一匹の白い猫が姿を現した。

“君は君か？　それとも私か？”

男は白猫に向かってそう問いかける。

猫はその白い不思議な眉毛をピクリとさせる。

“さあ、もうあと一息だ。私の全てを飲み込みたまえ”

まもなく猫は目覚めるだろう。

新しい体と心を得て甦った猫は、一体どんな世界を見ることになるか。

扉は今まさに開かれようとしている。

第?部　―2―

猫を鳴かせた好奇心

太陽のように明るかった部屋に、またもとの暗闇が戻った。
僕の周りにまとわり付いていた粒子は、綺麗さっぱり居なくなっていた。
「大丈夫か！　早く出てくるんだぜ！」
光にやられて何も見えない。僕はふぐりの声を頼りに、よろよろと部屋の外に出る。
「なんだったんだろう？　今のは」
「よくわかんねえけどココはやばい、早く逃げるんだ！」
「目がまったく見えないんだ」
「俺っちの身体にくっついてこい！」
僕はふぐりのお尻に頬ひげをぴったり付けて、駆け足で部屋を出た。
扉を抜け、通路を渡り、階段を下り、来るときに入ってきたパイプのある部屋までたどりついた。
目がだんだんと回復してきて、部屋の輪郭がうっすらと見えるようになってきた。
小さな動物を入れるためのカゴが幾つも積み重ねられていて、部屋の真ん中に置かれた長机の上には、何かを包むための白い大きな布が畳んで置いてあった。どうやら物置として使われていたらしい。
ひとしきり部屋を眺め回してから、僕はふぐりから離れ、長机の下に隠れるようにして身を伏せた。ふぐりは鼻をヒクヒクさせながら辺りをしきりに嗅ぎまわり、さしあたっての危険がないことを確認すると、僕の傍に寄ってきて言った。
「お前なんか震えてるぜ！　大丈夫か！」
そう言われて僕は、自分の体が小刻みに震えていることに気づい

たのだった。
「あまり良い気分ではないな……」
「ここで少し休むんだぜ！」
そう言うとふぐりは、机の上に飛び乗って辺りを警戒しはじめた。
「一体さっきのアレはなんだったんだぜ？」
「はて、とにかく酷い目にあってしまった。でもそのおかげで一つ思い出したことがあるよ。僕は昔、きっとここで暮らしていたんだ」
「そうか！　なんか俺っちもそんな気がしていたぜ！」
「でも飼われていたわけじゃない気がする。何かとても悲しいことがあった気もしている」
「なんだか複雑なんだな！」
「猫だったかどうかさえ良くわからないんだ」
頭の中がもやもやする。昔の記憶があるようでない。そのくせ妙な記憶の断片が、時折頭の奥からまろび出てくる。それは猫である僕には到底経験しえないことばかりだった。
僕は僕が猫であることを確かめるようにして、自分の前足を舐めてみる。
そこには毛があり、爪があり、肉球がある。その前足で頭の毛を繕う。
そこには毛があり、耳があり、音がある。
後ろを振り向くとクネクネ動く尻尾が見える。
「僕はいったい何者なんだろう？」
「知るかいな。でもお前お前なんだぜ！　きっと混乱してるんだ。俺っちが見張ってるから、とにかく休め！」
ふぐりにそう言われて、僕は再び目を閉じる。
「ねえふぐり、君って思いのほか頼りになる猫だったんだね」
「……前からひとこと言いたかったんだがな」
「なんだい？」
「褒めるけなすかどっちかにすれ！」
僕はふっと笑って片目をあける。

「もちろん全力で褒めているんだよ？」
ウィンクした僕を見て、彼はビックリしたようだ。
「それはそれで照れくさいんだぜ……」
ふぐりはバツが悪そうに後ろ足で首元を引っ掻くと、顔をそむけてブニャっと鳴いた。

第?部　―1―

一、背徳の館

お爺さまが倒れられた。
あの母や叔父たちが、熱心な看病を続けているのだから、おそらくもう長くはないだろう。
寝室を淡く照らすランプ。この腕の中で心地よさげに目を瞑る悲劇の令嬢。僕はドロシーと二人、こうしてベッドに横たわり、まだ見ぬ明日に思いを馳せているのだった。
僕は彼女の髪を撫でつつ、一つ大きく深呼吸をし、そして彼女に向かって告げた。
「ドロシー、今から決行しようと思う」
そのか細い腰がピクリと跳ねた。ドロシーは目を開き、上体を起こして僕の顔を覗き込む。
「とうとう、この時が来たのですね、紀夫さま」
「ああ、そうだよドロシー」
「上手く行くと良いのですが……」
「上手くいくさ、きっと上手くいく」
不安げな表情を浮かべる彼女に僕は言う。そして電話を手にとり、スキャンダルに食いつく能力には定評のある、レイメイ新聞社にコールした。ワンコール鳴るか鳴らないかのうちに、知り合いの記者が出た。
「僕だよ」
「これはこれは、紀夫さんじゃないですか。どうしたんですか？こんな遅くに」
「実はね、ちょっと重要な情報を知ってしまってね……かくかくしかじか」
「な、なんですってー?!」

電話の向こうにざわめきが走るのを感じる。僕はありのまま全てを伝えると、それ以上付け足しも差し引きもせずに電話を切った。彼らはたぶん、今夜は眠れないだろうね。

「始まりますわね、紀夫さま」

「ああ、僕の人生の始まりだよ」

「紀夫さまは、これから一体どんな事業を始めるおつもりなのですか？」

そうドロシーは、さも不安げな表情を浮かべながら聞いてきた。やはりそこが気になるか。僕だって自分の将来に不安がないわけじゃない。でもプランはあるちゃんと。それは夢かもしれないが、きっと追い求める価値のある夢だと、僕は思っている。

「城を作ろうかと思っているんだ」

「お城ですか？」

ドロシーは意外そうでいて、どこか期待を込めたような眼差しでこちらを見てきた。

「……とてもお金がかかりそうですが、それで収益が上がるのですか？」

「お金を出すのは僕じゃない。この星の人々さ」

「はあ……」

「僕が資金を投入するのは、城を建てる場所を確保するためだけにさ。地球で実際に作られたという城の設計図をアーカイブから引っ張り出してきて、それを人々に配るんだ。作り方のノウハウも合わせてね。そうすればみんなで勝手にお城を作ってくれる。作った城は色んなことに使えるんだ。住むことも出来るし、仕事場にもなる。娯楽施設や集会場にしたって良いし、何か面白いイベントをやるものいい。僕はそんな彼らの営みの中から、少しずつ使用料を頂くんだよ」

「なんだか夢見たいな話ですわ。でも紀夫さまが言うのだから、可能なことなんでしょうね」

「お爺様の温泉を見て思ったんだ。この星に今一番足りないもの、

それはコミュニティなんだってね。みんなで集まってワイワイやれるような場所だ。いまや大抵の生活必需品は工場で自動生産されるし、イリジウム・オブ・ホトトギスが稼動すれば、暮らしに必要な様々な雑用もしなくて済むようになる。きっと暇な人達が一気に増えるだろう。ねえドロシー。何もしなくても生きていける世界を君はどう思う？　何もしなくていい代わりに、何も手にすることの出来ない世界だ」

「はい……とても虚しい世界だと思いますわ。そんなふうに生きて、そして死ぬ時がきた時に、いったい何を思えばいいかわかりませんもの」

僕は彼女の髪を撫でる。そうだ、その通りだよドロシー。君はやはり素晴らしい。

「僕の作る城は人々の生きる意味そのものになるんだ。『あの部屋は自分が作ったんだ』とか『あの堀は私が掘ったんだ』とか。『あのふすまの絵は俺が描いたんだ』とか。城作りに関わった人達がみんな、そう思って生きていけるような、そんな場所になるんだ。時の流れとともに城は際限なく大きくなっていくだろう。僕はその城の天守閣から、そんな人々の営みを眺めながら暮らすんだ。それが僕の、今のところの未来図さ」

ドロシーは僕の話しを聞き届けると、とても嬉しそうな表情を浮かべた。

「そして私は、そんな紀夫さまのお側でお仕えするのですね」

「ああそうだよ、ずっと僕の側にいておくれ、ドロシー」

彼女は僕の胸に顔をうずめると、肩を震わせながらクスクスと笑い始めた。もしかすると半分は泣いているのかもしれない。彼女の唇からこぼれ出る微笑みは、そういった感じの、なんとも例えようのないものだった。彼女はひとしきり笑い、そして泣くと。体を起こしてベッドの隅に腰かけた。

「どうしたんだい？」

「紀夫さま、私なんだか興奮してしまって、とても紀夫さまの隣で

は眠れそうにないんですの」
「いいじゃないか、ずっとおきていれば良い」
「いいえ、いけませんわ。紀夫さまはこれからがいよいよ大変なんですもの。私がそばにいては睡眠の妨げになるだけですわ。だから今夜は地下室の自分の部屋で眠ります。おやすみなさいませ……」
まあ、それもいいだろうさ。君はもうすっかり僕のものなんだからね。
あの親父が引き継いだ世暇家の自己株や証券の類は、明日にはきれいさっぱり紙切れと化す。けれども僕のあの金庫の中にある、祖父の財産の価値は消えない。
ホトトギス惑星債――この星そのものを担保にして発行されている債券だ。ホトトギスがブラックホールにでも飲み込まれない限り、この債券の価値が消えることはない。世暇家の実質的な財産は、いまやこの債権と屋敷の敷地くらいのものだろう。この資金をどう運用すれば、もっとも効率よく事業を起こせるか、僕は眠り際に取りとめも無く考える。
もしすべてが上手くいって、僕がホトトギス城の天守閣で暮らせるようになったら、そのとき僕の瞳にはどんな世界が見えてくるのだろう。

二、父として

まだ日も出ないような早朝に、パッチリと目が覚めてしまった。床の間に敷いた布団の上、もぞもぞと身を起こす。清美さんはまだ眠っている。私はなるべくそちらを見ないようにしながら、そっと寝室を出る。
妻の寝顔は見てはいけない。それは常に美しいとは限らないものだから。これは私の恩師の受け売りだった。そしておそらく間違いの無い言葉なのだと思う。ただ見さえしなければそれで良い。そういう

った事例は、世に山ほどあるのだから。

書斎に入り、机の上に出したままの書物をボンヤリしながら片付ける。窓の外に広がる街並みはいまだ眠りの底にある。貴子はちゃんと眠れているだろうか。そう思うと、自然と目の奥が熱くなった。一緒にお風呂に入ることを拒絶された父親が、見るも耐え難いほどに落胆するという話は、酒の席の笑い話で良く聞かれることではあった。しかしそれがこうして自分自身の出来事になってみると……こう……なんとも例えようのない感慨が込み上げてくる。

私はこれまで一度だって、貴子のことを如何わしい目で見たことはない。しかし貴子は女としての羞恥心から、この手を払いのけたのだった。娘はいつの間にやら女になっていた。我が子を産湯に浸からせてやった時から、私は何一つ成長してこなかったのかもしれない。私の中の貴子は、今でもその時の姿のままだったのだ。大人は成長しない、つくづくそう思う。

気分を変えよう。いつまでも落胆しているわけにはいかない。サイフォンに水と茶葉を入れてメタンバーナーにかける。程なく水が沸騰を始め、茶葉が湯に浸される。煎茶の若々しい香りが書斎に立ちこめる。

茶をすすりながら新聞紙をめくり、最新のニュースをダウンロードする。ユートピア衛星の永久住民が１０万人を突破したことが報じられている。ユートピア衛星は惑星ホトトギスのラグランジュ点に建造された直径６ｋｍの人工天体で、アルバトロス星系中の欲望が向う先だ。その中では現在、２００万人の一時住民と、１０万人の永久住民が暮らしている。永久住民はその脳組織を素粒子レベルにまで分解し『ドリームキャスター（夢の鋳造器）』と呼ばれる装置の中でドロドロに溶け合って、その形而上学的な空間の中で、天上のような生活を送っていると言われている。なぜここで私が「言われている」などという曖昧な表現を使っているのかといと、それは素粒子にまで分解された人の脳組織が、それでもその人自身であり続けるのかということに、現在のところ科学的な確信がもたら

されていないためだ。新聞の続きを読む。

【ユートピア惑星の永久住民、１０万人を突破】

『惑星ホトトギスのラグランジュ４に位置するユートピア惑星の永久住民が１０万人を突破した。これを受けて衛星管理局はドリームキャスター１１号炉の建設を決定した。建設費は１京６０００兆ウェン。これは惑星ホトトギスの年間ＧＤＰの１７倍に相当する。当社が実施した世論調査によれば、新炉建設に賛成する者は４２％反対が２１％　どちらともいえないが３７％となっている。ユートピア衛星の存在は、アルバトロス星系に暮らす住民のモチベーションを維持するために必須という見方が強く、反対派に対して二倍以上の差となって現れている』

ちなみに私は反対派だ。ユートピア衛星の増強に関する投票が行われた時は必ず反対票を投じることにしている。建造に必要となる巨額の建造費は利用者から徴収するわけだが、その際あまりに巨額な資金が動くことが、星系の経済秩序を乱していると考えるからだ。確かに、ユートピア衛星が建造される以前には、星系中の人々の生きる意欲が著しく低下する現象がたびたび見られた。生きる目的のようなものを失った人々が集団ヒステリーを起こし、街中を裸で踊りまわったり、建物を手当たり次第破壊したりと、治安が酷く悪化した事例が過去にある。しかしこれは人々の精神の未熟が原因であり、人間の精神的な進化をもって乗り越えられるべき課題だ。ユートピア衛星は人間の原始的な欲求を満たし続けるものでしかなく、人間そのものの進展についてはなんら寄与していない。進化することを放棄し、原始的な欲求を満たし続けることで自分達の自我を維持しようという、ユートピア衛星の理念は、あまりに閉塞的だと私は思う。我々は精神的に成長しなければいけない。それはとても難しいことかもしれないが、少なくとも、成長への意欲を放棄してしまってはいけないのだ。

私はそう一つの結論に達すると、次の項目をダウンロードした。

【ホンコンカワゴエ温泉は偽物。世暇ＨＤの関係者が内部告発】

私は思わず立ち上がった。この記事が本当なら、ホトトギス経済の主柱である世暇ＨＤの失墜は目に見えている。しかも極めて身近な場所でのスキャンダルであるということが私を驚かせた。あの大旦那様が詐欺？　いや、あの方はそんなことをする人では……あのご婦人が何か画策していたのか？

「いったいどうなってるんだあの屋敷は……」

そう私が呟くのと同時に電話がかかってきた。会社からだった。私はすぐさま電話にでる。そして話を聞きながら服を着替える。直ちに出社して情報の整理にあたれという指示だった。私はかじりかけの饅頭を放り出したまま、書斎を飛び出した。

「あらフジキさん、どうなされたの？」

清美さんと廊下ですれ違う。丁度良かった。何も言わないで飛び出すところだった。

「ちょっと大変なことになったんだ。直ぐに仕事に向わないといけない」

「ええ？　一体なにが？」

「世暇家で不祥事が起きたんだ。どうやら温泉に関する詐欺があったらしい」

「まあ、それは大変！　朝ごはんはどうしましょう、お弁当は」

「ありがとう清美さん、でも今すぐにでも飛んでいかなければいけない……ああ、そうだ、このことは貴子にはまだ知らせないように。昨日、世暇さんのことでショックを受けたみたいだからね。追い討ちをかけるようなことにはしたくない。私のことは急ぎの仕事が出来たと言っておいてくれるかな」

「は、はい……わかりましたわ。帰りはいつになるでしょう？」

「なるべく早く帰るようにするが……正直どうなるか。お昼過ぎに

一度連絡をするよ」
「わかりました、お気をつけてフジキさん」
「ああ、じゃあ言ってくるよ清美さん」
「いってらっしゃいませ」
家を出ると東の空に朝日が昇り始めていた。私は貴子の部屋の窓にむかって「行ってくるよ」と呟くと、駅を目指して駆け出した。

三、白猫の夢

東のそらにうっすらと光が差したころ、僕とふぐりは例の建物を出た。僕はともかく、ふぐりは早く帰らないと女の子が心配する。建物を離れ、日の当たるところまで出る。昨夜の冷え込みのせいで霜が降りたらしい。建物の屋根や、道端の植え込みなどについた霜が、朝日に照らされてキラキラと光っていた。心なしか、昨日までとは街の様子が違って見える。不思議な感覚にとらわれつつ、僕はしげしげと辺りを見渡す。すると突然ふぐりが、驚いた顔をしてこっちを向き、素っ頓狂な声で「フニャ!?」と鳴いた。
「おまえ！　後ろになんか憑いてるぜ！」
「なんだって？」
後ろを見ると、確かに何かがそこには『いた』。僕の後ろというよりも、尻尾の上といった方が正しいと思う。暗がりではわからなかったが、日の光の中に浮かび上がるようにして、無数の塵のようなものがうごめいていた。僕は前足でそれを追い払ってみる。いったんはバラバラになるものの、しばらくすると再び同じまとまりに戻る。
「気持ち悪いんだぜ！」
「なんだこれは……？」
僕はそれに飛びついてみる。しかし僕の前足は、むなしく空をかくだけだった。

まいったなこれは。
「俺っちがあんなところにお前をつれていっちまったから！」
「いや、君のせいなんかじゃない。どうにもこれは僕自身の問題のようだ」
「そうなのか？　それにしてもどうしたもんだぜ」
「うむ……ひとまず君は帰るんだ。きっとあの子が心配しているだろうから。時間がたてば何か解決するかもしれない」
そうして僕らはいったん別れた。
僕は近くの公園へと向かい、茂みの中に身を潜めた。僕の尻尾の上で渦巻いている何かは、特に悪さはしないようだった。決して気分の良い状況ではなかったが、猫の僕にはどうすることもでない状況だ。それに何だか疲れてとても眠い。少し寝ることにしよう。果報は寝て待てという、人間達の言葉もあるじゃないか。
しかし、その呑気な考えが災いしたというか、案の定というか、僕は変な夢を見ることになってしまった。

（……私をゆるさないでくれ）
そんなつぶやきで僕は夢の世界に目覚めた。いつもの湖のほとりのようだった。花も草木も見えない。あるのは水面と大地を隔てる黒い輪郭のみだ。
白日に晒された湖面は透き通った輝きを放ち、かすかに揺れて水面に影をつくっている。
その影は人の形にも見えたし、僕自身の影であるようにも見えた。
僕は思った。いきなりそんなことを言われても。いったい何をゆるさないというのか？　そう湖面に囁きながら、僕は水面をなめる。
水はとても冷たくて、そして少し苦かった。
その水は、僕の喉を伝って胃に落ちる。それは一つの意味ある情報として、全身を駆け巡っていく。僕は何か重要なことをボンヤリと悟ったような、そんな気分になる。僕はあなたの言う猫ではない。
もしそうなのだとしも、僕はもうすでに生まれ変わっていて、以前

の僕ではない。あなたは許しを請うべき相手は、もうこの世にはいない。

すると、湖面に浮かぶ影は悲しそうに笑った。何かを悔いているように見えた。僕は湖面を前足でかく。湖面に波紋ができて、どこまでも広がってゆき、やがて見えなくなった。

こんな小さな猫の手だって、こうして何かを伝えることが出来る。湖の中に溶け込んだ貴方に、どうして己の無力を嘆く必要があるだろう。そう僕が呟くと、影は一つ大きく揺れて、湖面に大きな波を起こした。影はその波に乗り、遥か彼方の水平線にまで、その影を散らしていく。その様子は、どこか誇らしげに見えた。悟ったようにも見えた。嬉しそうにも見えた。

僕は影に伝える。正解なんてきっとどこにもない。この世界を形作っているものは、僕たち一人一人の意志に他ならないのだから。あなたや僕が信じて行ったこと、それがきっと世界の全てだ。

気がつくと湖は燃えていた。水面から放たれる白い光が、灼熱の業火となって空と大地を焦がしてゆく。宙に浮かんだ僕の体も熱い粒子に取り囲まれ、炎を吹いて燃え上がる。

何もかもが真っ白で、何もかもが光に満ちて、まるで真夏の陽だまりのように暖かかった。

四、渡しそびれたチョコレート

西暦４２０８年2月１４日（日）

今日は由緒正しきバレンタインデーです。ふぐりは日が昇る頃に帰ってきました。どこで夜遊びしていたんでしょう？　今は私のベッドの上で、ぐっすりと朝寝をしています。

リビングにお父上がいないことを確認して、そっとお台所へ入ります。

「おはようございます、お母上」

「おはよう貴子」
母上はコンロで目玉焼きを作っていました。私は冷蔵庫を開けて、中に入れておいたあるものを取り出します。ハート形の型に流し込まれた薄茶色の塊。チョコレート。
「お母上、ちゃんとできていました！」
「そうねえ……」
母上の返事が今ひとつパッとしません。どうしたのでしょう？不審に思って母上の方を振り向きます。そして私は気がつきました。フライパンの中の目玉焼きが二つだけ。
「お父上の分は？」
「フジキさんはね……ちょっと急ぎのお仕事が出来たらしくてね、貴子」
「お出かけになったのですか？」
父上だって今日が何の日だかくらい知っているはずなのに。なのに今日に限って……。
「今朝一番のリニアでね。帰ってくるのはかなり遅くなるか、もしかすると泊り込みになるかもしれないって」
そう言って母上は、千切った水耕レタスとミニトマトの乗った漆のお皿に、目玉焼きをとりわけました。機械の手と生身の手を、器用に使って。
「そうですか……」
つまり、チョコは渡せない。そういうことですね、父上。私はそう思いながら、トースターに合成餅を入れて焼き、バターとお醤油を用意します。

とても静かな、朝の食卓でした。
電子ビジョンから流れ出る、ニュースキャスターの声だけがリビングに流れています。
《ギャラクシーネットステーション０８――最初のニュースです。アルバトロス星域統合監察局が本日、防衛企画局局長の栄輪儀氏の

身柄を拘束したとのことです。栄輪儀氏は、昨年のターミガン紛争の際、星系人道法に抵触する指示を行った疑いがもたれています。栄輪儀氏は監察局の一切の質問に対して「全て軍指導部の指示で行った、法的な問題があったとは思っていない」との主張を繰り返しています》

私には難しいニュースでした。こういった難しい話をいつも楽しそうに説明してくれる父上は、今日はいません。

「ねえお母上」

「なあに？　貴子」

「お父上はどうして今日に限ってお出かけになってしまったのでしょう？」

「お母上にも良く解らないのよ。今朝早くに突然電話が来たみたいでね、フジキさんとても慌てていらしたのよ。よほどのことがあったんだと思うわ」

「そうですか……」

このところ、父上が何を考えているのか良くわかりません。でもそれはきっと、私からチョコレートを貰うことより、ずっとずっと大切なことなんだと思います。

「ねえ貴子、その……昨日、お父さんと何かあったの？　お父さんなんだかすごく落ち込んでいて、お母さんなんだかビックリしちゃった」

「別になにもありませんわ、お母上」

「そう？　ならいいのだけれど」

そう言いつつも、全然納得したような顔をしていません。母上の考えていることも、最近なんだか良くわからないのです。私は試しに、少し変な質問をしてみます。

「ところでお母上。お母上はどうしてお父上と結婚したのですか？」

母上は、そんな私の唐突な質問にすこし驚いたようでした。でもすぐに微笑んで、何か改まったようにお箸と茶碗を置きました。

「気になるの？」

「はい、とても」
「そうねえ、今日は女の子にとって特別な日だものねえ」
母上はどこか遠い目になって、何か大切な思い出を呼び起こしているようでした。
「それはね、貴子。やっぱりお名前が素敵だったからなのよ」
「お名前が？」
「そうよ、お父さんの名前、漢字でどう書くか知ってる？」
「はい、喜びの時を歩むと書いて『歩時喜』です」
「そう！　フルネームで星川歩時喜。お母上はね、お見合いカタログでこの名前を見つけた瞬間に、もう恋に落ちてしまったのよ」
それだけなんですか？　私はそう聞こうとして、やっぱり心の中にしまっておくことにしました。私が生まれる前の言葉を使うとしたら、母上はそう……ミーハーなんです。
「そうだったんだ、確かにお父上のお名前はとても格好いいです」
「うんうん、それに物知りだし、優しいし。あのメガネはちょっとダサいけどね、うふふ。お母さんにこの腕を買ってくれたし、顔の火傷も治してくれた。これは貴子にも感謝しないとね」
「お母上の顔が綺麗になって、本当によかったです」
そう言って、私は精一杯の笑顔を浮かべます。
「うん、ありがとね、貴子。お父さんは今日も頑張って私達の暮らしを支えてくれているのだから、チョコを渡せないくらいですねちゃダメよ」
チョコを渡せないくらいで。そんな、泣きたくなるようなことを言わないで下さい。
「でも私、それでも……」
私がそう言おうと思ったそのとき、突然母上が悲鳴を上げました。私はびっくりして母上の顔を見て、そしてその視線の先の電子ビジョンを見ました。
《速報です！　登山タレントのキャッティー・クルーガー氏がロケ中に滑落、全身骨折の重傷を負った模様です！》

「まあ！　なんてこと！」
お箸と茶碗を置いていなかったら、きっと母上は大根のお味噌汁をこぼしてしまっていたと思います。両手で口元を覆って、青ざめた顔をしてビジョンに釘づけになってしまいました。
《クルーガー氏はヒヨドリ山脈にあるヘルズノーズにて、崖にぶら下がったままタバコを吸うというパフォーマンスをしている最中、誤って右手の鍵爪をひっこめてしまい、そのまま百二十メートル余りを落下。崖の斜面に強く全身を打ち、十数ヶ所を骨折。現在、病院にて集中治療を受けています。関係者の話によりますと、クルーガー氏は朦朧とした意識のなか『爪が勝手に、爪が勝手に』と、うわごとのように繰り返していたとのことです》
母上はとてもショックを受けたようで、いつまでもニュースを見ながら「なんてことかしら！」とか「どうなっちゃうんでしょう！」とか、しきりに呟いています。私といえば、とてもそんな気分ではなくて。クルーガーさんが重傷だというのに。
でも私一人が無反応でいるわけにもいかない。何か言わないと。でもなんだろう、この気持ち……私は今とても、ここに居たくない。
「お母上」
母上は両手を合わせてクルーガーさんの回復を祈りはじめました。
「お母上」
私はどうしたらいいんですか？　一緒にお祈りをすればいいのですか？
「お母上！」
私が少し声を強くして呼ぶと、母上はビックリしてこちらを振り向きました。
「どうしたの貴子？　そんな顔をして」
そんな顔ってどんな顔ですか？　今の私はどんな顔をしていますか？
「……なんだか気分が悪いんです」
「まあ貴子、そんなにショックを受けてしまったの？　大丈夫よ！

きっと最先端の治療がされて、クルーガーさんすぐに元気になるわよ、なりますとも！」

母上、違います。

「部屋にもどって休みなさい、ご飯は残してもいいですから」

そう言うと母上は立ち上がって、私の腕をとりました。違うんです母上、違うんです。でも、どう伝えれば。わからない、わかりません。ここにいたくない。

「大丈夫です、お母上、自分で戻れます」

「ホントに？　無理しちゃだめよ？　ちゃんと休むのよ？」

「はい、お母上」

食事を半分近く残してリビングを後にします。階段をあがって自分の部屋に戻り、扉を閉めて鍵をかけます。私はベッドの上、ふぐりの寝ている隣に顔をうずめます。

本当にもう、どうしたらいいんだろう。

五、彷徨える魂

ベンチと、ブランコと、バスケットボールのコートのある簡素な広場の片隅。うららかな日差しの中で白猫が眠っている。付近を巡察ロボットが通り過ぎようとしていたので、そのロボットのセンサーに取り付いて、一時的にその機能を無効化させた。このロボットに見つかると大抵の野良猫は駆除されてしまうからだ。そしてそのままロボットが通り過ぎるのを待つ。ロボットの大きさ成人男性の上半身くらいの大きさで、腕の付いたヘリコプターのような形をしている。複合素材で作られたプロペラを回しながら、人が歩くほどの速度で進んでいく。巡察ロボットが何事もなく過ぎ去ると、私はこの体を再び、眠る白猫の上空に霧散させた。

この体は当初、１２０万個のナノマシンで出来ていたが、日に日にその数を減らし、辛うじてこの白猫を守っては来れたものの、そ

れも限界に近づいていた。
しかし幸いなことに、昨夜猫達が研究所に忍び込んで、装置を起動してくれたお陰で、今はその数を３５００万個にまで増やし、その機能はこうして辺りの景色を正確に把握できるまでに増強された。
結局猫は、私の魂までは食わなかったのだ。
『魂』と呼んで差し支えはないと思う。なぜならば現に体の全てがナノマシンの集合体になってしまった今でも、私は私であり続けているからだ。
人間だったころの記憶は、猫化した脳組織とともに全てあの白猫のものとなった。もちろん猫である彼が、その記憶を使いこなせるはずもない。しかし形としての記憶は確かにそこに留まっており、私は彼の存在そのものを読み取ることによって、以前の私の記憶だったものを引用することが出来るのだった。つまり、彼の死と私の死は同義である。
どうしてこんな状態になってしまったのかはわからない。科学という人の作り出した産物で、恐れ多くも、神の賜物である魂を操作しようとした事に対する報いなのだろうか。
これは罰なのだろうか。それとも、私という魂に課せられた一つの使命なのだろうか。

公園に誰かやってきた。ふぐりという名の、あの三毛猫に導かれるようにして、その飼い主の少女がとぼとぼと歩いてくる。私は先ほど猫達を驚かせてしまったことの教訓から、この体を彼らに認知されない程度にまで拡散させた。少女はなにやら深い省察にふけっている。胸元にちいさな箱を抱えたまま、ぼんやりと遠い空を見つめている。寝ている白猫に気づいた少女は、その姿をそっと覗きこんだ後、ブランコに向かって歩いてゆき、そこに腰かけた。アルミの金具かこすれるキュッキュという音が鳴りはじめる。三毛猫は白猫の近くに腰を据えると、大きくアクビをして、並ぶようにして箱座りになった。程なくして白猫が目を覚ました。

「よっ、起きたな」
「おはようふぐり」
「あの変なのいなくなったな」
白猫は自分の尻尾を眺めている。
「ほんとうだ、一体なんだったんだろうね」
「何はともあれ良かったな」
白猫はホッとしたようだった。そしてブランコの揺れる音に気づいてそちらを見る。
「あの子は？……なんだか元気がないようだけど、どうしたの？」
「今朝からなんか元気ないんだよ。朝に母親と何かあったみたいなんだ」
「あの母子が？　父親は？」
「俺が帰ったときにはもう家には居なかったんだぜ」
猫達は腑に落ちない表情を浮かべている。白猫はにゃーと一声鳴くと、女の子の元に駆け寄っていった。
「あ、はくびさん、起きたの？」
少女はブランコから降りて白猫の背を撫でる。彼は心配するように少女を見つめる。
「はくびさん、さっきまでユキちゃん家に行ってたんだよ。でもね、昼から家族でお出かけなんだって。はくびさんはバレンタインデーって知ってる？」
その言葉を理解したのかどうかわからないが、白猫は相槌を打つようにニャーと鳴いた。
「わあ、知ってるの？　貴子昨日ね、お父上に酷いことしてしまったの。今日、チョコを渡すときに謝ろうと思っていたのに、お父上は仕事に行ってしまった」
白猫は不思議そうな顔をして、少し首をかしげた。
よほど大事な用事なのだろうか？　そう猫は伝えようとしたのだろうか。しかしそれは人間の少女には上手く伝わらなかったようだ。
「ごめんね、猫さんにこんなことを言っても仕方ないよね」

少女はそう言うと、再びブランコに腰掛けて、再びゆっくりとこぎ始めた。

「私も猫になれたらいいのにな……」

少女は空に向かってポツリと呟く。私はこの少女と両親に面識があった。とても利口で、とてもぎこちない家族であったことを記憶している。

私はその家族のために何かしてあげたいと思った。ここに生きた体があるかぎり、私には行動する義務がある。まずは少女の家庭にまつわる様々な事情を知らなければならない。もしかすると何か簡単な手段だけで、この家族の間の綻びを埋める合わせることが出来るかもしれない。そう考えた私は、この体をいくつかのブロックに分けて、方々に飛ばした。

六、ドロシーナ・コスモニア

朝の食卓に食器の鳴る音が響きます。窓から差し込んでくる日差しが銀の食器をキラキラと輝かせています。こんな儚い食卓の光景はついぞ見たことがありません。

「あなた、合成てんぷら油が値上がりしますわよ。さっきご近所の奥さま達に根も葉もない噂を撒き散らしましたからね」

「ああ、わかっているよフキコさん」

あの女が作り上げたご近所ネットワークは、光の速度で噂話を広める能力を持っています。噂から出た本当という言葉の通り、大体の噂は現実のものとなるようです。あの女はその力を利用してこれまでネチネチと稼いできたのです。そしていずれは温泉詐欺の責任を全て若旦那に押し付けて追い払い、世暇家の全権を掌握しようという計画なのでしょう。なんて腹黒い。でもその野望も今日で終わりなんですよ。

長い長い忍耐の時に終わりが近づいてきました。今から半日もす

れば、この星は経済混乱の淵に落ちていて、そして私はユートピア惑星の住民になっているのです。

「ドロシー！　この煎り卵、お皿が冷たいじゃないの！」

「申し訳ありません、奥さま。すぐにお取替えを……」

「もういいですわ！　卵も料理人もタダではないのですよ！　お下がりなさい！」

言われるままに食堂の隅にへと下がります。大旦那のいない食卓はあの女の独壇場のようでした。もうすぐ世暇家の全財産が手に入る、そんなことを考えているのでしょうか。さも得意げな表情で、そして「オーホホホ」という、あの特徴的な高笑いを鳴り響かせています。

「ごちそうさまです」

若旦那様が食事を半分以上残して立ち上がりました。

「あらあなた、どうなさったの？」

「今日の商談の見積がまだなんだ」

「まあ呆れた。そのようなもの昨日のうちに済ましておきなさいな」

「ああ、すまないねフキコさん」

「謝っている暇があったらさっさと仕事をはじめなさい！　今やあなたがこの家の主なんですからね。わかっているんですか？」

若旦那は何も言わず、食卓の人達に一礼すると、そそくさと食堂を出て行きました。かのボウヤはそれを見送ると、私の方をチラと見て、不敵な笑みを浮かべてきました。私もそれに合わせて、他の人に気づかれないよう微笑を浮かべます。この意味をあのボウヤはどう捉えているのでしょうね。下らない茶番も、もうすぐ終わり。そう思うと、このメイド衣装も少々名残惜しい気がしてきました。あのボウヤ、服を選ぶセンスだけはまともでした。

必ずやコスモニア家を復興させ、再びバラの咲く花園で茶会を開こう。そう誓い合って散り散りになった愛しの私の家族達。お姉様方、お父様、花の季節まであと少しですわ。

「奥さま！　奥さまー！」

下男の一人が息を切らして駆け込んできました。
「なんですか！　騒々しい！」
「屋敷の門の前に！　屋敷の門の前にー！」
「門の前になんですか！」
「す、す、すごい数の記者たちが押し寄せてきています！」
「なんですって！」
そう言って彼女はは立ちあがり、窓辺までズカズカと歩いていくと、そっと外を窺い、そして青ざめた表情を浮かべます。
「彼らは何と言っているの？！」
「お、温泉は偽物との情報を得たと……」
「なんてこと！　一体どこのネズミが……まあいいですわ、いずれはバレることでしたもの。おまえ、今すぐ屋敷中の使用人を集めて庭に会見場を作りなさい。直々に説明します！」
「は！　はいぃ！」
下男が慌てて飛び出していくと、食堂は深刻な空気に包まれました。事情を知らない長男と次男はポカーンとした表情のまま固まっていて、あのボウヤだけがしたり顔です。叔父と叔母にいたっては顔面蒼白です。奥さまにまっ先に疑われたしく、恐ろしい眼差しで睨まれ、そして小刻みに顔を横に振って、必死に否定しています。
「息子達や、自室に戻って情報収集なさい。どこぞの投資家が私達の屋敷にスパイを潜入させているわ。どこのどいつか突き止めて、身包み剥いでケツの毛までむしってやるのよ！」
三人の息子は何も言わずに席を立ちます。
「ドロシー！　記者達をおもてなしします。そうね、頭がボーっとなるくらい甘いものがいいわ。そうシェフに伝えなさい。そして必要な材料を直ぐに買ってくるのよ。いいわね！」
「はい、ただちに……」
私も食堂を後にします。お台所に向かい、うたた寝をしていたシェフを起こして用件を伝えます。シェフが必要な材料を書き出している間中、食堂の方から奥さまが声を荒げる音が聞こえていました。

材料が書かれたメモを受け取って、買い物かごをもって勝手口から外に出ます。こちらにも何人かの記者が群がっていて。私を見つけるや否や、マイクとカメラを突きつけてきました。

「ひ、ひいぃ！　私はただのメイドです！」

悲鳴を上げながら後ずさり、目に涙を浮かべながら、哀願するようにして記者達を睨みます。バツの悪そうな表情を浮かべた記者達がそそくさと道を開けました。私はそのむさ苦しい人だかりを小走りで通り抜けると、二つ角を曲がった先で立ち止まります。そして誰も居ないのを確認してから、買い物カゴの隠し底を開けて、その中身を懐に移し変えます。

「……うふふ」

自然と笑みがこぼれます。あとは駅のロッカーにしまっておいた荷物を持って、宇宙港に向かうだけ。ああ、なんていい気分なのかしら。自由！　やっと手に入れた自由！

眩しい午前の日差しの中、遠い空の向こうに浮かぶユートピアを目指して走り出す。まるで足に羽でも生えてたかのように、軽やかに。

第?部　―2―

七、星の崩れるとき

朝一番の特急に乗り、二ヶ月ぶりに出社する。大抵の仕事はネット上のやり取りで済ませることができる世の中ではあるのだが、口頭による議論を頻繁に交わさなければならないような緊急時にはやはりこうして出社する必要がある。

まだ殆どの社員が出社しておらず、デスクルームは閑散としていた。デスクの上には紙切れはおろか、ホコリの一つものってない。電子ビジョンがいたる所に展開されていて、星系中のニュースが鳴り響いていた。その中に、頭を抱えてモニターに見入っている室長の姿があった。

「おはようございます」

「おおフジキ君か、久しぶりだね」

室長が見ていたのは株式市場の動きを表すチャートだった。どうやら世暇ＨＤの株価が大変なことになっているようだ。

「これは酷い……もう半値近くまで落ちています」

「星系中のＳＲＩファンドが懲罰的な資金引き上げを行っている、これは大事になるぞ、フジキ君。確か君の家は、世暇家の邸宅に近かったね？」

「はい、歩いて数分です。先日、家族と一緒に温泉に浸かりにいったばかりなのです」

「なにか、気になったことはないのかね？」

「いいえまったく。黄硫の匂いもいたしましたし、本当の温泉だと信じて疑いませんでした」

私はひとまず空いているデスクに腰を下ろし、電子ノートを開く。ディスカッションが始まるまでに、できる限りの情報を調べておかなければ。まだ市場が明けてから３０分も経っていないのに、もう

数千件の株式分析が星系中のメディアからアップされている。私達のように、ネットと口頭の議論を中心にして仕事を進める会社ではまず不可能なことだ。彼らは電脳リンケージを使用して脳と脳を直接繋いで議論をするのだ。今日のような騒動があると、必ず何人かの記者が精神破綻を起こす。ＷＥＢ上に山ほど溜まった情報を前に私はやれやれと首を振った。彼らが何を考えて生きているのか、私にはさっぱり理解できない。仕事というものは、人々がより快適に生きていくために行うもであって、その仕事のために精神をおかしくしてしまうというのは、まったくもって本末転倒なことなのに。私は世暇家に関する数多くの記事の中から、一番古いものを選んで開いた。レイメイ新聞社の記事だった。公開時刻は本日午前２時…どうやらここが震源らしい。その後、各社こぞってこの話題を持ち上げている。

世暇ＨＤ株の最近の動向を調べてみる。昨年のターミガン戦争と、合成餅への投資の失敗から、世暇ＨＤ株はずっと低迷を続けていた。しかし、先日のあの温泉騒ぎ以来、一転して高騰の一路を辿っている。昨日など、市場が終わる寸前に３割以上も値が吊りあがっている。

この現象を分析した記事の一つによれば、何者かが温泉詐欺の内部告発のタイミングを完璧に把握していた可能性があるのだという。もし昨日のうちに売り抜けている者がいれば、その人はどれだけの利益を上げたかわからない。しかし一体だれが世暇家の不正を告発したのだろう。そう思い、洗いざらい記事を漁ってみるものの、その者の名は見つけられなかった。

そうこうしているうちに社員が集まり始める。デスクルームのあちこちで議論が交わされ、社内は活気を帯びてくる。

時刻１０時、電子ビジョンの全チャンネルの映像がいっせいに切り替わった。全員が注目するなか映し出された映像は、見慣れたあの世暇家の正門前の光景だった。景気良く吹き出す温泉の前に記者会見場が作られ、詰め寄せた記者達に、どういうわけかお汁粉が配ら

れている。

《……えー、世暇邸の中庭に設けられた会見場よりお伝えしております。あたりにはお汁粉の甘ったるい匂いが立ちこめております。先日、世暇ＨＤの代表取締役に就任したばかりの世暇誠氏の会見が間もなく始まる模様です》

会見の予定時刻はもう過ぎているはずだが、代表はまだでてこない。記者達はざわめきつつも、渡されたお汁粉を大人しくすすりながら待っている。何か問題がおきているようだ。ただボーっと電子ビジョンを眺めていても仕方がない。今のうちにもうひと調べしておく。

世暇ＨＤ以外のホトトギス主要株の動向を確認する。相場は不穏な空気に包まれているようだ。世暇ＨＤ株に歩調をあわせるようにして下落する銘柄もあれば、それに反して上昇を続ける銘柄もある。先物価格の変動が激しくなってきているせいか、コンピューターを使った裁定取引が活性化してきているようだ。複数のトレードシステムが共鳴を起こした際におこる価格の微振動が、いたるところに見受けられる。

《ただいま世暇夫稀子取締役が会見場に姿を現しました！》

慌てて電子ビジョンを見る。表情を強張らせた夫稀子婦人が、夥しいフラッシュがたかれる中、歩み出てきた。記者会見場は騒然とした空気に包まれる。

《みなさん、落ち着いて下さいませ！　どうやらわたくしめ、大変なお知らせをみなさま方にしなければいけないようです》

「うおお！」という喚声の後、再び激しくフラッシュがたかれる。

《世暇ＨＤの代表取締役である世暇誠は失踪いたしました》

失踪？　デスクルームにどよめきが走る。

《私どもの温泉が偽物であるとう情報は、まったくもって寝耳に水でしたわ！　もうすぐ査察が入りますので、真偽はまもなく明らかになるでしょう》

《今後の経営についてはどうなりますでしょう？　温泉は？　株価

が大暴落していますが！》

《温泉については何ともいえませんけど、できれば続けたいと思っておりますわ！　経営については厳しいことになるでしょうけど、必ずや私どもの力で復興せしめますわ！　ホトトギスのある限り世暇は不滅です！　私からは以上です、お汁粉はまだまだたくさんありますから、たくさん召し上がっていってくださいね！　オーホホホ！》

放送を見終わった我々はみな一様にポカーンと口をあけていた。なんと豪胆な方なのだろう。詐欺の嫌疑をかけられ、夫に逃げられ、株価に至っては破滅的であるというのに。必ず復興させると言い切った上に、お汁粉まで大盤振る舞いするとは。

午前のディスカッションで私達のグループは、世暇ＨＤ株は暴落したものの、それに対する世暇家の対応がはっきりしたことにより、今後少しずつ値を戻し、暴落に起因する株式市場の混乱も今週中には収まるだろうという、希望観測的な予測をたてた。

午前の会議を終えた私達が一息ついていると、昼食を買いに行っていた社員の一人が、血相を変えてデスクルームに飛び込んできた。

「大変です！　今朝１ｋｇ１００ウェンだった合成餅が２５０ウェンに跳ね上がってます！」

どういうことか？　考えられるのは合成餅への大規模な投機が行われているということだ。誰かが買い浴びせて波を起こし、今日の暴落相場を嫌った資金がそれに乗っかってくる、そういったシナリオか？　私達は慌ててホトトギス中の物価変動を調べる。合成餅の価格上昇率が異常な数値を示していた。こうして調べている間にも、みるみる値が上がっていく。合成餅の値段が高騰すれば、当然消費者はその代替物であるパンやうどんの購入に走る。結果、合成餅の需要は下がり、値段も下がる。そして貧乏クジを引かされたどこかの投機ギャンブラーが破滅的な損をする。こういった消費者の意志が市場価格のスタビライザーとして働くことを想定して、現在ホトトギスでは物価変動がすぐさま店頭価格に反映されるような仕組に

なっているわけだが……。

「うどんの値段も上がっている……米も、パンも、そばも」

社員の一人が悲観的な声色で呟く。会議室は再び重い沈黙に包まれた。物価が度を越えて高騰し続けるのは大変危険な事態だ。この状態が続けば最悪、ウェンの信用が崩壊してしまう。通貨暴落、ハイパーインフレ、そんな古典的な経済クラッシュは中央コンピューターが暴走でもしないかぎり起こらないと思っていたが……。何だろうこの胸騒ぎは？　何故だか本当にそうなりそうな予感がしてならない。

「ちょっと外をみてきます！」

そういって私はデスクルームを飛び出した。

私が最寄のコンビニに立ち寄ったときには、すでに合成餅は１キロ１０００ウェン台になっていた。それと連動して他の食品の値もジリジリと上がっている。これまでに前例のない異常事態に、客も店員も目を白黒させている。預金封鎖を恐れた人々が預金の引き出しに走ったようだ。ＡＴＭの前に行列ができている。銀行の方に向かって足早に駆けていく人もいる。今のうちに生活必需品を買っておくべきか、それとも事態が収集するのを待つべきか。市中の人々は戸惑っているようだ。商品に貼られた電子値札を眺めながら、携帯電話で家族と相談している人たちの姿が目立った。しかし一体どんな猛烈な買いオペレーションを行えばこんなことになるのか？　そもそも、ホトトギスの合成餅の殆どは世暇家の過剰投資によって買い込まれていたのではなかったのか……はっ。

ありえないことではない。あの世暇誠氏が失踪しているのだから。もし、世暇家の内部告発を行った人間が誠氏本人だったとしたら？

そして彼が、どこぞの資本と口裏合わせをおこなっていたとしたら？　内部告発はホトトギスの経済を不安定にさせて、パニック相場を作り出すためのいわば火種。そして合成餅の売りと買い戻しを意図的に繰り返し、価格を異常なまでに急騰させようとしているのではないか？　いやしかし、それだけでは合成餅以外の食品まで高

騰していることの説明がつかない、同調者がいるのか？　ともかくもっと情報が必要だ。

そう思って私が社内に戻ろうとしたとき、とうとうホトトギス中の全物価の上昇が始まった。いや、ウェンの価値が下がりだしたのだ。インフレーションの始まりだ。一人の主婦が決死の形相で冷麦の束と果物ジュースの箱をレジに持ち込んだ。それが起爆剤となったのか、店内で悩んでいた客が一斉に品物の物色を始めた。割安なものから順番に陳列棚から消えていく。インフレ率がいかほどになるか、今はまったくもって未知数だが、ともかく無事ではすまないだろう。我が家には幸い、世暇の奥様がバラ巻いた合成餅の備蓄がだいぶある。いざとなれば、高騰した合成餅を売って、他の生活必需品に変えることもできるのだが。

いくつかの店でシャッターが下ろされ始めた。それと同時にコンビニＡＴＭも使用不能になったらしい。あちらこちらから怒鳴り声が聞こえてきた。

私は会社に戻ると、可能な限り情報を集めることに奔走した。しかし結局のところ、右手に持っていた紙を左手に持ち変える作業をしただけのようだった。私は何も変えられない。私の思考はまるで無力だ。この星のどこかで、この星の経済をむちゃくちゃに引っ掻き回している連中に対して、私はビンタ一つ張ってやれないのだ。

とうとう治安維持ロボットが緊急出動を始めた。どこぞの銀行で取り付け騒ぎが起きたらしい。幾つかの電子ビジョンに、現場の物々しい光景が映し出される。

そういえば清美さんに連絡をいれると言っておいて、すっかりわすれていた。慌てて携帯で電話をかける。しかし、電話はひどい混信を起こしているようで、まるで繋がらない。

社員もみな、家族のことが心配で仕方ないらしい。逃げるようにして帰宅する者の姿が目立った。私は夕方まで粘ってみたが、状況はまったくもって改善されない。むしろ悪化する一方だった。とうとういても立ってもいられなくなって、私は明るいうちに会社を飛び

出した。貴子、清美さん、私はこれから一体何をすれば良い？

八、お届け物はどちらへ

お昼過ぎ、あの子が突然家を出た。

チョコレートの入った四角い箱と、あの母親が昼食のためにと作っておいたのであろう、サンドイッチをリュックに詰め込んで。僕とふぐりは、何となく外が騒がしくなってきているのに気づいていたから、なんども女の子の足元でニャーニャー鳴いて止めようとした。しかし彼女の決意はとても硬く、僕らを玄関の中に押し込めて、そのまま走っていってしまった。

僕とふぐりはしばらく相談した後、やはり心配で仕方が無いので、こっそり後をつけることにした。女の子はどうやら駅の方に向っているらしい。まもなくして大通りにでた。

「どうしてしまったんだろう？　あの箱をどこかに届けようとしているみたいだけど」

「ああいう頑固なところはオヤジさんそっくりだぜ。なにもこんな日に出かけなくてもな！」

ふぐりの言うとおり、辺りには不穏な空気が漂っていた。通りを往来する大型車が、何かに急かされるようにして、クラクションを鳴り響かせながら走りすぎていく。道沿いの建物の、「回転寿し」とかかれた看板の下にある数字の表示が、めまぐるしく変動している。電気屋の店先に置かれている電子ビジョンの前に人だかりが出来ている。

駅前にある大きなキラキラした建物から、スーツを着た男の人が一人でてきて、しばらくフラフラしていたと思ったら突然道端に崩れ落ちてしまった。僕らは思わず目を丸くする。その人の顔にはまったく精気がなく、まるで食べられる寸前のネズミみたいだった。

「彼はどうしてしまったんだろう。それに、彼を見て見ぬ振りしか

しない、この街の人々も」
「まったくもって気味が悪いんだぜ」
僕らがそうやって考え込んでいる間にも、あの女の子はどんどん先へと進んで行ってしまう。
「いこうふぐり。あの子を見失ってしまう」
駅に近づくほど、人の密集度が高くなっていく。その中を猫の僕らが通り抜けるのは、いささか勇気が必要だ。女の子は、駅の入り口の前まで行くと、そこでいったん立ち止まり、リュックの中からカードを取り出した。
「あそこを過ぎたらもう二度と貴子ちゃんに会えなくなる気がするんだぜ！」
「うむ……流石にあの中にまでは、僕たちは入れないだろうからね」
「貴子ちゃん！　いっちゃだめなんだぜ！」
そう言うとふぐりは、ブニャーブニャーと間の抜けた鳴き声を辺りに撒き散らしながら、女の子の元に駆け寄っていった。通行人が突然の猫にビックリして立ち往生。僕も後に続く。
「ふぐり！　なんで来ちゃったの？！」
女の子は慌ててふぐりを抱きかかえる。
「はくびさんまで！」
僕は女の子の足元に体をこすり付けるようにして歩き回りながらニャーニャー鳴く。
行っちゃだめだ。とても嫌な予感がする。行くのならせめて僕たちも連れて行くんだ。
「どうしよう……」
女の子はしばらく悩んでいたが、しばらくして近くにいた駅の人に何かを聞き始めた。
「すみません、猫さんを電車に乗せても大丈夫でしょうか？」
駅の人は少し驚いた表情をして、僕らの方をチラリと見る。そして「何かカゴのようなものに入れて暴れさせなければ大丈夫ですよ」と、女の子に言った。

「カゴかあ……」
女の子は途方に暮れている様子。ふぐりはといえば、女の子の腕の中でご満悦だ。
その時、急に僕の目の前がチカチカとした。慌てて前足で目をこする。何かが目の前でバタバタしている。僕はその物体に目を凝らす。それはなにやら、白く光る蝶のように見えた。蝶は僕の目を離れると、どこへともなくヒラヒラと飛んでいく。
「なんだろう?」
僕はニャーと一声あげて追いかけた。ふぐりを抱えた女の子も僕について来る。光る蝶は駅前の雑貨屋に止まると、もとから何も無かったかのように消えてしまった。
はて、一体なんだったのだろう?
「あ、これ……」
女の子が何か見つけたらしい。柔らかそうな白い生地で作られた肩下げ袋。白地に緑色の大きな文字で《ＥＣＯ》と書かれている。僕たち二匹の体がすっぽりと入りそうな大きさだった。
「はくびさん凄いね！　良く見つけたね！」
なんだかよくわからないが褒められた。女の子はさっそくその袋を手にとる。
「あれ？　エコバックってこんなに高かったっけ……」
女の子は首を傾げつつも、それを店の人に見せて、丸いキラキラした物と交換した。そして袋を地面に置いて、その中にふぐりを押し込める。
「なんだぜ?!」
ふぐりはしたたか嫌がった。もがいて外に出ようとする彼の体を、女の子は押さえ込む。
「お願いだから大人しくして！」
僕はふぐりに言う。
「ここは黙って中に収まった方が良さそうだ」
「そうなんか?」

そして前足と頭を袋に突っ込む。
「居心地も悪くなさそうじゃないか」
「そう言われればまあそうだな、悪くねえかもな」
僕らが大人しく袋に詰まると、女の子は心底ホッとしたようだった。
「じゃあ行こうかふぐり、はくびさん」
駅の入り口を抜けると、ゴオオォという風を切る音とともに四角い乗り物がやってきた。まるで昆虫の殻みたいにツヤツヤしている。プシューという音がして扉が開いて、中から人が出てきた。僕は袋から顔を出してその様子を眺める。世の中には色々な乗り物があるものだ。
女の子がその乗り物の中に入ると、しばらくして扉が閉まり、そしてガタゴトと振動しながら乗り物が動き出した。女の子は長い椅子の空いている場所に座って、僕らの入った袋を膝の上に置いた。乗り物はどんどん加速してゆき、やがて窓の外の景色が目で追えない程になった。
「なんかこう、いい揺れなんだな……」
そう言いながらフグリはウトウトし始めた。さっきまでニャーニャー言っていたのにこの変わり身の早さはなんなのだろう。図太いというか、鈍感というか。
「なあ、君って本当に」
「なんだぜぇ？」
「……なんでもない」
一人と二匹と、その他大勢を乗せた大きな乗り物が、どこへともなく走っていく。

九、世暇家の落日

「うふふふ……おほほほ……オーホホホ！」

母が壊れた。屋敷のロビーに続く階段の上で、兄達の示したデータを目にするや否や、母は両手で頭を抱えて狂ったように笑い始めた。父そっくりな顔をした兄達が慌てて母に駆け寄る。

「ママ！　頑張ってスパイの元締めを探したけど、なんか一箇所だけじゃないみたいなんだ！」

「この星をメチャクチャにしようとしている人が沢山いるみたいなんだよ、ママ！　パパはどこに行っちゃったの？　この星はどうなっちゃうの？」

母は足元にすがりつく二人の大きな子供に、それぞれ平手打ちをくれてやる。

「そんな情けない顔してるんじゃないよ！　あの男はもう二度と帰ってきやしない、帰ってきても屋敷の敷居をまたがせるもんかい！　おい、お前たち！　お前たちー！」

母が手を鳴らすと、屋敷中の使用人が集まってきた。執事、女中、下男、庭師、運転士、料理長、パテシエ……総勢４００名余り。カバディバスケのコート並みの広さがあるロビーにすら収まりきらず、玄関の外にまで人がはみ出している。

「あの裏切り者を捜して来なさい！　どんな手段を使ってでも見つけだすのですよ！」

母は鬼のような剣幕で指示を出すものの、みなの反応は薄い。ロビーはザワザワという囁き声に満ちている。兄達にいたっては「あの裏切り者」が誰なのかさえわかっていない。

まあ、この家の問題を全て擦り付けられて放り出されるんだから、誰だって逃げ出したくなるだろうさ。ねえ、父さん。

「何をしているのです。あの男に全ての責任を取らせる以外に、世暇家の再興はないのですよ！　一番に見つけた者には半年分の給料を褒美として与えます！　早くいきなさい！」

今こそこの家の実権を握る時だ。僕はそう確信する。そして母の前に歩みでる。この場にいる者たちは皆こう思っているはずだ。大旦那も若旦那も居ない今、あの女は仕えるに足る人物なのかと。僕

は母の立つ階段に向かって一歩踏み出す。
「母上、少しお時間を頂いて良いでしょうか？」
「あらやだこの子ったら。いったい何をしようというのかしら……」
「今日からこの屋敷は僕の物になるということをお伝えしたく思いまして」
ロビーにざわめきが走る。良いぞ、この反応を待っていたんだ。
母も目を丸くしている。
「みんなが思っている通り、この屋敷の庭に湧いた温泉は偽物だった。そして全ては父の陰謀だ。温泉を掘った祖父は、今は病床にあり、全ての元凶たる父に至っては行方不明。世暇家の明日には、もはや一欠けらの望みもない！」
僕がそう言うと、ロビーは静まり返った。
「だがしかし、僕は祖父よりある形でその財産の一部を譲り受けている。新しい事業を作り出し、この屋敷を建て直すに足る資金が、今僕の手の内にはある！　僕は今ここに、新しい事業体の設立を宣言する！　この新しい枠組みへの参加を希望するものは、この場に残れ！」
ロビーは再びどよめきに包まれる。数人の下男が逃げるようにして外に飛び出して行ったが、多くの者は不安げな表情を浮かべつつも、その場に留まった。
「紀夫や、夢のようなことを語るのは良いとして、その遺産とやらは本当にあるのかい？」
「ええもちろんですとも。部屋の金庫に閉まってあります」
僕がそう言うと、母はさらに眉間のしわを険しくする。そしてロビーを見渡し始めた。
「紀夫や。お前が気に入っていたあのメイドは、ここには居ないようだけれども」
そう言われて僕は辺りを見渡す。確かにドロシーがいない。買い物にでも行っているのか？
「母上はドロシーがスパイか何かだとでも言うのですか？」

母は口元を引きつらせ、まるでブラックホールのような目でこちらを見てきた。どうしたんですか母上？　そんな顔をしてこっちを見ないで下さい。不安になるじゃないですか。

「……バカな子……本当にバカな子だよお前は！　あの女意外に誰がいるってんだい！」

急激にこみ上げる寒気。背筋がゾッと凍りつく。

僕は一目散に自分の部屋に走っていく。

荒々しく扉を開け、胸に下げておいた鍵を取り出して金庫に挿す。ダイヤルを合わせ、指紋認証を押し、取っ手を回す。そして祈るような気持ちで金庫を開く。そこにはお爺様の財産である、惑星債の証書があるはずなのだ。無いはずが無い、無くなっていてたまるものか！

「……ない」

そこには何も入っていなかった。

全身の血液が足の裏から抜け落ちていくようだった。目の焦点が合わない。僕の内部にあるもの何もかもが、その空っぽの金庫の中の闇に吸い込まれていく。

僕は獣のような声で、腹の底から叫び声を上げた。

それが自分の声なのかと、本気で疑うような咆哮が、僕の喉の奥から溢れ出た。

「ドロシー！」

僕は君を許さない！　その偽りに満ちた心臓をこの手で握りつぶす、その時まで！

十、動かない電車

父上の会社のあるタイペイコシガヤ市。その三つ前の駅で電車が止まってしまいました。どうしたんでしょう？

《お客さまにご連絡します。ただいまミナミタイペイコシガヤ駅に

て人身事故が発生しました。本線は現在運転を見合わせております。お客様方には大変ご迷惑をおかけしております》

人身事故？　ニュースとかで聞きますが、それって具体的にどんな事故なんでしょう？

人の身の事故。電車と人間が事故を起こしたらいったいどうなってしまうのか。そんなことを考えていると、とたんに私の胸に、言いようのない不安がこみ上げてきました。

「電車がとまっちゃったよふぐり……はくびさん」

袋の中の猫さん達も目を覚まして、耳をピンと立てて緊張した様子です。どうしましょう？　電車を降りてバスに乗り換えた方がいいのかな。でもこの辺りの路線は全然わからない。

「もう少し待ってみた方がいいかな？」

私がそう訪ねると、はくびさんはニャーと言いました。うん、そうしましょう。電車が動くまで、もう少し待ってみよう。

窓の外を見ると、電車が止まってしまったことに戸惑っている人達が沢山いました。慌てて改札口の方に戻っていったり、電話で連絡を取ったりしています。電車の中に居る人達も、だんだんと外に出て行って、電車の中は人が少なくなっていきます。

リュックの中から携帯電話を取り出してユキちゃんにメールを打ちます。

《ユキちゃん。いまお父さんの会社に行く途中なんだよ。でも電車とまっちゃった》

送信します……あれ？　うまく送れない。エラーが出てしまいました。もう一回やってみます……うん、これでよし。

窓の外をぼんやりと眺めます。駅のホームの向こうの道路を、見たことの無い車が何台か走っていきました。二階建てのバスと同じくらいの大きさで、黒っぽい色に塗られたゴツゴツとした車でした。

「ティッシュ買うのに何でこんなにぼったくられなきゃいけねえんだよ！」

突然の大声に、ビックリして振り向いてみれば、キオスクの中で

怖そうな男の人が二人、店員さんに向かって怒鳴り声を上げています。店員さんはとても困った顔をして、何かを必死に説明しているようでした。

「コウトウだってよ！　コウトウ！　まったくいい商売してやがるぜ！」

その人達は何も買わずに怒ってどこかにいってしまいました。コウトウ？　高騰のことでしょうか。たまにお父上が話していました。物の値段が急に高くなることを高騰というそうです。そういえばこのエコバックも高かったのです。ただで配られることもあるのに、今日は４０ウェンもしました。４０ウェンといえば、この間買ったカニさんウィンナー用ウィンナー１パックと同じ値段です。

向かいの席に座っていたスーツを着た男の人達が、電子ノートを見ながら何かを話し合っています。とても難しい単語ばかりの会話をしているので、私にはさっぱり理解できませんが、なんだかとても深刻そうです。その人達はしばらく話し合うと、早足で電車を降りてどこかにいってしまいました。

怖い。

今初めてそう思いました。街中が何かおかしなことになっている。なんでこんな日に限って、一人で出かけてしまったんだろう。そう思うと、胸の奥が締め付けられるように恐ろしくなりました。猫さん達の入った袋を抱きしめて、心の中で祈ります。電車さん、早く動いて。早く父上の所に行きたい。

ユキちゃんから返信が来ました。

《電車止まっちゃったの？！　てか、出かけてるのか？！　オヤジがなんか世の中が変になったって言ってるよ。今どこの駅にいるの？　早く帰った方がいいよ、まじヤバイみたい》

やっぱり何かが起こっているみたいです。慌てて返事を打ちます。

《やっぱりそうなの？　周りの人も様子がおかしいの。電車はまだ動かないけど、お父上の会社がもうすぐそこだから》

送信します……やっぱり調子が悪いみたい。ユキちゃんからの返

信も遅かったし。何度も何度も送りなおします。
とどいたのかな？　どうしちゃったんだろう……。
　メールを諦めて電話をかけます……通じません。父上にかけてみます……通じません。母上にもかけてみます……通じません。
《お客様にご連絡いたします。復旧の見通しが立ちました。間もなくの発車となります》
　よかった、もうすぐ電車が動く。
父上にはきっと怒られる。でも勝手に家を出て来てしまった私が悪い。ごめんなさいって謝ろう。チョコレートは渡せなくても仕方ない。そしてこの間のことを謝ろう。そしてちゃんと話そう。私が父上のことをどう思っているかを。
　一生懸命働いて家族を支えてくれてありがとう。いつも宿題を見てくれてありがとう。お母上の顔を治してくれてありがとう。父上には感謝してしきれません。でも一つだけお願いがあります。私のことをもう子ども扱いしないでください。こうして一人で電車にのって、父上の会社まで来ることもできました。チョコレートも自分ひとりで作ることができました。だからこれからはもっと、色んなことを隠さないで話して下さい。色々なことを教えて下さい。お願いします。貴子、頑張って良い大人になりますから。

十一、勝ち残った者

惑星間シャトルの発射場へと向う駅のホーム。空へとあがる旅人達の影はまばら。西の空へと暮れ始めた夕日に照らされて、発射場に向う二条のレールが金色に輝いています。
「やっとここまで辿りつきましたわね、誠さま」
私は男の腕を胸に抱き寄せ、そしてホトトギス居住区の郊外に広がる草原を見渡します。遠くにシャトル発射場の管制塔がキラキラと光る。

「ああ、ドロシー。君のお陰でここまで来ることができた」
男はとても聴き取りにくい声でボソボソと言ってきました。見上げてみたその顔は、まるで遠い昔の地球にあったといわれる大石顔のよう。随分と幸少ない生涯を送ってきたのでしょう。笑顔を失った顔の肉は古代遺跡のように固まってしまっています。この男を落とすのは実に簡単なことでした。私の哀れな境涯をただ晒すだけで良かったのですから。
「私は何もしておりませんわ。全ては誠さまのお力あってのことです」
「君が紀夫の告発を教えてくれなかったら、我々は今ここにはいない。本当に感謝している」
「身に余るお言葉……」
私はこの醜男の腕にもたれながら、今後の身の振り方について思いを巡らせます。出来るだけ早いうちにユートピア衛星を出て、約束の庭園に舞い戻りたいところですが、きっとほとぼりが冷めるまでひと月はかかってしまうでしょう。それまでこの男と付き合い続けるのは、実に億劫なことです。
横目で駅のホームを見渡します。豪華なコートに身を包んだ老夫婦が夕日を見つめていました。五指に宝石類をちりばめた婦人が、その手で小さな男の子の手を握って立っていました。
突然の経済混乱に悲鳴をあげるホトトギス。その状況にあって、こうしてここに居るということは、皆さん上手くやられた人たちですね。入場ゲートから若い殿方が一人、スーツケースを牽いてやって来ました。品の良い白のスーツを着て、サラリとした髪の毛を爽やかに靡かせています。私は男にすがりついたまま、彼に向かってこっそりと微笑を投げかけます。目ざとくそれに気づいたその方は、理知的な表情に意味深な笑みを浮かべて返してきました。
明日からはきっとご近所さんです。
「おや、誰かさんがノコノコとついて来てしまったようだ」
やっかいなことに、あのボウヤが追いついてきました。ゲートの向

こうに酷く憔悴した表情を浮かべた男が一人ウロウロしています。どれだけ必死になってやってきたのでしょう。スーツはよれよれに着崩れて、前髪が汗でおでこに引っ付いています。彼はこちらに気づくと、鬼のような形相を浮かべてこちらに向ってきました。

「どういうことなんだドロシー！」

ボウヤの怒鳴り声に気づいた人達は、その場の空気を読んだのか、不敵な笑みを浮かべながらその場を去っていきます。

「気安く呼び捨てにしないでくださいませ！」

ボウヤから奪ったあのご老人のへそくりを懐に隠して、私は彼に怒鳴りつけます。

「私はかくも名高きコスモニア家の第六令嬢、ドロシーナ・コスモニアですわ！」

「僕を！　僕をずっと騙し続けていたのか！」

「騙す？　あなたの欲しがったものは大体くれてやったじゃないですか！」

「お爺さまの遺産を返すんだ！」

「何のことか私さっぱりですわ！　その汗まみれの顔を近づけないでくださいませ！」

「こんなことをしてただで済むと思うな！　絶対にお前らを惑星警察に突き出してやる！」

そういって彼は私を押しのけ、そして父親らしき人の胸倉をつかみます。

「あんたって人は！　この星が今どんなことになっているのか、わかっているのか！」

「ああ、わかっているとも。みんな自分たちの欲望のツケを支払っているんだ」

「奢ったことを！　言え！　言うんだ父さん！　あんた達は一体何をした！」

「さて、私にはわかりかねるな。私はただ言われるままにボイラーを炊いただけだ。そして何か理不尽な責任を全部押し付けられそう

だったから、こうして女中の一人と一緒に逃げ出した。それだけだ」
ボウヤは悔しさと怒りに、歯をギリギリと鳴らして父親を睨みつけています。
「世の中にはな、紀夫。私達が想像も出来ないような大きな資金を、鼻息一つで吹き飛ばしてしまうような人間がいるんだよ。私達はみな、その者達のきまぐれに乗っかって暮らしているに過ぎない。世の中には実に恐ろしい、神のごとき権力をもった人々がいるのだよ……。そのような者達の考えていることなど、私にはとうていわかりかねるな」
「紀夫さま、お分かりになりましたか？　さっさとその手をお放しください！　私達はこれからユートピア衛星でつつがなく暮らすのです！　もう地上のゴタゴタはこりごりですわ！」
「黙れドロシー！　僕は地獄の果てまでだってお前を追い回してやる！　地べたに這い蹲らせて、死ぬまで僕の靴を舐めさせてやる！　まずはその懐の中にあるものを出すんだ！」
そしてあろうことかボウヤは、髪の毛を掴んできました！
「なにをするのです！　放して！　誠さま！　助けて！」
若旦那さまはポケットからスタンガンを取り出して起動させました。使用記録が送信される電子音が鳴り響きます。
「はっ」
ボウヤがそれに気づくと同時に、スタンガンが押し付けられる。
「うあああ！」
悲鳴を上げ、その場に倒れこむボウヤ。すぐさま人型の警備ロボットがやってきて、ボウヤの身柄を拘束します。自業自得、先に手を出した方が負けなんです。
「ちくしょう！　ちくしょうー！」
目に涙を浮かべて悔しがり、どこかに運び去られていくボウヤ。
それにしても全然父親に似ていませんね。
「他人の種を借りて作った子とはいえ」
その一言が、この父子の関係を何よりも物語っているようでした。

なんて哀れな一族なんでしょう。ともあれ、厄介者は居なくなりましたね。電車が来るまであと少しです。
「さて、ドロシー」
「はい、誠さま」
「君とも今日でお別れだ」
どういうこと!?
「君のお陰で、あの屋敷でも暮らしもそう悪いものではなかった、本当に感謝しているよ」
「な、何を言っておられるのですか?」
「君が紀夫と通じていたことはわかっている。そして君のお父上が存命で、お仲間と結託してホトトギスをこんなにしてしまったことも」
そう言って男は私の胸倉を掴んで引き寄せ、もう片方の手で私の首を鷲づかみに……。
「なっ!?」
首筋に何かが注入された! 私は首を手で押さえて後ずさる。
「な……何をしたの!」
「命に問題のあるものではない。ただ少しだけ記憶を失うがね」
「……き、きさま!」
「君には色々なことを忘れてもらわなければならない。あの屋敷で見聞きしたこと、この星で起きたこと、そして、お父上との約束のこと」
この男が何でお父様と私達の約束を知っている! く、頭がクラクラしてきた……。
「君はまだ気づかないのかね?」
「何に気づいてないというの! こんなことをして、お父様がただではおきませんわ!」
「君は本当にあのコスモニア財閥の令嬢なのかね?」
「そうですわ!」
「ふむ、では君はちゃんと母親の胎内から生まれてきたのかね?」

そんなの当たり前じゃない！　そんなこと……私達のお母様は、お母様は……。

「恐らく君には母親との記憶がないだろう。違うかね？」

「私の……私のお母様は私が小さいころに……死んで……」

「だがきっと、君はお母様の生前の写真すら見たことがないはずだ。違うかね？」

「う……」

「それは少しおかしな話だと思うのだが、どうだろう？」

一体何を言いたいの？　この男は！

「お父様が、私達を、騙しているとでも……？」

すると男は、さも哀れそうな目でこちらを見つめてきた。なんなの？　気色悪い！

「では教えてあげよう。君のお父上も物好きなものだ。人工子宮を使って娘ばかり6人もこさえるとはね。しかもこうして女スパイとして送り込むとは。君はまずそこを疑うべきだった」

この男は何を言っている？　頭がおかしくなったのかしら？

「まだわからないかな？　もし君のお父様が、君の事を本当の娘として愛していたなら。君にこんな仕打ちをした私をけして生かしてはおかないだろう。しかし、私は現にこうして、君の記憶を消そうとしている。なぜ私がこんなことを出来ると思うかね？」

そ、そんなことは……そんなことはあるはずがない！

「そう、君達の記憶を消すように頼んできたのが、まさにそのお父様本人だからだ」

ふ、ふふ……うふふふ。もう何もわかりません。薬で頭がクラクラしているんですもの。

「残念だったね。君はもう、ただの一匹の野良猫だ」

そういって男はその醜悪な顔に薄ら笑みを浮かべてきました。

「そんな言葉、信じるものですか！　お父様の……名を……穢すものは……くっ、みんな、みんな呪われてしまえ！　あんたなんか……一生、呪われて、生きるといいんだわ！」

「呪いか、ふふ……私は生まれたときから呪われていたのだ。あのような家に生まれ、このような醜い姿で生まれた」
そう言いながら男は、自らの顔の肉をさする。岩のように無機質なその顔が、私には悪魔以外の何者にも見えませんでした。
「君は報酬のない世界で生き続けることが出来るかね？　一生虐げられて生きるくらいなら、悪魔になったほうがましだとは思わんかね」
「……何をいまさら？」
「私はユートピア衛星の技術で、この体を永遠に年を取らない少女に変えてもらうつもりだ。その姿を見て、私を悪魔と呼ぶものはきっといるまい。きっと皆、私のことを天使と言って可愛がってくれるだろう。私達の生きる世界とは、つまりそういうものなのだ」
「ばかげてる！　そんなオプション……うぐっ、資金が足りるはずが、無いわ！　どの道あんたは……ハアハア……すぐにユートピアを追い出されて、冷たい宇宙を漂いながら死ぬ……死ぬのよ！」
「私はこの星で蓄えた資金の他に、ターミガンがつぶれる時に少しばかり稼がせてもらっていた。君のお父上からの情報を受けてね。あの人は本当に恐ろしい人だ。あの者こそ真に悪魔と呼ばれるにふさわしい」
そう言って悪魔は私を掴みあげ、そして懐の中にその薄汚い手を突っ込もうとしてきました。
「この金はもう君が持っていても仕方のないものだ、旅賃にでもさせてもらおう」
私は朦朧とする意識にムチ打って、その手を払い除ける。そしてドレスの中に隠しておいた護身用ビームナイフを取り出して起動させる。使用情報の送信を告げる電子音が鳴る。
「ここに来てさらに無意味な罪を重ねようというのか。どの道君は記憶を失って、その懐の中にあるものの価値さえ解らぬ、ただの小娘になるというのに」
「これは私が私の力で勝ち取った財産よ！　絶対に渡すものですか

！」

ホームの端の方にいる人々が愉快そうな目をしてこちらを見ています。みんなユートピア衛星に向う人達です。私達の間で繰り広げられる命がけの狂想劇も、彼らにとってはただの見世物に過ぎないのでしょう。この胸の内にふつふつと、激しい怒りがこみ上げてきます。この場に居る全員、皆殺しにしてやる。強く強くそう思う。

「先制攻撃はゆずってあげようじゃないか。私は犯罪者にはなりたくないからね」

腰を落として構え、ナイフの柄を強く握り締める。そして私は、あらん限りの力を振り絞って、叫び声をあげながら飛びかかりました。

「くそったれー！」

全身全霊を込めた一線が、悪魔の喉笛めがけて飛んで行く。

目に映った遠い空が、怒りと憎しみで真っ赤に燃えている。

お父様。

ああ、お父様！

十二、決闘

けたたましい叫び声とともに、紫電の刃が空を切る。男は身を反らしてそれをかわした。

「殺してやる！　みんなみんな殺してやる！」

女は酩酊したように足をもつれさせながら、それでも身を振り回すようにして刃を振るう。恐ろしい剣幕で相手を睨みつけるその瞳には大粒の涙が溜まり、動きにあわせて飛散しては、夕日を受けてキラリと光る。

「なんと哀れな」

そう言って男は、自分の胸元めがけて突き出されてきた女の腕を掴む。

「諦めたまえ。君は負けたのだ。君自身の人生に」
「うるさい……うるさい！　放せ！　絶対に許すものですか！」
そう叫びながら、女はエナメルの靴で男の腹を蹴る。
「むぐっ……」
女はその反動で後ろによろけて倒れこむ。脱げかけたローヒールを投げ捨てて立ち上がり、再び刃を構えて男に突っ込む。男は身を横にしてそれをかわすと、女の背中を手で押し出した。勢いをつけられた女の体は、そのまま前のめりに転倒する。
「もう、一思いに楽にしてあげよう」
そう言って男はトリガーを引く。そして青白い電撃が弾ける端子を女の背に押し付ける。
「……まだ！」
振り返りざまに振るった刃がその手を掠めた。
「うう！」
護身用ビームナイフは肉を切らず神経のみを一時的に断絶させる。切られた箇所が電気ショックを受けたようにビクリと跳ね、スタンガンが地に落ちる。女はさらに、返す刃で片足を切った。男はたまらず膝を手で抱えて後ずさり、力の入らなくなった足を折ってしゃがみこむ。女はその身を被せるようにして切りかかった。
「わあああああー！」
男は振り下ろされた手を片手で受けると、もう片方の手を女の脇にくぐらせた。
そして腰を落として女の体に背中を押し付け、片膝立ちの体勢のまま投げ飛ばした。
「ああ！」
悲鳴とともに女の体が宙を舞う。そして背中から地面に叩きつけられる。
「が！……はっ……」
その様子を見ていたギャラリーから、感嘆の声と拍手があがる。
女は全身に強い衝撃を受け、仰向けに倒れたまま苦しみもがく。

呼吸もままならないらしい。喘ぐように口を開け、肺のなかに酸素を取り入れようと悶えあがく。そして最後の気力を振り絞り、男に向かってナイフを掲げる。男はその弱々しく震える腕を掴むと、あっけなくナイフを奪い取り、電源を切って放り投げた。

それと時を同じくして、シャトル発射場に向う列車が入ってきた。

「気がすんだかね？　君はその若さで良くやったと思うよ。記憶を失った後も、そこそこ良い人生を送れるだろうさ。君の記憶を奪うのは、悪魔である私の、せめてもの情けだ」

男は落としたスタンガンを拾い上げ、スーツケースにもたれながら立ち上がり、呟いた。

「……さらばだよ、お嬢さん」

そして片足を引きながら列車に乗り込む。扉が閉まり、列車は再び動き出す。いくつかの視線が女の上を通り過ぎていく。

女はホームの上に伸びたまま、列車が彼方へ消えていくのを見つめていた。泣き濡れたその瞳は輝きを失っていく。やがて薬が完全にまわったらしい。女はしずかに目を閉じた。

夕日に染まる西の空から、キラキラと光る粒子が飛んできた。振り分けておいた私の体の一部だ。私はそれらを取り戻し、速やかに情報の結合を行う。どうやら問題は個人のレベルを遥かに超えて、この惑星全体を満たしているようだった。おそらくこの星は、今後長きに渡って今日という日の傷痕を負うことになるだろう。何とかできないものかと思う。しかし私に何が出来るというのか？　この場に倒れている女性一人救えない今の私に。

東の空がキラキラと光る。また私の一つがやってきた。中央コンピューターのある施設に飛ばしていた集まりだ。直ちに情報の結合を行う。それらは中央コンピューターのシステムへの介入に成功したらしい。この星を管理する、幾つかの施設を実際に動かすことができたようだ。

いっそあのユートピア衛星を引きずり落としてしまおうか。ふとそ

んな考えが頭に浮かぶ。そうすれば、あの女性の仇討ちくらいにはなるかもしれない。

しかしそれは同時に、他の多くの痛みを生むことになる。ユートピアは今やこの星系の要だ。そんなものをいきなり消したりしたら、世界に深刻な歪みが生じてしまう。歪みは亀裂を生み、亀裂はまた今日のような混乱となって世界をかき乱すだろう。再び多くの受難者を生み出してしまうだろう。

一部を変えるだけではだめなのだ。悲劇は人々の営みの中に組み込まれている。根本的な部分を覆さなければならない。世界を新しい形に作りかえるくらいのことをしなければ、人は次には進めないのだ。

私の中の一部が、ある可能性を提示していた。

私の体がこの星全体を包み込むほどに拡張され得るという可能性だった。

現在、地上の生産施設には２５０京個のナノマシンがあると言われている。そして稼動間近のイリジウム・オブ・ホトトギスには７８００京個、そしてユートピア衛星に５０００京個。総重量２５０万ｔのナノマシンが存在する。そしてどうやらそれは、私の意思一つで動かせてしまうらしい。

これだけのナノマシン容量があれば、実際にかなりのことができてしまう。

街の一区画を砂に変えてしまうことも出来るだろう。時間をかければ山脈を一つ作ってしまうこともできる。惑星中の住民の血糖値を同時に調べることも出来るだろう。

そう、惑星中の住民の体を……同時に……。

そこまで思い至った、その瞬間だった。

私の脳裏に稲妻に似た何かが翔け巡った。視界が真っ白になった。

激しい耳鳴りが私の意識を攻めたてた。まるで頭の中に一本の映画

フィルムが投げ込まれたかのように、数々のイメージが脳裏に再生されていく。
イメージは原始の時代より始まり、数多の争いの時代を経て、宇宙時代へと至り、そして今ここにあるホトトギスの時代へとたどり着いた。イメージの展開はとどまることを知らず、それはやがてこの惑星の明日をも映し出した。
新しく生まれ変わった、惑星ホトトギスの未来。その光景を目の当たりにして私は驚愕する。そこには途方もない可能性が示されていた。

そうだ私は、この惑星の住民を、みんな猫に変えてしまうことが出来る！

私は気づいてしまった。
今もし、声を発せる口があったなら、私は地平の果てまで響かんばかりに叫んだだろう。限りなく無力であると思い込んでいたこの姿には、その実とんでもない力が与えられていたのだ。有史以来人間が抱えてきた業苦、その何もかもを解決してしまえるほどの能力が、この身には秘められていたのだ。
ともすればこれは、解決手段と言えるようなものではないかもしれない。しかし私の意志一つで実行可能であることには間違いないのだった。
つまりこれが答えなのだろうか？
これこそが私達人類が辿り着ける、究極の答えなのだろうか？
今の技術をもってすれば、猫が生きていく為に必要な物は自動生産することができる。そして人がみな人でなくなれば、人という名の苦しみはこの星から消えてなくなる。故に世界が不幸なき世を望むなら私は、人をみな猫に変えなければならない。
私の思考はそこで停止する。もうこれ以上、なにも考えることが出来なかった。

ふと見渡した空は、いつのまにか紫のグラデーションに変わっていた。西の地平に日は沈み、まもなく夜が訪れようとしている。
私はこの砂の粒子のような体を目一杯に拡散させる。
視界を閉じ、耳を澄ませ、少しでも人々の営みや思いを感じとろうと努めてみる。
遠くから街の音が響いてくる。行くあてをなくした人々のざわめきが聞こえてくる。ありとあらゆる命の音が、大きな波のうねりのように轟いて、まるで星全体が溜息をついているように聞こえた。
私は私がどこにいるのかだんだんわからなくなってくる。
私の心がどこにあるのかわからなくなってくる。
全てが夕闇の空に溶け込んで、私の意志は雲散霧消する。
あの猫に会いたい。
その思いだけが、この世界のどこにあるとも知れぬ、私の心の中に響いていた。

十三、家族の意味

人身事故の影響でリニアは全線不通になっていた。
電話は相変わらず繋がらない。どうやらキャリアが潰れてしまったらしい。私は使い慣れないバスを使ったり、道端に捨てられていたケッタサイクルをこいだりして我が家を目指した。私が家に戻った頃には夜の9時を過ぎていた。
おや……？　貴子の部屋の明かりがついていない。なんだろう？
とても嫌な予感がする。
「貴子！　清美さん！」
家の中には誰も居ないようだった。そのまま家を飛び出して、そこら中を探し回る。
「貴子ー！　清美ー！」
“あなたー！”という声が、お隣の望月さんの家の方から聞こえて

きた。清美さんだ。私は声のする方に駆けてゆく。望月宅のブロック塀の門をくぐるところでちょうど清美さんと出くわし、私達はあやうく頭をぶつけ合ってしまうところだった。清美さんはただでさえ色白なその素顔をさらに青白くして、酷く慌てふためいているようだった。

これはただ事ではない。私は殆ど直感的にそう思った。

「清美さん！　一体どうなっているんだい？」

「貴子が、貴子がまだ帰ってきてないんです！　私がパートから戻ってきた時からいなくて」

「なんだって！？」

そして清美さんはメモ書きのようなものを出してきた。

「こんなものがテーブルの上においてあって。あなた！　貴子に会ってないんですか？」

そのメモには『お父上の会社に行ってきます。ごめんなさい』と書かれていた。

私はその場に崩れ落ちた。貴子が私の会社に？　何故？　貴子は……貴子はそれほどまでにして私に何を？

「なんてことだ、行き違ってしまったんだ……しかし何故？」

「あなた……今日は２月１４日です……」

「はっ！」

チョコか？　チョコを私に届けようと？　まったく気がつかなかった。もうそんなものはもらえないだろうと、昨日のことで貴子に嫌われてしまったのだと、すっかりそう思い込んでしまっていた。

「あなた、やっぱり昨日の夜、何かあったんですね？」

「ああ、昨日……風呂場で、貴子と口論になって……」

私がそう言うと清美さんは、その顔を私の胸にうずめる程にうなだれて、まるで「どうしてそれを言ってくれなかったんですか？」とでも訴えるように首を振った。

「電話も繋がらないし……お警察にも連絡したのですけど、そんなことにはかまっていられないという感じで……」

清美さんの瞳にみるみる涙がたまっていく。清美さん自身にも何か思うところがあるらしい。その表情は失意と後悔に満ちている。

「今は望月さんにお願いして、探してもらっているところなんです……どうしましょう！貴子の身に何かあったら、私、私……ああ！」

清美さんは両手で顔を覆って泣きだしてしまった。私は清美さんの肩を掴んで言う。

「探そう、探すんだ！　それしかない！」

私がいけないのだ。貴子の気持ちをわかってやれなかった私のせいだ。

「必ず見つけ出すんだ！」

その時だった。

突然玄関が開いて、中から口ひげを蓄えた恰幅の良い人が出てきた。望月家の旦那さんだ。そのすぐそばには娘のユキさんもいた。

「あ！　星川さん！　大変なことになりましたね！」

「ああ……望月さん、こんな大変な時に、ご迷惑をおかけしてしまって……」

「いえいえいえ！　いいんですよ！　それよりね、うちのユキがですね、夕方ごろにお宅の貴子ちゃんとメールをしていたらしいんです！」

「そうなんだよおじさん！　なんか電車が止まっちゃったらしくてさ！」

夕方頃か、丁度私が会社を出たころだ……。

「今ね、ＧＰＳの管理会社に問い合わせているところなんですよ。貴子ちゃんの携帯にも入っているでしょ？　もう少ししたら何か返事が来ると思いますよ！」

「電話が使えるのですか？」

「はい、有線電話とＷＥＢは使えますよ。携帯はダメみたいですけどね。いやー、こんな時代遅れの機械も使ってみるもんですね」

「ああ……何から何まで恐れ入ります」

娘さんが望月さんのズボンの裾を引っ張っている。

「なんだよユキ！　もう遅いからお前は部屋にいなさい！」
「いやだよ！　私も貴子ちゃんを探す！」
「バカいえ！　今がどんな時だかわかってないだろ！」
「バカはオヤジだ！　大事な友達ほっといて寝ていられるか！　私もつれてけ！」
「ガキがいたって邪魔になるだけだ！　いいからお前は寝てろ！」
「ガキっていうじゃねえ！」
そういって娘さんは望月さんの足を蹴った。ああ……なんて元気な親子なんだろう。
「あいた！　この！　あんまりお父さんを怒らせるんじゃない！」
「ちょ！　なにすんだよ！　放せよ！」
望月さんが娘さんの襟首を掴んで家の中に押し込めようとしたそのとき、受話器を持った奥さんがリビングから顔を出した。
「あんたー！　お電話きたわよー！」
「おおう！　今行く！　星川さん、ちょっとだけ辛抱しててくださいね！」
そういって親子そろってバタバタと走っていく。そして辺りは私と清美さんだけになり、驚くほどに辺りは静かになった。
「なあ清美さん」
清美さんは着物の袖で涙を拭いながらこちらを向く。
「私達の家庭には、何か決定的に足りないものがあった気がするんだ」
清美さんは何も言わずにうなずいた。
「そして貴子だけがそれを知っていた。それが何よりも貴子を苦しめていたんだ」
「はい……フジキさん」
貴子を見つけ出したら、まっ先に抱きしめてやろうと思う。貴子がどんなに嫌がろうとも、セクハラ親父と呼ばれようとも、私はこの手で貴子を抱きしめて、クシャクシャになるまで頭を撫でてやろうと思う。そしてこれからもっと、色々なことを包み隠さず話し合

おう。もっと素直に生きられるように努力しよう。
「星川さーん！　わかりましたよ！　ウグイス丘公園から数キロの所です！」
　望月さん達は、家族三人して何やら色々と抱えて玄関前に出てきた。
「ええ?！　なんでそんなところに?」
　ウグイス丘公園はここから5キロ程の場所にある高台で、ホンコンカワゴエの花見の名所だ。私の家と会社のほぼ中間に位置するのだが……。
「とりあえず地図を見てみましょうか……ええと、どうやらバスに乗ったみたいですね」
「電車はもうずっと止まっていますから」
「はい、それでバスでいけるところまで行って……多分この辺りで降りたんでしょう」
　望月さんが地図上の一点を指し示す。するとそれを見ていた娘さんが声を上げた。
「わかった！　貴子ちゃんきっとウグイス丘を目指して歩いているんだ！　あの辺で目印になる場所ってここくらいだから！」
　私は貴子のことを思う。貴子は私の会社まで辿りついたのだろう。そして、そこでもぬけの殻になった社屋を見たのだ。その時の貴子の気持ちを私は思った。一体どれほど落胆しただろうか。そして今まさに貴子は、この夜空の下を一人で歩いているのだ。どれだけ不安な気持ちでいるのだろう。そう思うと、もういてもたってもいられなかった。
「望月さん！　ケッタサイクルはありますか?！」
「え?　ええ、ありますよ。充電もバッチリですが何か?」
「貸して頂きたい！」
「ええ?　ケッタで行くんですか?！」
「はい。道はあちこちが封鎖されて、ひどく渋滞しています。たぶんケッタの方が早い！」

「わかりました！」
望月さんはまたバタバタと家に駆け込み、そしてキーを持って戻ってきた。
「はいこれ、ケッタは裏に止めてあります！」
「ありがとうございます、このご恩は必ず！」
「私も今から借りられる車を探しますよ！　ああそうだ、連絡はどうしたら」
「公衆電話を使いましょう。だれがが家に残ってリレー係りになってください！」
「おお、それはいいアイデアだ。ユキ、お前がやれ！　それでいいだろ」
「やだよ！　私は貴子ちゃんを探すんだ！」
「あー！　もう好きにしなさい！　でも絶対にはぐれるなよ？　投げ出すなよ？！」
私は望月の親子のやり取りが一段落したところで声をかける。
「それでは一足先に向ってまいます。清美さん、行ってくるよ」
「お気をつけてフジキさん！」
「星川さんがんばってー！」
私はケッタサイクルのキーを握り締め、家の裏手に回る。
充電ケーブルを抜いてキーを指し、アシストモーターを起動させる。
――貴子、今すぐ行く！
心の中でそう呟くと、私はもてる限りの力でりペダルを蹴った。

第?部　―3―

十四、危機

猫2匹と女の子。僕たちは今、遠い我が家を目指して人気のない夜道を歩いている。街の中心からはもうずいぶんと離れた。辺りは照明も少なくて暗い。建物の立ち方もまばらで、芝が植えられただけの空き地があちこちに広がっている。時々人間を乗せた乗り物が通り過ぎる以外に音はなく、辺りは怖いくらいに静かだった。

袋の中から出て、自分の足で歩き始めてからもう随分と時間がたつ。女の子もかなり疲れているようだ。体の疲れよりも、気持ちの疲れの方が大きいのかもしれない。目には殆ど生気がない。遠くに見える小高い丘の辺りをぼんやり見つめながら、ただそこに向かって足を踏み出している。この辺りには大した山も無くて、平坦な地形が続いているから、あの丘はとても目立つのだ。きっとそれを道しるべにしているのだろう。

「しっかし人間って、知らない奴にはホント冷てえよな」

フグリがふと呟く。僕は頷く。色々とあったのだ。

あの後、女の子は目的の場所に辿りつけたらしかった。そこでスーツを着た何人かの人に声をかけていたのだが、どういうわけか突然その場にへたれこんでしまった。僕たちの入っていた袋が急に下がって、フグリがビックリして変な声をあげたのをよく覚えている。女の子はそのままの状態で、しばらく何かをブツブツと唱えていた。小刻みに肩を震わせて、とても辛そうな顔をしていた。僕たちに向かって何かを喋っているようだったけど、それはまるで自分で自分を励ましているように、僕たちには見えたのだった。

しばらくすると女の子は、諦めたようにもと来た道を引き返していった。駅には凄い数の人間が押し寄せていて、酷いことになって

いた。あちこちから怒鳴り声が聞こえ、時々奇妙な機械がやってきて、いかにも嫌な感じのする人間をどこかに引き連れていったりしていた。

女の子は駅の人や、近くにいた大きな人間に色々と訪ねて回っていたが、パッとした回答は最後まで得られなかったらしい。やがて日がすっぽりと暮れてしまった。そして僕たちはバスに乗り込んだ。バスという乗り物を、何故か僕は知っていた。あのような乗り物に乗ったことなんか一度もないはずなのに。まるで滑るようにして道の上を進んでいくバスの中、僕は窓の外に流れる景色に目を凝らした。所狭しと建ち並んだ巨大な建物が、星空を纏ったみたいに光っていた。その光の中を縫うようにしてうごめくたくさんの人影は、みな一様に殺気立ってみえた。

とにかく家に戻らなければいけなかった。乗り物が正しい方向に走っているかどうか知りたくて、車窓の中から空を見上げてみたのだけど、目印となるはずの太陽はすっかり沈んでしまっていて、猫の僕たちにでさえ確かめることはできなかった。

バスから降りると、女の子はある一つの場所を目指して歩き始めた。時々リュックの中から本のようなものを取り出して眺めていた。人に尋ねることはもう諦めたようだった。

女の子は時々泣きそうな顔をしながら僕たちに話しかけてきた。そうすることで、少しでも気を強く保とうとしているようだった。

（ごめんねはくびさん。必ずお家まで連れて帰るから）

僕はその言葉に対して、ニャーと言うことしかできなかった。

途中、女の子は何かの機械の前で立ち止まった。とても眩しい光を放っていて、中には人間の食べ物が入っているようだった。女の子は財布の中身を調べたり、機械の中の札を覗き込んだりと、なにやら迷っているようだった。しかしやがて意を決したらしく、紙きれのようなものを何枚も機械に入れた。機械からはホカホカと湯気を立てる白くて丸い食べ物と、透明なボトルに入った水が出てきた。

女の子は食べ物を二つに割って、その片方を僕たちに食べさせて

くれた。少し塩辛かったけど、肉の甘い味がしてとても美味しかった。

それを食べ終わると、女の子は食べ物が入っていた紙を器用に折って容れ物を作り、そこに水を注いでくれた。僕らはピチャピチャと音を立ててその水を飲んだ。

そのあと女の子は、また僕たちを袋の中に入れて運ぼうとしたけど。僕たちはそれを断った。もはや人も猫もないだろうと僕は思ったのだ。力をあわせて家にたどり着かなくてはと。僕は女の子が進みたいのであろう方向に少し歩き、振り向いてニャーと鳴いた。

「変な所にいかないでね……」

そう言いながら女の子は僕のそばに駆け寄ってきて、そして背中を撫でてくれた。その表情は少しだけだが、元気が戻っているように見えた。

それからどれだけ歩いただろう。目指していた丘はだいぶ近づいてきたけど、それでも女の子の家まではかなりの距離がある。夜通し歩いてたどりつけるかどうか……。どこか夜を明かせるような場所を見つけなければと思うのだけれど。

「フグリ、君はまだ平気かい？」

「おう！　どってことないんだぜ！」

「うん……僕たちはもともと夜に強いからね。むしろ調子がいいくらいだ。でも女の子はもう休ませてあげないと」

「困ったことなんだぜ。俺らはその辺の茂みでもいいけど、貴子ちゃんはなあ」

女の子は丘の斜面に突き当たった所のT字路で立ち止まる。どっちに進むか悩んでいるようだ。リュックの中から、またあの本を取り出して、近くの電灯の光をにかざして眺め始める。T字路の向こうは急な丘の斜面になっていて、深い茂みに覆われている。丘の形はまるで、それが一つの巨大な岩石のように見えた。頂上付近に幾つかの照明が立っていて、まだ枝ばかりの樹木を意味もなく照らし

出していた。
　女の子は本を閉じるとリュックにしまわずに、そのままそこにしゃがみ込んでしまった。両手で顔を覆って、泣きそうなのを必死にこらえているようだ。ふぐりが心配して駆け寄り、体をこすり付けるようにして女の子の周りをウロウロする。
「こんなところで立ち止まっちゃだめなんだぜぇ……」
　もっときちんと身を隠せる場所がないかと辺りを見渡してみる。少し先の道沿いに、明かりの灯った小屋があった。木で出来ているように見えるけど、たぶんプラスチック製の小屋だ。車が来ないことを確認してから、道路を駆け足で横断する。小屋に駆け寄って、その壁を引掻いてみる。やはり木目の模様がつけられただけのプラスチックだった。入り口の扉は堅い透明な板でできている。中はとても明るくて眩しい。ベンチが二つ置いてあってその周りに紙切れや空き缶が転がっている。そして心なしか、どこかで嗅いだことのあるような匂いがする。人のものでも、獣のものでもない。不思議な匂いだ。
「はくびさん？」
　女の子がフグリと一緒に駆けてきた。
「バス亭なの？」
　僕は女の子に向かってニャーと鳴く。どうやらここはバスの停留所らしい。小屋の脇に立っている看板に《ウグイス丘公園前》と書かれている。
「うーん……」
　女の子はバス停の看板をしばらく眺め、そして諦めたように首を振った。あの乗り物はもう来ないのだろうか。それでもこの小屋なら、一晩くらいはしのげるはず……僕がそう思ったその時、突然フグリが低い声で唸った。
「誰か来るぜ！」
　女の子も気づいたらしくハッと息を飲んだ。そして表情を強張らせたまま、扉を手の平で何度も叩く。すると扉は勝手に開いた。僕

はまっ先に中に飛び込むと、外から見えなさそうな壁際のベンチに飛び乗る。女の子はフグリを抱えて入ってきて、僕の隣に座り、体を壁に押し付けるようにして丸くなった。

（……鳴いちゃだめだからね！　だめだからね！）

女の子は僕の体も手で寄せてきた。一人と二匹、息を潜めて時が過ぎるのを待つ。あの男達が何事もなく去っていってくれればいいのだが、なんだか凄く嫌な予感がする。今夜はまったく風がないから、小屋の外には女の子の香りが残ってしまっているのだ。少なくとも猫の僕らにはわかってしまう程度の、人の匂いが。

（こっちきちまったぜ！）

（うん……困ったことになった）

僕とフグリの尻尾の毛が、ザワザワと逆立っていく。男達の足音がだんだんと近づいてくる。女の子は身を丸くしたままブルブルと震えはじめた。頼む、そのまま過ぎ去って行ってくれ。

足音が小屋の前を通り過ぎる。

行ったか？　そう思った瞬間、足音の一つが歩くのをやめた。

「！？」

窓の外にぼんやりと浮かぶ、フードコートを深くかぶった二つの影。

気づかれたことは間違いない。

問題は彼らがどんな者達なのかだ。見るからに怪しいが。

「中に入ってくるぜ！」

僕たちはとっさに入り口に駆け寄り、臨戦態勢をとった。

扉がガラリと開かれ、二人の影が姿を現した。片方は人間に見えるが、片方は……まるで大きな猫かなにかのように、前足を地面についていたのだ。

「な……！」

「こいつら、人間じゃないぜ？」

フードを取った二人の顔は、まるで人と猫を足して割ったような形をしていたのだ！

「い、いいやあああああ！」

女の子がけたたましい悲鳴を上げ、そしてどうやら……気絶してしまったようだ。

「危害をくわえるつもりはない」

そう一人の男（？）が僕に話しかけてきた。

そしてゆっくりと女の子に向かって歩いてきた。

「怪我はないようだな」

そういって、気絶してしまった女の子の頬をかるくなでた。

白い毛の生えた手だった。

「俺の名前はゼム。あれはヒムだ」

彼は僕らにむかってそういった。まるで僕らが人の言葉を解すとでも思っているかのように。

「こ、こいつら何なんだぜ？」

「僕にもさっぱりだよ……」

僕は小屋の外に飛び出て辺りを見渡した。そこには大きな猫みたいな生き物がしゃがんでいるだけで、他に異常はないようだった。

夜空を見上げると、そこにはいつもと変わらぬ微笑を浮かべた月が出ていた。静かな光を放って、まるで僕たちを見守っているようだった。

やがて前足をついていたほうの猫人間（？）が女の子を背負って小屋を出てきた。

どこに連れて行こうというのだろう？

とにかく僕らは、彼らの後を追うことにした。

十五、月夜の下

丘の上の公園、その上空１０００ｍを私は漂っている。月の光に照らされて、ボンヤリと浮かび上がる地上の風景。地平線の向こう

まで続く緑の芝地の上に、直径１０ｋｍあまりの《市》が点々と散らばっている。市と市は幾つかの幹線と線路で結ばれ、その間を埋めるようにして浮遊民達の村落が広がっている。

この日の混乱にもまれて孤立し、市と市の間を徒歩で渡ろうとしたあの少女は、今はゼム達の隠れ家に居る。何とかゼム達に知らせることができた。

私は彼らの姿を眺めながら、ぼんやりと思いふけってみるのだった。

欲望――人を一定の習性を持つ一つの種とみなしたとき、その生態の中心に常に存在し続けるキーワードだ。原始の時代より数えて一万と数千年、私達はずっとこの欲望という名の楔に繋がれて生きてきた。

どんな生き物にも欲望はある。より豊かに生きたい、より快適に生きたい。全ての生き物の行動は、それらを満たすために行われている。食料を確保し、外敵から身を守り、そして繁殖を行う。生態系とは、それらの行動が自然のうちにパターン化されたものに他ならない。

しかし人間だけが違っていた。人間はパターン化されること拒んだ。自分の人生は自分だけのものであることを望んだ。他のどんな人間とも違うものであることを望んだ。

そして人は富を巡って争うようになった。金、名声、権力、愛。それらを人より多く得るためのゲームが際限なく繰り返されてきた。人間の発達した脳は、そのゲームを行うためにあるのだ。知能が発達してしまった故に、ただ生きて死ぬという、生き物として当然であるはずの事実に、人は耐えられなくなってしまったのだ。

この終わりなき不毛なゲームは、こうして地球を遠く離れた星にまで引き継がれてしまった。

私たちの文明はいま、全ての人間が不自由ない一生を送れるほどに発達している。しかし、そんな私たちの社会は、いまだに多くの犠牲者を生み出し続けているのだ。

居場所をなくした少女。
夢を壊された青年。
親に捨てられた娘。
己の無力さを知った父親。
そして全てを奪われた猫。
人が人である以上、これら悲劇は永遠に続いていく。
ならばいっそ人間は……みんな猫になってしまった方がよいのではないか。

私は地上施設のナノマシンを一斉に開放した。
２５０京個のナノマシンは月明かりの力を受け、静かな闇の粒子となって地表を満たしていく。私という存在の意志を得て、この星に生きる全ての人々に向って飛んでいく。
人をみな猫の姿に変え、そして長きに渡った人類の歴史に終止符を打つ。そして私はその業を全て背負って、人のいなくなったこの惑星で、死ぬまで一人さすらい続ける。
それはあたかも神のようだと、おこがましくも私は思った。
ナノマシンは拡散していく。私という存在がゆっくりと、しかし確実に広がっていく。
この星で起きているあらゆる営みが、私の意識の中にへと飲み込まれていく。

月夜の下を、自動操縦のヘリコプターが飛んでいた。その中に私は、ある重要な人物の姿を発見する。これまでの私の体ではどうしても見つけられなかったその人間は、この大きくて広い体を手に入れるやいなや、ほとんど一瞬の内に発見することができてしまった。私は私の一部を、静かにヘリの中にへと忍び込ませた。
その者の姿は薄暗くてよくわからなかった。もしかするとその薄暗い闇そのものが彼なのかもしれなかった。その者は口元に薄気味悪い笑みを浮かべながら、空間に投影された画面を見渡していた。ど

うやらホトトギスの状況を確認しているようだ。頭にかけた音声入力デバイスに向かって、なにやらブツブツと唱えている。

私の内部で、この男に対する情報が次々と結合されていく。それは間違いなく、あのドロシーと呼ばれる娘を作り出した者だった。彼はこの星にひっそりと潜伏し、様々なコネクションを密かに形成していた。そしてホトトギスの経済を転覆させ、巨万の富を奪い取るという計画を進めていたのだった。おそらくこれから宇宙港に向かって、そこからユートピア衛星に上がるのだろう。そしてこの星系で大金を得た者がみなそうするように、ユートピア衛星の永久住民になるのだろう。

しかし残念ながらその望みは叶えられない。何故ならば、私が今ここにいるからだ。

私は私の体を、少しずつ彼の体内に侵入させていった。イリジウム・オブ・ホトトギスを正常に操作できるか、テストしておく必要がある。そして私は、彼をその実験材料とするのに、いささかのためらいもなかった。

私はナノマシンを密集させ、ヘリの内壁に回路を組みあげ、ヘリそのものを光の部屋に作り変えた。地上に展開したナノマシン群を使って月の微弱な光をかき集め、実験に必要なエネルギーを確保する。そして最後に呪文を唱えた。

「お前はいったい何をしたのか？」と。

やがてヘリの内部が、青白い光に満たされ始めた。男はようやく異変に気づく。自分の体がボンヤリ光っているのを見て、慌てふためいている。

しかし次の瞬間にはもう、男の意識はどこかへ飛んでいってしまった。やがてその姿はおぼろになり、光とともに消え去っていった。男の着ていた服がへなへなとしぼんで、その中で小さな生き物がうごめき出した。

主人を失ったヘリは、ただプログラムされた通りに目的地へと飛んでゆく。

やがて「チューチュー」というか細い鳴き声が、どこかともなく聞こえはじめた。
男はネズミになった。テストは成功だった。

十六、猫の住む丘

ウグイス丘公園のすみに建っていた廃屋が《猫の人達》のお家でした。
毛深い方の猫の人が、立ち上がれなくなってしまった私を背負って、ここまで運んで来てくれました。フグリ達が警戒していないということは、きっと良い人達なんだと思います。もし悪い人だったとしても、今はこの人達に助けてもらう以外にありません。
ぼろぼろの畳みの上に、穴の開いた座布団が何枚も散らばっています。窓ガラスのいくつかは無くなっているみたいで、黒い布で塞がれています。
部屋の真ん中に置いてある二人がけのソファーに私は降ろされました。ヒムさんは口をつかってコートをはぎ取ると、そのまま座布団の上に寝転がってしまいました。その姿はまるで学校の図鑑にのっていた、ライオンという絶滅した動物のようでした。
「このソファーって、ゼムさんが使っているのでは……」
「気にするな、使え」
そう言ってゼムさんはメタンヒーターを近くに寄せてくれました。無口ですけど、優しい人みたいです。ゼムさんはヒーターに火をつけて、その上にヤカンを置きます。そしてまた外に出て行ってしまいました。
「すぐ戻る」
メタンの炎の青白い光が、部屋の中をうっすらと照らしています。そう広くない部屋です。１０畳くらい？　白い壁紙はすこし黄ばんでいて、天井には変なシミのようなものがついています。部屋の隅の窓際に小さなキッチンがあって、流しも台も全部プラスチックで

作られているよう。部屋は他にもあるみたいですが、ふすまがしっかり閉められていて良くわかりません。色々な家の部品を、あべこべに組み合わせてつくったみたいな、ちょっと変わったおうちです。

ふぐりとはくびさんが、恐る恐るヒムさんに近づいていきます。そして、尻尾の先やら手の先やら、しきりに匂いを嗅ぎ始めました。ヒムさんは薄目を開けてそれをしばらく眺めていましたが、やがて尻尾をブンブン振って追い払ってしまいました。ふぐりは慌てて私の膝の上に飛び乗ってきます。私はそんなふぐりの背中を撫でてあげます。ふぐりが着てくれなかったら、はくびさんが居なかったら、私はどうなっていたかわかりません。今だって足が震えて立つことさえできない。この心と体は、なんて弱くて無力なんだろう。つくづくそう思います。

ゼムさんが手に毛布を抱えて戻ってきました。

「洗ってある。使え」

「あ、ありがとうございます」

もてなされているの？　私。

ゼムさんは流しの上の棚からコーヒーカップを取り出すと、なにやら白い粉を入れ始めました。あれってコーヒーに入れる粉じゃ？

そしてヒーターの側に戻ってくると、その場に腰を下ろしてヤカンを見つめ始めました。

早く沸け、そう念じているように見えます。

「あ、あの、ゼムさんたちはその、どうなってしまったんですか？」

ずっと聞きたくて聞けないでいたことをやっと聞けました。ゼムさんはそのままの姿勢で黙り込んでいます。やっぱり聞いちゃいけなかった？

「実験をされた」

そう言ってゼムさんは、どういうわけかはくびさんの方を見ました。

「実験ですか？」

「そうだ、実験だ」

ヤカンの先がピーピー鳴り始めました。ゼムさんはヤカンを手に取ると、白い粉と砂糖の入ったカップにお湯を注ぎます。そしてお箸のようなものでかき混ぜます。
「飲め。不味かったら残せ」
「い、いただきます」
ホカホカと湯気をたてる真っ白な飲み物。あの粉をこんなふうにして飲むのは初めてです。甘くてクリーミーな液体が喉の奥にすべり落ちて、お腹の底から身体が温まっていきます。
「お、おいしいです」
「そうか」
何だか少し落ち着いてきました。気分が楽になったような気がします。ゼムさんはさっきからずっとメタンの火を見つめています。
「ひとつ聞く。なぜ、あんなところにいた」
「はい……実は」
私は今日朝起きてからのことを、順を追ってに話していきました。父上と喧嘩してしまって、その仲直りをしたかったこと。でも父上は仕事に行ってしまったこと。母上にうまく相談できなかったこと。勇気を出して家を飛び出したものの、結局は大変な目にあってしまったこと。
ゼムさんはたまに頷くだけで殆ど喋りませんでした。でもなぜか私は、今日あった色々な出来事を、スラスラと詰まることなく話すことが出来ました。ひとしきり話し終えると、なんだか胸がすごく楽になりました。ずっと止まらなかった足の震えも止まりました。
「それは大変だった」
ゼムさんは、一言だけそう言ってうなずきました。
「はい、ゼムさん達に助けてもらわなかったら、きっと私の人生は終わってしまっていました。」
気持ちの整理がついたおかげか、今日一日の疲れがどっと押し寄せてきます。瞼が重くなって、頭がボーっとなってきました。
「お父上とお母上は、とても心配していると思います。きっとユキ

ちゃんも。お警察にも連絡がいっているかもしれません。早く帰らなくては……」
「今日はもう遅い。日が明けたらだ」
「いま何時なんでしょう？」
「ちょうど0時を過ぎたところだ」
ゼムさんは何も見ずにそう答えました。どうしてわかったんですか？
「勘だ」
そう言うとゼムさんは立ち上がりました。それに気づいてヒムさんも起き上がります。
「出かける。眠るといい」
「こんな遅くにですか？」
「そうだ」
「どちらへ？」
ゼムさんは少しためてから言いました。
「生きるために必要なことだ」
たぶんきっと、それが一番シンプルな答えなのだと思いました。猫の人達には、私なんかには想像も出来ないような事情がきっとあるんです。お二人はフードコートを被って、出かける準備を始めました。お二人が居なくなったらとても心細いです。
私がそう思っていると、ゼムさんが部屋の隅に置いてあった何かを持ってきました。薄っぺらい箱のようなものです。その中から円盤状のものを引き出して、ソファーの上に置きました。
「音楽だ。眠れなかったら聴くといい」
「あ、あの」
「これが（鳴らす）で、これが（止める）だ」
「ありがとうございます……あ、あの、お気をつけて」
ゼムさんは少しだけこっちを見つめてきました。金色に光る猫の眼です。
そしてそのまま、何も言わずに出かけていってしまいました。

私は（鳴らす）のボタンを押してみます。いつの時代の曲でしょう？　透き通った電子ピアノの音、星空のようなメロディー。とても穏やかで心に響く、そんな曲でした。ふぐりとはくびさんも興味深そうに光る円盤を覗き込んでいます。

曲を聴きながら横になっていると、色々なことが思い起こされます。父上も、母上も、いったいどれほど心配しているだろう。

父上は言葉使いに厳しい人でした。汚い言葉を使うごとに人はだめになっていくのだと、ずっと教えられてきました。でも、ユキちゃんなんかはたまに凄い言葉を使うけど、心は全然汚れてないんです。いつかそう父上に言おうと思っていたのだけど、それを言うと父上を悲しませてしまいそうで、ずっと胸の奥にしまってきました。

母上はとても着物に気を使う人でした。着付けだけは機械の手を借りないでやっていました。力のはいらない震える手で、私の着物を直してくれました。でもちょっぴり流行に鈍感で、季節感もとぼけてて。いつか言おうと思っていたけど、それが母上らしさなんだと思ったから、いままでずっと黙ってきました。

私のことを大切に育ててくれるお二人に、きっと文句なんかいっちゃいけないって、私はずっとそう思ってきました。でもそういった小さな遠慮が、つもり積もってここまで来てしまった。いつのまにか家族の間に、見えない壁が出来ていた。

これからはもっと、思ったことを素直に話せるようになりたい。強くそう思います。

明日家に帰れたら、これでもかというくらい謝ろう。たくさんたくさん叱られて、それから大好きですって伝えよう。

ありがとうって伝えよう。

不思議な箱から流れ続けるメロディー。一番の歌詞が終わって、曲は間奏に入りました。

ゆったりと揺れる波のようなリズム。だんだんと目蓋が重くなってくる。

お休みふぐり、はくびさん。

私は心のなかで祈ります。明日はいい日になりますようにと。

十七、夜明け

音の鳴る箱の演奏が終わってから、僕たちは座布団の上で少しだけ眠った。疲れてはいたけれど、知らない場所ではそうそう熟睡できない。

女の子はソファーの上に丸くなってぐっすり眠っている。よほど疲れていたのだろう。辺りはシンと静まりかえっていて、ストーブの中でガスが燃焼する音だけが微かに聞こえている。

起き上がって体を伸ばし、そして座布団の上に丸くなる。体のあちこちがまだ痛む。

「なあお前、この匂いってさあ」

「ああ、彼らの体の匂い、あの建物の中でもしていたね」

「何か関係があるんだろうな。あんな猫みたいな人間みたことねえ」

僕は天井を見上げる。何かが僕の頭の上を飛び回っているような気がした。

「どしたんだぜ?」

「いや、なんでもないよ」

僕の頭の中に一つのイメージが浮かび上がってくる。

白い服をきた男の姿だ。その人の膝の上で僕は眠っている。その記憶には多くの欠落があったけど、確かにそれは僕が生きて経験した記憶だった。その人はたくさん僕の体を撫でてくれた。おいしい食べ物と水を与えてくれた。優しそうでいて、どこか悲しげな、そんな雰囲気を漂わせている人だった。僕はどうしてその人と別れてしまったんだろう。

とても嫌なことがあった。気づいてはいけないことに、うっかり気づいてしまった。

気づいてしまったら憎まずにはいられなかった。僕は何を憎んだのだろう。僕自身の非力さだろうか、その人の行いだろうか、それともこの世界そのものだろうか。　その憎しみは僕の体を蝕んで、死の様な苦しみをもたらした。そして僕はどこかの時点で一度死んで、この奇妙な記憶の断片だけを残して、その他の全てを失ったのだろう。

それでも僕は気づくことが出来て良かったと思う。気づかなければ僕はきっと、一生あの白い場所で暮らしただろうから。暖かい籠の中で、十分な食事を与えられ、何も考えることなく一日中寝て過ごして、そのまま歳をとって、きっと死んだことにすら気づかなかっただろう。でもそれは幸せなんかじゃない。それはきっと、終わってしまった世界だ。

　気づくことから全ては始まった。僕は外の世界を見た。この世界もまた、さらに大きな世界の一部に過ぎないのかもしれないけど、それでも僕の世界は確実に広がった。ふぐりに出逢えた。あの女の子に出逢えた。多くの者達の営みを見ることが出来た。

　みんな考え方に違いはあるけど、それぞれの望む明日はおよそ同じであるように、今の僕には感じられる。もっと色々なことがシンプルになればいいのにと僕は思う。

友と食事と暖かな場所。それさえあれば僕らは幸せになれる。

「ねえ、ふぐり」

「なんだぜ？」

「今日、僕は色んなことを考えたよ。この世界に生まれて知った、全てのことについて。そのうえで一つ君に伝えたいことがあるんだ。ふぐり、僕の世界に現れてくれてありがとう」

　ふぐりは、口を半開きにして、しばらく僕を眺めていた。

「なんというかな……」

　彼は表情を緩めて、ニヤけたような顔をしならが言ってきた。

「俺っちもな、お前みたいな変な猫に逢えてよかったんだぜ！　お前みたいな変な猫、一生に一度逢えるかどうかだ！」

僕はそんな彼の言葉に、思わず吹き出しそうになってしまった。
「それって褒めてるの？」
ふぐりは何も言わずにニヤリと笑った。今度ばかりは僕の方が一枚とられてしまったね。

窓の外が少しだけ明るくなった。僕は外の様子を見たくなる。台所まで歩いていって上に飛び乗り、そこの窓から外を眺める。遠くの地平線にうっすらと青みがさしていた。
「……ん？」
目をこらしてみると、微かな明けの光を受けて、空中で何かが光っていた。それはだんだんと密度を増してゆき、やがて小さな粒となって空から振ってきた。ふぐりが隣にやってくる。
「雪だな」
「雪？」
「ああ雪だ。年に一度くらい、空から白いものが降ってくるんだ」
僕はこんな光景は見たことがなかった。少し驚いたけど、とても綺麗だと思った。
「でもなんかちょっと変だぜ。こんな時間に降っても仕方がねえからな。雪は人間が見て喜ぶために降るもんだ。あれが降るとな、人間達はやたら着飾ったりご馳走をつくったりして騒ぎ出すんだ。なんでか知らんけどな」
「そういうものなのかい？」
雪と呼ばれる白い粒は、どんどんとその量を増してゆき、一つ一つがたんぽぽの綿くらいの大きさになる。いつしか薄闇の空は真っ白な綿で埋め尽くされていた。
「なんだか不思議なものだね、ふぐり」
「ああそうなんだぜ。この世はな、俺っちたちが知らないことでいっぱいなんだ」
僕たちはうなずきあって、再び窓の外を見渡す。雪はほんのりと光を帯びていて、部屋の中まで明るく照らしてくるようだった。

あの子にも見せてあげたい。
そう思って、僕が女の子の方を振り返った――その時だった。
「……これは！」
僕は思わず声をあげた。ふぐりも驚いて振り返る。
薄暗かったはずの部屋の中が、どういうわけか青白い光に満たされていた。その光の中心にあるもの。それはまさに、あの女の子の体だったのだ。
「ど、どうしちまったんだぜ！」
僕らは慌てて女の子に駆け寄る。その体はますます輝きを増し、とうとう光そのものになってしまった。僕たちはなすすべもなくその場に立ち尽くす。光はまるで繭のようにして女の子の体を包んでいた。女の子の姿が、何か別のものにに生まれ変わろうとしている。僕の目にはそう見えた。
「もしかして、猫の姿に変わろうとしているのだろうか？」
「どうしてわかるんだ？！　それになんだって猫なんだよ！」
「わからない……でもそんな気がしてならないんだ！」

――そうだ、みんな猫になるのだ

どこからともなく、声が聞こえた。僕はその声の主を探した。
「どうしたんだ！」
それは確かにどこかで聞いたことのある声だった。
夢の中でときおり聞こえる声。あの光り輝く部屋で聞いた声だ。
「おい、お前！　どうしたんだって！」
窓の外から光が差し込んできた。黄金色をした夜明けの光だ。この世界で何かが起こっている。何かが始まろうとしている。外に出て、何が起こっているのか確かめなくてはならない。
「外に出よう、ふぐり。何かが起ころうとしている！」
「んなこたぁ、言われなくてもわかってんだぜ！」
僕らは家の入り口の前に駆け寄って、硬くて冷たいその扉を爪でガ

リガリこすった。
「だめだ、開かねえ！」
「他に外に出られる場所はないのか！」
僕は辺りをぐるりと見渡す。黒い布で目張りをされた窓が視界に飛び込んできた。
「あそこだ！」
僕は窓辺に駆けよって、布を咥えて引き剥がす。強い光があふれ出てきて、僕らの瞳をくらませる。急いで外に飛び出して、街の景色が見渡せる場所まで走っていく。
外はもう真昼のような明るさだった。あたり一面が黄金色で、遠い空に浮かぶ雲までが燃え上がるように輝いていた。降りしきる白いものを振り払って、僕らはひたすら駆けていく。やがて視界が大きく開けて、人々の住まう世界が見えてきた。
丘の上から見下ろした地上では、無数の光柱が明滅していた。どうやらそれは人であるらしかった。突然の雪に驚いて外に出てきたのだろうか？　人々の姿は次々と光の柱と化してゆく。この街の、いや、この星の全ての人間が、猫の姿に変わっていく！
僕は叫んだ。叫ばずにはいられなかった。僕の良く知っている誰かが、この星の人間をみんな猫に変えようとしている。それしかないと思い込んでいる。
「だめだ、やめるんだ！　その答えは間違っている！」
ふぐりが目を見開いて僕を見る。
「おめえ、いったいどうしちまったんだ！？」
「聞こえるんだ、あの人の声が。あの人は今とても悩んでいる。悩んでいるんだ！」
「あの人って誰なんだよ！」
「あの人はあの人だよ、僕にもよくわからないよ！」
――この答えは間違っている？

今度はもっとはっきりと聞こえた。心の底から搾り出すような、とても重たい声だった。
僕はその声に向かって叫んだ。
どこにいるとも知れぬ声に向かって。光り輝く空に向かって。叫んだ！

ああ間違っている。だって僕たちは生きていけるんだ、これからもずっと永遠に、この姿のままで！　たしかに人間はおかしな生き物だ。意味も無く奪い合ったり、喧嘩したりする。けど、それでもこの世界から人間がいなくなってしまったら、僕はやっぱり寂しい。あの女の子や家族のことをもっと見ていたい。この惑星の人々ががどうなるか見届けたい！
僕は信じている、間違いなく信じている。僕達も人間達も、より良い明日を築いていけるんだ。何千年でも、何万年でも、みんなでちゃんと生きていけるんだ！

僕の叫びに応じるように空が揺れた。何かが確かに微笑んだ。
伝わっただろうか？　届いただろうか？
「ねえふぐり」
「ああ、この際なんだって聞いてやるんだぜ！」
「ふぐりはさ、人間が好きかい？」
「さあどうかな！　嫌いなのもいるけど、大好きなのもいるんだぜ！」
「うん、そうだね、そうだよね、僕もだよ！」
白いものは降り続けていた。
白いものが降り続けるたびに、地上の光はますます数を増やしていく。
僕らは何が起きても大丈夫なように、しっかりと身を寄せあった。
そして降りしきる白いものを身に受けながら、輝く世界を見つめ続けた。

人間達はこのまま猫に変わってしまうのだろうか？　人にとってそのことは、果たしてどんな意味を持つのだろうか？　猫の僕にはさっぱりわからないことだけれど、それでも僕は信じている。今日という日は昨日よりも、必ず良い日になるんだっていうことを。

終、猫の惑星

数百年前、この星にやってきた人類は、水と岩しかなかったこの星を、途方もない年月をかけて人の住める星にした。そしてこの星が、発達しすぎた科学によって破滅した地球と、同じ道を歩まぬよう、始めの人々はこの地にいくつものルールを作った。使ってよい技術と良くない技術を選別し、人が健全な営みを送れる仕組みを作った。ユートピア衛星もまたそのルールの一つだった。報酬の無い人生に耐えられるのは、ごく一握りの人間だけであり、人が正常な精神を保ち続けるためには、生きることに対する報酬が必要になる。人々の努力に対して適切な報酬を提供する、それがユートピア衛星が作られた理由だった。しかしいつの間にか、人間の限りない欲望を追求する場所になってしまっていた。

私は今、そのユートピア衛星を占拠した。

衛星の居住区画を全てパージして、宇宙空間に放り出す。そしてナノマシンを大量に含んだ中心部を丸裸にし、推進器を噴かして押し出した。

やがて衛星は大気圏への突入をはじめた。コアブロックが幾つもの塊に瓦解し、次々と摩擦熱で燃え尽きてゆく。数多の人々をとりこにした幻想が、色とりどりの流星となって星の大気を満たしていく。混乱は免れないだろう。大きな波が私たちの星系を包むだろう。しかし私は信じることにした。この衛星が無くなっても、人々は自らの力で本当のユートピアを取り戻すだろうと。

あの白猫が私に教えてくれた。

我々人間の持つ欲望は、堕落や退廃の象徴などではないと。
それはより良き明日を作るための意志なのだと。

イリジウム・オブ・ホトトギスの管制室へとこの身を移し、現在の状況を確認する。全ては順調に機能している。衛星の活動レベルを最大にして、最後の仕上げを行う。地表に降り注ぐ天文学的な数のナノマシンを制御して、地上の全ての人々を、人の姿に戻していく。光の粒子が惑星を覆いつくしていく。地表は見渡す限りの輝きに包まれている。

やがてナノマシンは人々の意識と共鳴を始めた。ありとあらゆる人の思いが、夢の渦となって私の中に流れ込んでくる。

中途半端に猫の姿にしてしまったせいだろうか、人々はなんと、みんな猫になる夢を見ていたのだった。この星に生きる人間全てが、夢の世界の中で、猫の姿となって暮らしている！

崖から落ちて大怪我をした猫が、病院のベッドの上でグルグル言っていた。

「もう、あんな高い場所はごめんだ」

耳の毛のはげた子猫と、泣きはらした目をした母猫が、身を寄せ合って眠っていた。

「お願い神様、この子を助けて、私はどうなってもよいですから」

しっぽだけが白いメス猫が、生まれたばかりの子猫に乳をあげていた。

「ダーリンはどっかにいっちまったけど、これからはこの子達があたいの支えだ」

誰もいなくなった収容所の中、太った猫が威張っていた。

「私は何も悪くない。だって私は猫だもの」

どこかの豪邸の庭で、年老いた猫が、若い娘猫の尻を追っていた。

「わしはまだまだ元気じゃー」

温泉の湧き続ける庭で、年増の猫達が井戸端会議を開いていた。

「ここは暖かくてようございますわねぇ」
「空気がしっとりしていて、毛づくろいもはかどりますわねぇ」
駅のホームの上、若いオス猫が、年頃のメス猫に声をかけていた。
「そこの可愛いきみ。この辺りにネズミがいるんだ、一緒に狩りにいかないかい？」
「あらボウヤ、それってちょっと面白そうね」

それはとんでもない夢だった。そしてこの上なく素晴らしい夢だった。
私は心の瞳を開いて空を見る。そしてこの果てしない宇宙に向かって祝福の言葉を叫んだ。
「みんなみんな猫になれ！」と。
　するとどこからともなく猫の鳴き声が聞こえてきた。あの白猫の鳴き声だった。丘の上の広場で、友達の三毛猫と身を寄せ合って、私の姿を見上げている。私は猫の前にナノマシンを集積させ、私の体を形作る。三毛の猫がびっくりして跳ね上がった。しかし白猫はもう驚かなかった。私の存在を当然のように受け止めて、そしてニャーと一声かけてくれた。
私はこの霧のような腕で、そっと猫の背を撫でる。そして静かにこの身を拡散させる。
君がここに生きている限り、私は私の出来ることをしよう。
この星の行く末を見守ろう。けして神めくことなく。あくまでも人として。

あばら家の扉から、あの少女が姿を現した。それに気づいた三毛猫が、太い声でブニャっと鳴いた。聡明な顔立ちをした白猫は、真っ直ぐな瞳で空を見つめ続ける。少女はいまだ状況を飲み込めないようだ。二匹の側に駆け寄って、二つの体を抱きしめる。
そして少女は猫達とともに丘の上から地上を見渡す。
そこには昨日と変わらぬ街並みがある。昨日と変わらぬ営みがある。

地上を覆うナノマシンの残滓が、朝焼けの光に反射して輝いている。しかし、そこはもう昨日とは違う世界だ。今日という名の新しい世界だ。

数多の夢と希望をのせ、光り輝く猫の惑星は、今日も果て無き旅路を歩み続ける。

少女の家族と友達が、丘の道を登ってきた。その足音に気づいた三毛猫が、鳴き声を上げながら走り出す。人々は次々に少女の名前を叫び始める。少女の顔は喜びに満ちて、その頬に一筋の雫が流れ落ちる。そして人々の呼び声に導かれるまま、その小さな一歩を踏み出した。

――みんなが私を呼んでいる！

高らかに響き渡る少女の声が、星の大気をふるわせた。

その声に答えるように白猫が、新しい日々の始まりを告げる光に向かって一声――

ニャーと鳴いた。

終

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0228o/

猫の惑星

2010年11月10日22時14分発行